

書文選集

354-355

選文俗類

訂校字林藤伊

圖書社

岩波文庫

364-365

風俗文選

伊藤松宇校訂



岩波書店

例言

例

一 風俗文選に異本が凡そ四種ある。最初著者許六が「本朝文選」と題名したのを、後に至り支考が「本朝」の二字に異論を唱へた結果遂に風俗文選と改題したる際、同時に露通の『返店文』を削りて之を發行したるものが今日専ら世に行はるゝ風俗文選である。風俗文選の注釋で名高い「犬注解」も之に據たのであるから作者列傳の中、吾仲と凡兆の間にある露通の名の漏れてゐるのは注解の著者介我も之を知らざる爲めである。古版本の風俗文選でも、作者列傳の有るのと無いのとあり、流布本の風俗文選でも肝要たる目次のないものがある。今本書を校訂するに方り流布本を底本とし、流布本に無きものは本朝文選本及異本本朝文選本に依り之を補ひ其異同を釐頭に掲ぐることにした。

書

一本朝文選と、古版本の風俗文選とは共に文章の總目錄ありて、又卷々の種類ごとに目次が附記されてあるが、爰には繁を避けて卷頭に總目錄のみを掲げて索引の便宜上、之れに丁附を附することにした。

一 本文に使用してある、用語用字は明らかに、誤謬なりと認むるものにも、さかしらを用ゐず、原書を尊重せる意味に於て其儘に校訂した。

一 假名遣は萬葉假名を平假名に改めたる外、すべて原書の通りに校訂した。

一 文中の振り假名は、原本片假名であるが、流布本の通り平假名とした。

2

一原本漢字音の濁りて讀むべきものは、本字の肩に一々濁點が施してあるので、原書の通りに校訂した。讀者は此點にも注意して讀んでほしい。

一本書第四卷、雜說中『丈艸は松本の閉關にたふる』以下の文は、古版本の原書五行程改竄したる痕跡ありくと見えてゐる。今之を本朝文選より抄出して其異同を籠頭に示して置いたが、當時芭蕉の同門中之が品隲に入りたるものゝ抗議にかゝりたるものと見えて流布本の通り改刻したのであらう。彼の文章は『不知作者』とあれども正しく許六の筆になつたる事は疑ふ餘地もない。露通の返店文と此雜說の改刻は共に岩波文庫本に依て公表せられたものと云うても取て過言でないことを茲に述べて置く。

昭和三年の初夏綠滴る關口の芭蕉庵に於て

校訂者 伊藤松宇識

風俗文選目錄

五老井許六選

○卷之一 (一八頁)

辭類

柴門辭

芭蕉翁

瓢ヒヤウ辭

許六

示ス秋之坊辭支考

示ス古鏡辭

李由

逢新道心辭丈艸

燒蚊辭

嵐蘭

鉢扣辭

去來

四季辭

許六

○卷之二 (三〇頁)

賦類

南都賦

汶村

鎌倉賦

許六

吉野賦

丈艸

松島賦

芭蕉

富士賦

嵐蘭

湖水賦

李由

前マカ鷹山賦

支考

後鷹山賦

去來

○卷之三 (四四頁)

賦類

附註

鼠賦

去來

旅賦

許六

揚揮豆賦

毛紉

四シ穀廬賦

李由

閑居賦

汶村

招魂賦

支考

譜類

百鳥譜 支考 百花譜 許六 山水譜 許六

○卷之四 (六八頁)

說類

義虫說 素堂 柴賣說 凡兆 閉關說 芭蕉 師說 許六

名二阿段二說 許六 出女說 木導 雜說 不知作者 愛寐說 万子

艸字藤說 程己 草刈說 露川 山芋說 吾仲 嘲二宵惑二說 毛統

解類

獲麟解 許六 長雪隱解 許六 藪醫者解 汶村

○卷之五 (八四頁)

記類

落柿舎記 去來 幻住庵記 芭蕉 十八樓記 芭蕉 五老井記 許六

九華亭記 汶村 琵琶亭記 許六 風水二臺記 許六

紀行類

鹿島紀行 芭蕉 南行紀

序類

李由 許六

曠野序 芭蕉 猿蓑序 其角 宴柳後園序 支考 要文集序 許六
 近江八景序 千那 畫樓繪台序 許六 四絕文章序 李由 麻生後序 許六
 銀河序 芭蕉 番椒序 野坡

○卷之六 (一〇五頁)

箴類

飲食色欲箴 許六 聽箴 許六

銘類

杙銘 芭蕉 東銘 支考 酉銘 許六

雲華園銘 汶村 飯鮓銘 吾仲 左右銘 芭蕉 茶碗銘 嵐雲
 是非齋銘 許六

錄

嵐關誄 芭蕉 丈艸誄 去來 去來誄 許六

○卷之七 (一二三頁)

歌類

挽歌 支考 鄙歌 五首

文類

校訂者云
古版本返店
文ノ目錄ヲ
刷ル今本朝
文選ニ依リ
テ之ヲ補フ

佛諸發願文 浪化
弔古戰場文 芭蕉

聖靈祭文 李由
返店文 路通

剃髮文 支考
斷絃文 許六

祭猫文 支考

○卷之八 (一三六頁)

傳類

東順傳 芭蕉

牧童傳 支考

公平傳 汶村

五郎四郎傳 支考

靈豆傳 去來

疝氣傳 李由

直指傳 許六

碑類

壺碑 芭蕉

笠塚碑 李由

○卷之九 (一四八頁)

辯類

詩歌俳諧辯 丈艸

定先後辯 支考

豆腐辯 許六

天狗辯 木導

手足辯 汶村

人參辯 許六

射御辯 許六

表類

雨乞表 許六

廟佛骨表 其角

讀佛骨表 厚爲

陳情表 支考

○卷之十 (一六六頁)

論類

旅論

許六

仁不仁論

北枝

蕎麥論

許六

頌類

俳諧頌

李由

蕎麥切頌

雲鈴

酒德頌

朱廸

石臼頌

芭蕉

讚贊類

西行上人像讚

芭蕉

神農像讚

涼菟

美少年畫贊

許六

團扇讚

荊口

入學贊

許六

紫芝岡贊

許六

書類

院艶書

日蓮上人報書

校訂者云

本目錄ノ終

ニ本朝文選

目錄畢トア

校訂者云

題誠舊本本

朝文選トア

リ後風俗文

選ニ改ム

本朝文選ニ

五老井の許

六新古の文

を編て本朝

文選と題す

トアリ

風俗文選序

月澤律師李由述

龜城の羽官子。五老井の許六。滑稽俳諧新古の文章を拾ひ集めて風俗文選と題す。むかしやまとの文を集めてこれを

本朝文粹といへり。我おもふ。此文粹は。

本朝の人の述作にして。文の躰。まつたく漢文なるべし。今許六が文選は。和國の文章にして。其躰おのつから。漢文にかなへり。むかしより。やまと詞おほしとも皆々双紙物語のたくひのみにして。

本朝の文章と稱すべき物は。今此風俗文選の事なるべし。夫漢文は。文字の數を定め。韻をふみて。其格まきれかたかるべし。されと同じ文章をもて。文選と。古文とに記する所。

其躰相違あれは。漢文とても慥ならずと見えたり。まして和文には。文字の數さたまらず。韻字とてもなし。しかるを。去來か鼠賦に。五音相通のかなをもて韻とす。是和文に。韻をふめる一格なり。あなから韻を用るにもよらす。其事にしたかひ自由なるべし。向後躰をわかつ事は。其題の趣によつて。其躰をさたむるを。學者心得とすへし。江東僧律師李由字買年於四梅廬序

風俗文選序

落柿舎去來

序

世に俳諧の文あつて。其集といふものいまた聞す。先師一たひ思ひ立給ふ事侍れと。心になふ物希なれはむなくやみぬるも十とせ余。五とせなるらん。今や門葉のたれかれ。風雅に腹ふくるまゝに。管城に槩を横へ文場に臂をふるふものすくなからず。今此文集に斧を入て。始に柴門辭あり。終に頌讚の風流を盡す。或は書あり。或は論ありて。説賦のまことを述。文誅の哀を残す。自堪能の才ありて。許多の躰をもらされず。これを千歳の後に施して。はいかい文章の手本とせば。彼童子の師の。句讀を教ふる類ならんや。此文をしれる者は。此道をしる者なり。作者みつから五老井先生と稱するものは。湖東森氏六子にして。虚實にあそへる人といふへし。しからは今の名望を感じて。此文選を戀さらめかも。寶永元秋日序。

風俗文選序

東華坊支考

もろこしに文選ある時は。吾朝に文選なからんやと。ことしえらひてあそふものは。湖東の武子。許羽官なり。凡文章は。周孔の心を傳へ。莊孟の筆に鼓舞せられて。和漢に心を傳ふれども。姿を傳ふるものは又まれ也。人は其すがたはつたふへく。その心はつたへかたしと。そおほえぬる。文章に何の心かあらん。心は天地の心なり。すがたは世々に變化して。其變化をされる人をこそ。姿をされる人とはいふなれ。昔の人の下惠をまなへるも。道につたふへき心なれば。すがたの變化をまなべる人とはいふへし。されは源氏物語は。はじめ終あけてたやすからず人の見てあそぶ處も巻く／＼にまち／＼なるべし。狹衣は。歌にあそべりとそ。うつほ。竹とり。おちくほの草子など。清少納言が枕双紙は見る事にあそび。聽事にあそびて。はしめ終あらせむとせば。いかでかは。榮花物かたりとかいへるものを。我いまだ見ねばよくもしらす。伊勢物語のこと葉はぶきたるをさへ。土佐日記はまたさらなり。日記は。おのれがおほえ書なれば。人の見て。えしらぬ事をも。我は見てあそぶ覽かし。記と紀とは。おなじ心ながら。旅には紀行といふ事もあるにや。世に平家物語といふものありて。ひとへにもふの草紙にはあらせしとて。祇園精舎の鐘の聲に。無爲の遊びを書添たるな

り。平家物語とつけたる名も物に對したる名なるべし。鴨の何がしは。方丈の記に遊べる人也。發心集といふ物は。さるものともおほえぬにや。四季物語といふものありて。其人の作にはあらずとこそ。撰集抄のみいとたふとし。歌の心のきすくなるは。まして。撰者の法師のあそび處なるべし。兼好法しのつれ／＼草は。それにはおとりても侍らんか。硯にむかひて。物をさだめねば。世情の境目にあそぶ合點と見えたり。あるひは宗祇の終焉記も。あるひは長嘯の舉白集も。おのれ／＼が心にあそひて。むかしのすがたをつたへすといふ事なし。天はこれをもて月にあそび。地はこれをもて花にあそぶ。龍吟すれば雲起り。虎嘯けば竹すゞし。梅に鶯。紅葉に鹿。いつれかかたちを傳へずしてあそはむ。先師。つねにいへりけり。漢には之乎者也の四字をもて。貴賤尊卑の詞をわかち。和には手爾遠波の四字もて。暑し涼しの時宜をととのふ。文章はまして。手爾遠波の事なりとぞ。されば一句の長短をしらす。二句の句讀をしらされば。よむ者息のつぎはをわすれて。海雲海鼠腸と。すゞりつゞけたらんは。はてしなき心やすらん。世はかくそしりてもあそび。又そしられてもあそぶ中に。我は此文選の時をほめて。あそぶものなるべしとか。

寶永元年甲申臘月日

風俗文選自序

五老井許六選

文は眞道の器也。孔子も余力あらは。これを學べといへり。吾朝往昔のむかしより。大和詞の文筆。庫にみち車にみてむ。されと。世におこなはるゝ言葉。おほくは女官の筆にして。源氏狹衣のたくひ。男女の中をつくし。實は歌よますべき道ひきなるべし。共に歌連歌の文法にして。誹諧文章の格式一言もなし。先師芭蕉翁。始て一格をたてゝ。氣韻生動をあらはせり。たとひ鄙言漢字をまじへたりとも。心は吉野たつ田の花紅葉をうらやみ。和歌の浦に志をよせて。難波津の細きよしあしをたどりしるべし。縦横自在を盡したりとも。ひとつの趣意をたつる所なくては。童蒙の丸い物つくしに落て。果は松坂を仕舞となせる。甚無下の事なるべし。今こゝにあらはす文章。躰は二十。文は一百十有餘篇。皆く俳諧文章なり。これをよみ。これを學て。此門に入べしとて。弟子五老井許子六。撰み集て。寶永二乙酉歲。自序して風俗文選とは云爾。

風俗文選

○作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也。武名松尾甚七郎。奉仕藤堂家。壯年時辭官遊武州江戸。風雅爲業。號桃青。乃誹諧正風躰中興開祖也。嘗世爲遺功。修武小石川之水道。四年成。速捨功而入深川芭蕉庵出家。年三十七。天下稱芭蕉翁。遊東西南北。說風雅。助諸門人。國中悉歸芭蕉風。一遇難波津伏病。終卒年五十一。葬江州義仲寺。浪化者。東門主一如大僧正之蓮枝也。號應眞院。居于越中井波瑞泉寺。一日遊洛。會芭蕉翁一效風雅。後著有磯海前後集。病薨。年三十二。

義本本朝文選ニ一如法親王トアリ
本朝文選ニ
松木山
トトアリ

僧丈艸者尾州犬山產也。壯年辭武出家。居松本山上。蕉門之隱客也。能詩。後三年閉關而終不出。病死。常讀法華經。年四十四。

僧千那者。江州堅田產也。居于本福寺。釋名妙式上人。嘗任律師。號蒲萄坊。中華齋門之高弟也。

僧李由字買年。近州之產也。居于光明遍照寺。釋名亮隅上人。嘗任律師。入蕉門而學風雅。年久。故著韻塞。篇突。字陀法師書。病死。年四十五。

支考字盤子。號東花西花。亦號獅子庵。濃州之產也。入蕉門。業風雅。一方門人也。先

師滅後遊^ニ東西南北^ニ。設^テ風雅^ヲ而助^テ諸生^ヲ。故往々慕^フ支考風^ニ者多^シ矣。中遇^ニ居于勢州山田^ニ。後歸^リ故國^ニ作^テ俳諧數篇^ヲ。辨^ス俳諧之論^一。

晉其角者。武州江戶產也。生^ニ醫家^ニ不^レ學^ハ醫術^ヲ。終業^ニ俳諧^ヲ。寶井氏。號^ス狂而堂^ト。蕉門之一人而後起^ニ己^一風^ヲ。著^ス俳諧數篇^ヲ。

嵐雪者。服部氏。不^レ知^レ何^ノ許^ノ人^ニ。業^ニ風雅^ヲ。遊^ニ武江戶^ニ。蕉門之高弟也。後別^レ妻出家^ス。野坡者。越之前州人。生^ニ商家^ニ居^ニ于武江戶^ニ。蕉門之學者也。一遊^ニ西海^ニ不^レ定^ス其所居^ニ。隨^テ師^ニ得^テ炭俵^ノ之撰號^ス。

北枝者加州金澤之人也。業^ニ磨工^ヲ。見^テ蕉翁^ニ好^ム風雅^ヲ。北方之逸士也。涼菟者勢州山田神職之人也。業^ニ風雅^ヲ。初號^ス團友^ト。露川者伊賀之人也。生^ニ商家^ニ居^ニ于尾名護屋^ニ也。好^ム蕉門之風雅^ヲ。雲鈴者奥州南部之人。產^ニ武^ニ。壯年入道自號^ス摩詰菴婆且人^ト。風雅師^ニ東花坊^ト。一渡^ニ佐渡島^ニ。著^ス入日記^一。

吾仲者洛陽人也。居^ニ于六條^ニ。業^ニ佛畫^ヲ。好^ム風雅^ヲ。師^ニ李由^ト。自號^ス柳後園^ト。著^ス柿表紙三卷^ヲ。路通者不^レ知^レ何^ノ許^ノ者^ニ。不^レ詳^ス其姓名^ヲ。一見^テ蕉翁^ニ聽^ク風雅^ヲ。其性不實輕薄而長遠。師命^ス。飄泊之中著^ス俳諧之書^一。

凡兆者加州之產也。業^ニ醫居^ニ于洛^ニ。學^ニ蕉門之風雅^ヲ。一罪^レ事^ニ不^レ知^レ其終處^ニ。素堂者山口氏也。居^ニ于武陽^ニ。遊^ニ世務^ヲ。隱^ニ于深川^ニ。友^ニ芭蕉翁^ト善^ク。

興本本朝文
選ニ涼宛

興本本朝文
選ニ著俳諧
偽書トアリ

嵐關者不知何許人。松倉氏。業武奉仕板倉家。而奉諫速辭官携母隱于武淺卿。蕉門之老弟也。爲月遊于鎌倉。病死。

荆口者濃州大垣之武士也。宮崎氏。蕉門故老之士也。此筋。千川。文鳥。三士之父也。後致仕改名東宇。

去來者肥前之產也。後隨兄居于洛陽。向井氏也。中華蕉門之高弟也。號落柿舍。隨師選猿蓑。後病死。年五十三。

万子者加州金澤之武士也。生駒氏。號此君菴。蕉門之英士也。厚爲者。加州大聖寺之武士也。河地氏。蕉門之英士也。病死。

木導者。江州龜城之武士也。直江氏。自號阿山人。蕉門之英才也。師翁稱奇異逸物。汶村者。江州龜城之武士也。松井氏。字師喜。號九華亭。蕉門之達士也。嘗能書畫。繪師五老井。

毛執者。江陽彦城之武士也。北山氏。號大雅堂。好風雅。愛畫圖。師五老井。

程巳者。近州龜城之武士也。朝倉氏。號白日堂。愛蕉門之風雅。

朱迪者。江陽彦城之武士也。寺島氏。號甘露臺。年久好風雅。而入蕉門。病死。年四十三。撰者許六者。江州龜城之武士也。名百仲。字羽官。森川氏。號五老井。別號菊阿佛。一見

蕉翁。得正風躰實。血脉道統之門人也。常友季由撰俳書數篇。

以上二十八人

風俗文選卷之一

辭類

五老井許六選

柴門ノ辭

芭蕉翁

送歸許六之故郷餞別之文也

○去年の秋。かり初に面をあはせ。ことし五月のはじめ。深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて。ひとひ草扉をたゝいて。終日閑談をなす。其器繪を好み。風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。晝の爲愛すといへり。其まなぶ事二にして。用をなす事一なり。まとや。君子は多能を恥といへれば。品二にして。用一なる事感すべきにや。晝はとつて予が師とし風雅はをしへて予か弟子となす。されども師が晝は精神徹に入り。筆端妙をふるふ。其幽遠なる處。予が見る所にあらず。予が風雅は。夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿。西行のとばのみ。かり初にいひちらされし。あだなるたはふれごと。あはれなる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも。これらは歌に實ありて。しかもかなしひをそふると。の給ひ侍り

異本本朝文
題ニ此文ノ
終リニ
旅人の心に
も似よ梅の

花

トア

しとかや。されば此御こと葉を力とし。其ほそき一すじをたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人のもとめたる所をもとめよと。南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて灯をかゝげて。柴門の外におくりてわかるゝのみ。

瓢 辭

許 六

○男鹿なく。此山里と詠じける。嵯峨野の方に隠れたる人あり。まだつり元の跡もきえかね。わり藜の系圖咄に。甲州の劔も。今は菜刀一丁の身帯にて。あまりさびしさに。垣に瓢箪を植て。折ふしの筆次手にや。中にもしたゝか物に書付侍る。

ハ甲にもならで果たるふくべ哉。無名子とは見え侍れど。身は雲水の便りなき。浪人ひがみとぞおほえける。かの岡に草苺おのこあつまり。此甲のにくさに。わざと返しとはなく。ハかまきりに降参したるふくべ哉とぞ笑ひける。あるじきゝつけて。陋巷にあつて一瓢のたのしひは。賢人の上。里の子はしるまじ。草刈の中より。其賢人くらべならば。許由はかしがましとて捨たりとのゝしる。あるじいよゝ勝に乗て。かゝる名物もしらず。汝等は田植の煎茶を入れ。たね物の納所とおぼえたるこそ口をしけれ。花はむづかしき色もなくて。楊墨がこゝろさしに叶ひ。源氏の巻の名となり。歌人の脇にまといたる夕顔ぞかし。

抑夕がほの。玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず。たゞ喰物とぼしき。五條あたりに徘徊して。貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰。汝宇治の物語をしらずや。答て曰。其拾遺の

飄ひまも。咎とがなき隣人が一命をたてり。これ全く飄の罪といはむ。かゝる目出度ひさごに。何の罪かあらん。かれ佛縁深きゆへ。空也上人には携へられ。鉢たゞきの祖師とはなりける。かのさゞ波や。かたゞの海士が海老うますくひも。佛縁の内かとぞいひける。隠士大きに打腹立て。汝がいひ分ぶ。皆く理屈の論なり。曾て風雅をしらず。古人生前一飄の樂は。身の後の金よりは勝ましたりといへり。草刈が云。其樂といつば。上戸の情也。飄のかたちをいはむ。腹便ふと肥こふとりて。口のせまきは何ぞや。せまくて餅の入らざるは。下戸のなげきなりと大笑して。歌て云。滄浪の水。すめらばつけて泳まぐべし。濁らば鯁まじを押ゆべしといひて。去まて共に物いはず。

示ニ秋之坊ニ辭

支考

○あら秋の坊や。紅葉の秋か。世の秋か。又たゞ秋の坊なるか。見ればいとにくさげに。見ねば又なつかし。好悪は人の心にありて。彼は一物もなきもの也。むかし湖南の幻住庵に。一夜の夢をむすびしが。其夜もしらすよみしやすらん。にくみしやすらん。無常迅速の一句をあたへて。先師も麓までおくりは申されしか。今此草庵に。同じ心にすね合たる法師の。相住て侍るが。物いはぬ日の終日ましまも侍りて。かく住けるこそあやくたふとけれ。我又こゝに來りてあそばさ。何某が三十年といふ。歌よみにやあらんと。その人くもわらひけるなり。秋の坊が云。はいかいはさる事ならんか。曰。さだむべからず。俳諧にくはしからん

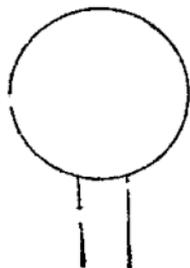
とせば。世情におちて。心の花にうつろひぬべし。花なきは又世の風流なし。世にはたゞす
るすみならんこそ。法師達におきてはさる事なれ。たゞはいかにはあそふべし。俳諧にま
どふべからず。しるてくはしからんとせば。東花坊がとき。世情のうき名とりてむ。はいか
いのくはしさ。誠にしかのみならんや。

へ瓜ふたつ三ッにわる手や塵劫記

示ニ僧ノ古鏡ニ辭

李 由

○こゝに僧あり。古鏡といふ。學業にわしりて。東湖の濱にあそぶ。産は濃州關ならば。な
ど志津。孫六が鏡を得て。紫電白虹赫々とし。三尺のひかりを振はざるや。天下誰あつてか。
敵するものあらん。さるはむかしの劔。今の菜刀とおぼえ。俊成卿の花の鏡もうち曇り。今
は開村の葎むらにうづもれ。祭のはやしにもたゞかれず。終に鐘鑄かねの奉加道具にきはまり。きの
ふもまるくけふも又丸し。



此人かつて詩をよくす。多情有聲の書を彩り。美言無糸の弄をあやつるといへども。猶風雅に足をそばだて。敷島の道をさぐり。一とせ先師。關の旅寢の比ま見えて。一棒をうけたりといへども。いまだ澁皮もむけず。今幸に予に參して。又鏡を磨がむとす。風雅はもと明なる物なり。鏡の物の影をうつすが如し。汝元來磨ことをしらず。速に去つて。水鏡を求め來れ。

へ分別に花のかゝみも曇りけり

送新道心二辭

丈 艸

○世をのがれて道を求めるほどの人は。皆一かどの志を發して。まことしきつとめともしあへれど。年を重ねぬれば。又かれこれにひかるゝ縁おほく。事繁くなりて。更にはじめの人とおもほえぬ。ふるまひのみぞおほかる。古人も此事をいましめて。出家は出家以後の。出家を遂べきよし。勧めはげましぬ。魯九子は。みのゝ國蜂屋の山里にあそびて。いまださかむなる齋のいかなる縁にや。俄に墨の袂に染かへて。ちりのすみかをかけ出。山寺にかきこもれるよし。傳聞侍りて。今のこゝろざしの正しきに。猶後の出家をおこたらぬ。みさほのほどをねがひて。拙き辭を申おくりぬ。

へ蚊屋を出て又障子あり夏の月

校訂書云
やしなはれ
むことをか

焼蚊辭

嵐 蘭

○蚊。帳中の蚊。汝を焼に辭をもてす。汝此辭を聞時は。わが手に死すとも。みづからたれりとせよ。夫澤知は。焚中にやしなはれことをねがはずと。彼は心をとる。これは食をもとめて。人の肌にせまる。かれを愛せむや。これをにくまむや。

ゞきいすは草にかくれて。草の爲にやかる。汝は帳に入つて。帳の爲にやかる。あはれなるかた。いづれとかせんや。

へ蟬促織の火に入は。戀ゆへときけばわりなしや。雨に濡露にそぼちて。さぞはれし風だにもつらし。げに玉の緒の絶なむ事もしらず。いく偽の夜や頼み來し。汝がやかるゝ事。何を情とせむ。義經の逆落は。暫時さしをく。須山小宮山が夜討は。かくれて謀をなすといへども。天下の爲にして。名をのづからしたがふ。又汝といはむや。

ゞ虞舜は頑父をさけ。日本武尊は。夷賊をのがれ給ふ。共に天にして。汝といふべきにあらず。大盗あに樞戸を穿むや。汝がふるまふを見に。帳をたるゝ時は。其翻々の間をうかどひ。垂おはつて。縦横の透間をたづね。すべて小破の所をもとめ。人のしりへにつきて。入らむとはかる。嗚呼躍躑が徒にはあらじ。

ゞすべて汝がおこなふ處。猛き事もなく。たのしむ事もなし。あはれなるかたにも。やさしきかたにもあらず。たゞにくむべきものゝ甚しき也。

へ蚊。蚊。帳中の蚊。汝をやくに辭をもてす。汝此ことばをきく時は。我手に死すともみづから足れりとせよ。

へ子や啼む其子の母も蚊の喰む

鉢扣ノ辭

去 來

○師走も二十四日。冬もかぎりなれば。鉢たゞき聞むと例の翁のわたりましける。こよひは風はげしく。雨そほふりて。とみにも來らねば。いかに待侘び給ひなむといふかりおもひて。へ帯こそ眞似ても見せむ鉢扣と。灰吹の竹うちならしける。其聲妙也。火宅を出よとほのめかしぬれど。猶あはれなるふしぐの。似るべくもあらず。かれが修行は瓢箪をならし。鉢打たゞき。二人三人つれてもうたひ。かけ合ても諷ふ。其唱哥は。空也の作也。かくて寒の中と。春秋の彼岸は。晝夜をわかず。都の外。七所の三昧をめぐりぬ。無邊の手圍の舟とければ。かの湖春も。わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶釜をさし。大路小路に出て。商ふ業かはりぬれど。さま同じければ。たゞかぬ時も鉢扣とぞ。曲翠は申されける。あるひはさがやきをすり。或は四方にからげ。法師ならぬすがたの衣引かけたれど。それも墨染にはあらず。おほくは。萌黄に鷹の羽。打ちがへたる紋をつけて着たれば。月雪に名は越之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬。ことごとく寐覺はやらじと吟じけるも。ひとり聞にやたへさりけむ。打とけて寝たらむは。かへり聞かむも口おしかるべし。明

して神との給ひける。横雲の影より。からびたる聲して出来れり。げに老はれ足よはきものは。友どちらにもあゆみおかれて。ひとり今にやなりぬらんと。翁の

ハ長嘯の墓もめぐるか鉢たゞきと。聞え給ひけるは此あかつきの事にてぞ侍りける。

四季ノ辭

許 六

古今和歌文章謂、四季二者多矣、假令委用俳諧詞爲之、其情和歌文章不可更、今此辭全篇以財寶之上盡四時情、是俳諧也。

○行年の晝夜はたへずして。しかももとの晝夜にはあらず。子取婆よの足手を返し。隠坊の細鉄休する時なし。人若かりし時の月日は。行道ゆるやかに廻り。老ての後の光陰は。慥に徑路を行にきはまれり。五十年來のすぐるは。一杯の蕎麥切よりも早く。今又五十年生む事は田樂を翻すよりもやすし。つらく一とせの變相を見るに。いづれかあはれならざるはなし。むかし紫氏清氏の物語にも。華ちり時鳥とかはるあはれをのべて。錢金のあはれをいはず。世わたるわざのはたらきは。たゞ此ものゝ手柄にして。神佛とても及びがたし。まづ春の御賀の引出物より。八朔歳暮のたてまつり物。皆金銀の手柄にて下方民の未くまで。千代よろづ代を十かへりと。あふぎ奉るもことほり也。金子の威徳とて。大判は裸で出仕し。白銀は付臺とて卑下したるこそ哀なれ。錢は凡夫の手に落て。青ざし一貫文を頭とし。こき箸蠟燭一挺きり。廿五十の年玉まで。皆相應にこそめでたけれ。春寶引をせぬ人は。六月の蚊

にくはるゝとて。しはき親仁もゆるされて。錢つかはすもことはり也。え方參の十二燈より。よろづの神くはとりせめられて。細き穴から世の中を。廣くめぐみをたれ給ふ。梅は花の兄とかや。春の風やはらかに吹て。里の中道溝石をつたふ頃。まづ江南の一二輪咲初て。白きは本色といひながら。南鐐の寒き風情をこのむならむ。柳連翹の黄色に。菜たね山吹のあたゝかにさけるは。かの大判の裸をうらやむか。鶯の金衣鳥とは。直に似せ金の同類なるべし。きぬさらき二日の空は。まだ鴨の羽音ながら。日影うらゝかに。南の障子押やり。飛石よりかげろふもゆる比。かはらけのひねりもぐさ。誰にかすゆらんと。おぼつかなく見なざる。風くろふたる悪太郎。小路がくれを尋出し。お乳めのととり廻し。あたり近き。やいとの婆々をかり招き。筋違風門すへられて。涙のかゝる饅頭も。中くそれもうるさくて。やうく膝をすべり落。からき命いきたる心地して。灸養の芥子銀は。湯氣のたつまで握られて何買ふ物とはしらね共。たゞ嬉しとばかりおぼえける。明日は初午とかや。錢數寄の稻荷殿。御簾の中より。千貫の散錢に。めでさせ給ふ。御物好こそ有難けれ。されば佛とてもいやにはあらず。黄金の膚を願ひ。閻浮檀金を最上とおぼえ。極樂には。金銀を鋪とかや。いづれの佛神に詣てゝも。錢箱の響きにめでたまはぬはなし。世の中の人。心の花にはうつりやすく。奢は日く長じて。田舎の金銀は。すべて都のあたゝまりなるべし。西東の遊び所。南北の參事。すべて錢なし人は。一足も進みがたし。櫻は四方山にさきこぼれても。吉野を花の名所とはいへり。飯貝六田の軒端より幾重の雲をわけつらん。此御山は。彌

勸の代につかふべき金とかや。昔しより世の人の。面白しとおもふもことはりなり。やうやうやよひもくれて。ほととぎすの來べき。卯月の空打曇たる。片山里の垣根の雪は。何を卯の花とらやみけむ。錫も鉛も。ともに白銀の膚なるべし。牡丹の花の白きはさら也。世に稀なる紅とて長安の豪富はもてあそび。これに魂をうばゝれける。その面白き所は。たゞ小判を植て。詠むるなるべし。雲雀は終日に轉り。水鶏はよもすがらたゞく。池鯉鮒、野の馬市なるべし。一步は日とつふたつなどいひ習ひけるに。馬買、牛買の詞とて。五つぶ十粒とならべてかぞへ。伯樂が錢金を皆あてに。集りたる遊女野郎のたぐひ。囊ふり樗蒲一のより所にして。廣野の小屋のたゞすまぬ。しばし里あるこゝ地なるべし。はやし祭。喰ひ祭。打つゞき。桑子庭に起かゝる比。茶山いそがしく。から種こぼるゝなど。麥跡の田植さへおくれて。例の五月雨ふりつゞき。舟にて市に入る時。矢矧堤はきれて。道筋かはり。大井川とまりて。島田金谷に。陣を張大名小名いくかしら。猶行末の川く。いかばかり出らんと心ほそし。此時例の一步小判のはたらきこそ。目さむるわざなれ。梅雨晴の六月空さえて、峯に雲おく比。植田沸かへり。天地は蟬の聲に鳴ひしがれ。一日の暑さもたへて。千とせをふる思ひなるに。十九土用とかや。京田舎熱病にたふれ臥。家くわらはやみはやりて。水薬師の泉も。其功ぬるく。験者のいのりもたえまある比。紫雪とかや。世に良薬ありて。たち所に醒たり。これこそ黄がねの鍋にて。黄金を煎じたる物なれ。やゝすと風粟の葉。むげに立夜。芋の葉ふりつく比は。金氣世におこなはれて。星合の空もうち過。物際近づく比。

革褌布とびまはり。丁銀箱を出てうそぶく。奥の世の中打つとき。巡禮のほりつどひ。金の値下る比を。巡禮小判とはいふ也。家／＼むかひ火焼捨て。魂祭ころ。旦那寺の小僧。棚經とてよみありく。物喰せ酒のませ。やがてかけ合に。一粒包みてやれば。またはづかしと思へる。いとあはれなり。やう／＼生身玉。養父入事過て。踊見る心にはなりぬ。彼島原と申は廿四日をかぎりと定め。世界の金銀は此時この里にとらるゝなるべし。たゞ一夜さの假のにほひに心とどまりて。これよりえにしの中立となるたぐひもあれば。釣りがへといふはいかにぞや。こはき風。あらしき日影をさへ。いとふしとおもふべき身を。いま／＼しく大秤にふらば。昆布干鮭の思ひをすらん。あるは家を賣。家督をうりて。くはず貧樂の道樂人。つまる所は俳諧師也。いくとせか。松島象潟の旅をうらやみ。此秋しきりに。嫉捨吏科の月見むと。三衣袋に身帯をたゝみ込。木曾の御坂を越かねて。尾花のつてにまねかるゝ。かけ路の下の草枕。一夜二夜はもてなされて。長逗留に飽れぬる。たゝ行さきの袖の露。ちらりと見せてあはれ也。秋もはや。くるゝと菊の名に立て。黄々白々粧。東籬といふは。かれも金銀をうらやむたくひか。時雨ふりそむる頃は。諸家の爐開きとて。名物の寶くらべ。風流に似て。金づくのはたらきなるべし。霜月朔日より。野郎の顔見せ。給分は小判也。むかしは吉原堺町と打ならび。中なるがふき屋町。天下の金をとらかして。まぶといふ詞も。此時より出つらん。今朝からは師走とかや。乙子の朔日とて。節季候の來初る日也。空はうす曇の冬氣色。比良の高根。志賀の山。むかし長等の峰の雪。都の方はあられふる。音羽の瀧の音も

なし。嵐木がらし唐がらし。岡部の里の冬ごもり。何を師走の年くれて。金一段に責寄たり。かはせ小判。大名借。つゝみ廻して相坂をこえ。高瀬の舟のかぢ枕。汐路はるかにとられ行。鄙の旅寢ぞあはれなる。神は人の敬うやまつによつて威あをますとかや。伊勢熊野のお初尾時。薬代は銀一枚。衣きぬ配はきは小判なるべし。すでに煤すすと明あき。餅と暮くて。廿九日といふなり。けふは小の大晦日。一日の違ひとはいひながら。一年中の大油断。今此時にあらはれたり。三千世界の金銀は。けふ一日の亂世にて。入みだれく。あたる所さばる所。皆ことくくしたがへて。壽永も巳まに暮にけり。抑やまと歌は。神代より傳はりて。おもき國の翫あそびなれば。天下誰あつてこれをおさむ。されど末の代にあたつて。和歌の道に對するものは金也。目に見えぬ鬼神をなかしめ。おとこ女の中をやはらげ。たけきものゝふの。心をなくさむるものはこれ也。上古はいやしきものにいひなされたる。それもさる事ながら。今やうは此ものにくまれたる人。此界にては。一日の逗留とまどならず。たゞあはれなるは金なるべし。

風俗文選卷之二

賦類

南都賦

汝村

○あをによしならの都は御さふらひ三笠山の麓なり。元明天皇。和銅二年。藤原の宮より。此京に移さる。大宮殿。大佛殿佛神をあがめて。王法わうぽう輔ほく。若宮のやしる。月日の宮。竈かまど。尾上の宮。鏡の神は。橘の廣ひろ瀬せをまつり。浮雲の宮は鹿島立の始とす。氷室。卒川。東大寺の八幡。二月堂に若狭井あり。三月堂。四月堂。釣鐘は。久我の入道の詩をとどめ。大門の折釘は。源の頼朝の幕を張。興福寺は七堂伽藍。はじめは山階寺といひ。中比は馬屋寺と號す。東金堂。中金堂。食堂。講堂。南圓堂には。補陀落の藤をうつして。順禮の札を納め。東圓堂には。いにしへの八重櫻を残して。花垣の庄を領す。西金堂の築をあらため。南大門を移して。薪の能をはじむ。七度半の使に。四座の猿樂をめす。雨天には紙を踏で試み。夜陰には薪を積で焚。保生が鉢の木に。名人の號をとり。大倉が芭蕉に。達人の名をあらはす。水屋の能。若宮の能。春日祭。御祭。素絹に大衆の顔をつゝみて。大華表につらなり。

錦を着て。松の下に弓矢の立合を舞。頭屋の兒は牀木に腰をかけ。赤衣の仕丁は棒を横ふ。
 大名劔。大名鐙。大太刀持。小太刀持。競馬。流鎗馬。長谷川黨は甲冑を帶し。射手の兒は。
 綾箇笠に弓矢を持。關白代は束帶して。藤の花をかざし。バチヨの兒は供つれて。腰に木履
 をつくる。ハイケンの神子。奈良の神子。細男。氷室付の樂人。トカミ。拍手は。仕丁の宿
 老。頭屋の御幣。田樂のピンヅロ。春は二月の雪をちらし。冬は霜月の花をさかす。手向山
 に。菅家の紅葉を詠じ。武藏野に。業平の若草をよむ。雪消の澤。野守の池。御手洗川。佐
 保川。一位。二位。五位の橋。馬出。轟。故郷の橋。鶯の籠。青龍の瀧。森は神垣。手分の
 杜。地獄谷。千手谷。劔塚。逢火塚むら雨のたえ間には。雲井坂に晴を祈り。雉の羽音には。
 わか草山に眼をさます。鹿は春日野に臥。魚は猿澤の池に浮ぶ。衣懸柳。良辨杉。夜泣の地
 藏。文使の地藏。元興寺の鐘は。鬼の手の痕になたれ。十三鐘は。七ツ六ツの間につく。角寺。
 紀寺。般若寺には。大塔の宮を隠し。何がしの坊には義經の鎧をとむ。重衡は治承に焼
 松永は永祿に亡す。俊。乗坊の跡をふむで。龍松院は願をおこす。興懸石は伊勢の御の眺望
 をなし。柳緑花紅の碑は。紹巴翁のしるしとかや。華原馨。泗濱石。蘭園待の伽羅。鴨の毛
 の屏風。柳生家の劔術。寶藏院の十文字。法花寺の作り犬。西大寺の豊心丹。法論味噌。力
 饅頭。なら濱。奈良酒。奈良こんがう。なら團扇。墨。曝。世に名高く。打箔。中繼は此京
 より起る。岩井が具足。文珠が打物。膠。緑青。鞞。鼓の皮。土風呂。灰炮烙。櫟。木練。
 なら茶はヤヂウと名づけ。晝食を硯水といふ。油烟取。五合禰宜。乞丐坂の石。穢多村の木

格子。赤き物は。頭屋の赤飯にたとへ。瘦たる人は。金堂の鉦打といふ。木辻の待宵。鳴川の別れ。情に萬金を盡し。思ひに一命を輕むず。口は七口。景は八景。町／＼に御門の名ありて。五條三條の巷をわかつ。夏冬の朝起。春秋のなりはひ。諸國にすぐれ。諸人にこえたり。是皆舊都の。ありがたき遺風なるべし。

鎌倉ノ賦 並序

許 六

夫相模國。鎌倉は。郡の名にして。大職冠鎌子丸の時。靈夢によつて。鎌を埋むの地也。このゆへに郡の名とす。染屋の時忠。惣追捕使として。文武の御宇より。聖武の神龜年中まで。こゝに居す。それより上總介平直方。これに住して。八幡太郎義家朝臣より。源家代／＼居住の地なり。賦して曰。

○三代の將軍。九代の執權。春の花さけば。秋の紅葉と變ず。柳のみやこ。もろこしの里。鶴が岡。雲井の嶺。下の若宮は。頼義朝臣の建立にして。上の若宮は。源二位の勸請なり。宮柱ふとしき立て。民の戸炬にぎはへり。江の島は。三辨財天。三浦三崎に。杜戸の明神あり。鳥合が原は。相模入道が鬪犬の地。由井の濱は。下河邊の庄司が。笠懸を射初る。小袋坂。稻村が崎。七里が濱。月かげが谷には。唇を作り。扇が谷には。佐竹の紋の。畦あり腰越の寺には。辨慶が申狀の下書を殘し。兒が淵には。白菊が最期の歌をとどむ片瀬川には。宗尊親王の影をうつし。滑川には。菅紙が錢を搜す。日蓮盛久が首の座。景清からいとが籠

のあと。大塔の宮は。倭原の説にくるしみ。實朝の卿は。公曉が爲に弑せらる。勝長壽院
 には。義朝の髑髏を葬り。法華堂には。頼朝の墳墓を築く。西行上人は。三夜に軍法を説。
 定家の卿は。七年和歌を談す。化粧坂は。少將に名高く。神前の舞臺は。靜が舞をばやす。
 和田。畠山。千葉。北條。管領屋敷。梶原屋敷。佐々木屋敷には。馬ひやし場の水あり。正
 宗が舊跡には。双をきたふ泉を見る。花が谷。蛇が谷。梅が谷。松葉が谷。建長寺。東明寺。
 圓覺寺。壽福寺。海藏寺は。石剎玄翁の開基。松が岡は。實朝の尼寺也。籠釋迦。鐵地藏。
 深澤の大佛。長谷の觀音。金洗澤。星月夜の井。橋の下の小歌は。あめ牛めくらが威勢をそ
 しり。小栗の説經は。横山が強盜を語る。阿佛。長明が日記。重衡。俊基の紀行。春は雪の
 下に花を踏で惜み。夏は山の内に鶉を待て眠る。美奈能瀬川の月。御輿が菊の礎のあと
 は。感慨の情をまし。鳩の聲は懷齒の腸を斷。鱧は兼好が筆にいやしめ。左衛の榮螺は。
 實平が鹿相を残す。苔。摩砂。海老。紫胡。すべて魚鱸の類。あまかづきいとまあらず。高
 瀬おしをくり。かよはぬ日なし。名にし之地藏は。武相の境にして。六浦。金澤は。むさし
 の地なり。瀬戸の明神には。四橋一覽の眼をさき。能見堂には。八景物語の詩を見る。照手
 の松。筆捨の松。金澤の文庫といふは。稱名寺にあつて今はなし。文珠像。普賢像。こく梅
 櫻梅。せいこ梅。青葉の紅葉。わづかに西湖。さくらの二梅をとよむ。大きなものは。頼
 朝のかうべにたとへ。廣き所は。かまくら海道に比す。今の戸塚は。いにしへの材木町とい
 ひ。大磯の宿は。遊女町の沙汰なり。されど。東南に海近く。西北に山つらたれり。境地狭

してすでに谷／＼の號あり。むかしの繁華繁榮を論せば。なんぞ今の泰平不易の江戸に及ばむや。

芳野ノ賦

丈 卿

○よし野を御吉野といふは。皇居の地なればなり。山。川。里。嶺。嶺。高根。屋上。山の井。花園を誦す。すべて二十一代の歌數三百七十餘首。猶家／＼の集。物語類。詩誦俳諧のたぐひ。佐川田喜六があさな／＼。貞室老人のこれは／＼まで。かぞふに中／＼いとまなからん。さればもうこしの吉野とは。おほいもうちぎみの俳諧の歌より始り。芳野川花の音するとは。慈鎮和尚の大きな歌の手柄なり。川は巴が淵よりわかれて。紀の和歌山に落。山は大峯よりつゞきて那智高野につらなれり。藏王堂は。三ところに安置し。一郡は八郷とかや。上市よりは飯貝にわたり。下市をこえては。六田よりのぼる。妹脊山をへだて。高取の城にむかふ。ちもとの櫻。日本が花。櫻田の谷。さくらが嶺。關屋の花。瀧ざくら。雲井櫻。布引の櫻。花矢倉。花龍の水。嵐山は。龜山の御宇に都にうつされ。袖振山は。天武帝より五節の舞を始む。清見原の天皇は。國柄人の舟にかくし。後醍醐帝は。吉水院を皇居に定む。義經も此院にやどり。秀吉も此寺を本陣とす。賀名生は要害の御所。如意輪寺には御廟を築く。厨子の戸びらに。南帝勅作の詩を。みづからあそばし。過去帳の奥には。棟正行最期の歌をとよむ。判官の鎧。辨慶が太刀。口の山門は。彦四が痛腹の所。つゝじが岡は。忠信

が空腹くわふくの地なり。勝手かたての寶藏ほうざうには。靜しづかが舞まの裝束しょうそくを納なめ。子守こもりの拜殿はいでんの歌仙かせんは。定家卿ていけきやうの眞まこと
 跡あと永徳えいとくが筆ひしなり櫻木えいぎの宮みや。金情きんじやうの明神めいじん。力乞ちからひの不ふ動どう。廻まわり地藏ぢざう。尊算そんざんの御影堂みやうだうには。花供養はなぐやうの
 餅もちをまき。五臺寺だいいじ。櫻本ももは。當山たうざんの先達せんたつ也。大瀧おほたき。宮瀧みやたき。西河にしがわの瀧たき。高瀧たかたき。蟬せみが瀧たき。清明せいめいが
 瀧たき。菜なつみ川がわ。とくくくの清水しみづ。外象とがさうの橋はし。神子かみこの水みづ。鷺さぎの尾おの鐘かね。龍返りゆうへんの岩いわ。龜石かめいし。玉たま
 石いし。大杉殿おほすぎでん。人丸塚ひとまるづか。若葉わかばの鳥井とりい。鏝懸えんげんの松まつ。かげろふの小野このの。猿引坂さるひきざか。琴堂ことだう。琶琵山ばひざん。青
 根あおねが嶺みね。釋迦じやくぢやが獄ごく。七十二ななふたになびき。八十やそひの窟いほこれ皆順逆みなじゆんぎやく。二つの通路つうろなるべし。産うは頭巾たまん。
 ほらの貝かひ。火打ひうち。塗物ぬりもの。紙かみ。漆うるし。葛くわ。榧かき。たばこ。釣瓶つるべ。鮪すし。柿かき。木の子かこぎ。籠細工かごさいく。木鉢きひち。材
 木ま。山折敷やまおしき。さくららは吉野きちのに名たかく。よしのは櫻えいにて名を擧あひたり。麓ふもとより奥おくの院いんまで。左
 右ひだりみぎの山やまく。前後ぜんごの谷やく。たゞ雲くもを攀のぼり。たゞ雲くもをくだるが如ごとし。海道かいどうの吹ふきだめには。
 落花らくわの波なみを揚あげ。木きの間の嵐あらしは。寒ふかからぬ雪ゆきをふらす。麓ふもとはやく。奥おくはをそし。開落山かいらくざんの淺
 深あしなによれり。春はる此山このやまに上のぼり。いづれか花はなの盛さかならぬ所ところはあらじ。夫おと櫻えいの名目ななめは。伊勢櫻いせえい。江
 戸えどざくら。火櫻かえい。榊かきざくら。うば櫻うばえいは葉はのなきをいひ。しほ籠かごとは濱はまに咲さくといふ事にや。熊くま
 坂さかといひ。楊貴妃やうきひといふ。世よに色いろよき牡若かみづかたは。八橋やっはしと名付なづけ。よく垂たる萩はぎを。宮城野みやぎのと號なづけ。
 さればむかしより。たゞさくらの名なに。吉野きちのといへる花はなをきかず。たゞ吉野きちのとも櫻えいとも。理
 屈りくつをつけぬこそ高たかみなれ。

松島ノ賦

芭蕉翁

○そもく事ふりにたれど。松島は扶桑第一の好風にして。凡洞庭西湖を取ず。東南より海を入れて。江の中三里。浙江の潮をたふ。七十二峯。數百の島と。歛つものは天を指。ふすものは波に俯。あるは二重にかさなり。三重にたみみて。左にわかれ。右につらなる。負るあり。抱るあり。兒孫愛するがごとし。内ふたご。外ふた子。鎧島。かぶと島。牛島。蛇しま。内裏島。屏風しま。笹が島は。あまの小舟漕つれて。看わかつ聲くんに。つなでかなしもとよみけむ。傑を残し。末の松山は寺となりて。松のひまぐ墓を築く。羽をかはし。枝をならぶる契の末も。終には皆かくのごとしと悲し。野田の玉川。沖の石。宮城の萩。武隈の松猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には。鹽がまの明神あり。神前のかな灯籠。文治三年。泉の三郎寄進と記す。雄島が磯は地つゞきにて。雲居禪師の別室のあとに。坐禪石。瑞岩寺は。相模守時頼入道の建立。當時三十二世のむかし。眞壁平四郎出家して。入唐歸朝の後開山す。其後伊達政宗再興して。七堂伽藍となれりける。法蓮寺は。海岩に峙。老杉影をひたし。花鮫波にひゞく。松の縁こまやかに。枝葉汐風に吹たはめて。屈曲おのづからためたるがごとし。其氣色蒼然として。美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし。大山ずみのなせるわざにや。造花の天工。いづれの人か筆をふるひ。詞を盡さむ。

富士ノ賦

風 蘭

○不二ふじは日本の蓬萊山也。むかし孝靈五年。山はじめて現ず。徐福も此山に登りて仙薬を求

め。かくや姫も神と化してこゝに靈をとどむ。峰は八葉にわれて根は四州にまたがる。道路は三日よりのぼりて、千筋にわかれ。すそ野は東西に長して。百里につらなる。形けづりたるがごとく。高き事北斗に近し。夜陰に旭をかどやかし。夏天に雪をいたゞく。山間に海をたゞへ。山上は眞砂を攀。和國。異朝舞するものなく。三國名山と稱して。義楚六帖に甚ほめたり。日本武尊は。東夷をたひらげて。草薙の名をあらため。右大將頼朝は。ものゝふをあつめて。牧狩をかる。鳴澤の池は。俊成の仇名をとり。人穴の奥は。仁田が無分別さうなり。十郎の宮。五郎の社。西行は五文字をすへかね。探幽は墨色にあぐむ。烟は古今の序に。二流に讀れ。雲は廻船に怖れて。一尺八寸の號をとどむ。禪定の人は。草冠に頭をつゞみ。下向道は。小袖の砂をふるふ。絶頂の鉢。半腹の雀。巢鷹は大胆にして。伊與の松山におとし。水鳥の羽音には。臆病になつて。都の方に逃る。ふじ海苔。不盡灰。富士甘艸。ふじ黄蓼。栗。柿。松。檜の木のたぐひ。往還は竹の下越。根原ごえ。關は足柄の關。横ばしりの關。あら井の渡口。佐夜の山越。海を隔。峰をかさぬ。三保清見寺の見越。管根。鎌倉の姿。日本。兩國の橋上には。馬上の人の首をめぐらし。赤坂駿河臺には。乗物の窓に酔をさく。遠くは朝熊山をかぎり。ちかくは。原よし原のあたりなるべし。諏訪の湖には。倒の影を浸し。甲州の府には三つ峯に見えて。扇の繪はこゝなるべし。むかしより。詩歌連俳の句數。合せてこれをつまゞば。大かた此山の高さには比せむ。されど古今の間。たゞ一首秀たる者は。赤人の白妙なるべし。其余は此山に對して。万が一にも及ばず。吾翁。富士吉野の句。

一生なしとかや。東路に趣く人は。かくなりがたきふじの詠に。心力を費し。又あづま路におもむかぬ人は。かく有難き富士を見ずして。一生を終るも。共に残多き事なるべし。

湖水賦

李由

○近江。もと淡津なりしを。大宮にちかき江とて。近江につくり。遠き江を。遠江と號すとかや。仁皇十二代。景行の御宇。滋賀の郡に。遷都あつて。高穴穗宮に行幸す。三十九代。天智帝。大津の宮にうつり。廢帝の御宇。保良の都をたつ。近州はじめは十三郡。保羅潤澤。種千陪を得。春氣早く到。日本四番。大上々國と稱す。仁皇七代。孝靈五年。地裂湖となる。同時富士山現す。されば不二禪定するに。近江人を先達とさだむ。善住一郡は。已に湖となりて今はなし。わづか磯といふ一村残り。古郡變じて。坂田の新郡に屬す。同國余吾。筑摩江の兩湖あれど。大きさわづかに二里に過ず。たゞ日本みづりみと稱ずる物は。琵琶湖の事也形似たればとて。其名とす。佐々波實國とは。風土記に出て。樂々波や丹穂の文字は。葦葉よりは生まれり。東西十里。南北二十餘里。山谷のしたゞる所。八百八川。湖を圍む水郷五百餘村。中に大小の島あり。竹生島は周廻一里。寺院九坊。天女をあがめて。岩つなぎの神事あり。空海の祕密を封じ。經政の機をひゞかす。武島はつくぶの半にたらず。沖の島は。沖津島山とよめる。漁人わづかにすめり。白石といふは。四石湖上に岨。樹木一株もなし。奥の嶋は。人家數百。疊の表を産とす。猪崎。岡山。黒つの八島。なら島

は水鳥の巢つくり。勢田の中島には。蛇柳あり。入龜。出龜の二島は。筑摩江の中に浮ぶ。
 山は比良四明の翠をひたし。鏡伊吹の影をうつす。橋は勢田。青柳の橋。松は幸崎。千よの
 松。蓮は支那に名高く。葦菜は四川に肥たり。柳大根。兵主蕪。八幡蚊屋。長濱絹。高宮布。
 野洲ざらし。高島硯。武佐墨。白部石。舟木材木。庭石は不戸によろしく。盆山の敷砂は大
 洞の白石是レ方解石也伊吹の産は。蕎麥。からみ。艾。石灰。薬種の類。すくも。岩木。日野の椀
 は會津の根本。しがらき焼は高麗の薬也。混元丹。百々薬。播摩田米。醒か井餅。多賀杓子。
 縫村鍋。四十九張のきせる。池の川縫針。守山鞆。國友鐵炮。武佐判の八合升。是レ柴田勢家之助ト
孫ノ者農父マデ于レ今着レ之。天津馬は飛彈材木を飛し。鎌倉の生食も。本此國
 より出たり。湖中の獵頭は。尾上片山に繪旨をいたとき。石垣つきは。阿野人を天下に用ふ。
 白髭の御神は湖水七度の蘆原を見給ひ。磯崎の明神は。日本武の御廟也。多賀。日吉の神社
 はしらぬ人なくして更なり。筑摩の神は。鍋の數に名高く。新羅の社は。源氏の大将より。
 威を益とかや。大津四の宮の神社。今濱の八幡宮。豐滿の神は。幡竿を守り。宇賀野の神明
 は。第十四座の遷座也。彦根山の天神は。幾津彦根命と申奉る。金徳の御神なれば。金龜山
 に迹を垂。吾すむ平田山。鳴宮の天神は御旅所也。洗天神は。天津彦根命なり。木徳の神に
 て。千よの松原に宮居し給ふ。名は神代よりはじまりて。大納言經信。贈答の歌にも。彦根
 山とよめる也。山上の觀世音。堀川の御宇。寛治三年。白川の上皇。御幸の地也。神社佛閣。
 金龜山の城の爲に地を移して。今の北野寺に同坐あり。石山は觀音道場。石は白瑪瑙。山は

黄金なり。泉州金山の始り。三井は園城寺。鐘に名高く。むかしながらの山ともよめり。夫山といへば。延曆寺にきはまり。寺といへば園城寺をさす。共に押出したる靈場也。坂本西教寺は。天台淨土の一本寺。堅田の浮御堂は。惠心僧都の千躰佛。長命寺は。順禮の札に顯れ。猪崎の不動尊は。掉飛の術に名高し。矢取の地藏。木の本の地藏。石塔寺には天竺阿育王の塔をとどめ。是所謂八萬四千塔ノ一也。日本ニ來止ミツクノ其ノ一也。平流山は。行基四十九院を建て。都卒の内院を移す。三國傳記ニ云。昔シ鬼神靈山ノ一峯ヲ據ミ。湖水ノ濱ニオロス。其下ニ隱テ石ト化ス。今ノ荒神山ノ蛇石是レナリ。高野永源寺は。寂室派の一本寺。女人の高野山になぞらへ。番場の辻堂は。一向時宗の源にして。仲時已下の過去帳よりは。如是畜生の願文にてかくれなし。百濟寺の下乗は。小野道風の眞蹟。池寺の八天の繪は。金岡の筆也。正樂寺は。佐々木道譽が菩提所。コンクハイの狂言。白藏主が寺也。敏満寺般若坊には。那須與市が願書をとどむ。野寺の鐘。練貫の水。松尾寺の本堂は。飛彈の匠が建て。千年の星霜をかさね。互屋寺は。太子。天王寺の瓦をつくらせて。其残り此地に埋て今もあり。東西本願寺の御坊。院家一家の寺と。清涼寺。龍潭寺は。禪の道場。窓には千嶺の雪を舍。門には萬里の舟をとどむ。菅山寺は世に昔の寺といふ。菅家の遺愛寺也。安土山總見寺は信長の城跡。日本天守の始り。七重の薨を聳かす。廣間の名額。此寺に残る。觀音寺は。佐々木の城山。すなはち觀音城也。今濱の城は。太閤秀吉の城の持初。坂本の城は。明智光秀が終りをとれり。依藤太のながれは。蒲生家に残り。六角京極は。佐々木のわかれなり。稻毛三郎は供御の瀬を知て。多勢を渡し。賤が嶽の七本鎧は。後代に名を擧たり。木の匠の髯後は。甲良の

崎にはこ鳥を聞。万木の鶯。老曾の時鳥。鶴。白鳥。衡。水鶏。鹿は玉川に啼て。百足は三上山をまくとかや。玉の濱の郁子を獻じては。新米の供御を備へ。在士の藤咲ては。藤堂家に花を捧ぐ。栗本の栗の木は。神代の沙汰にして。花澤の花の木は。今も咲なり。龍灯松は巳待の夜毎に光をあげ。大藪の雨夜には星鬼の火を簀にうつす。抑江州八十餘萬石皆此水にやしなはれて。年々の貢を備。大嘗會の稻穂を奉るも。たゞ此湖の潤ひなるべし。

前鷹山賦

鷹山者丸山也。在肥長崎歌舞之地也。

○七月十日。けふは二万五千日の功德とかや。殊に女心の頼おける。物詣の日なるべし。此津の遊女どもの。人も見。人にも見られむと。よそほひたちたるに。ゆきゝの追風に。心ときめさせられて。花ずゝきのなびき合たる野邊は。男山もあだにたてりと見ゆらんかし。さるは浮草の世にうかれて。身をあだなりと見る人は。浦の見るめも。いかにあだたらん。今さしあたりたる物思ひはなけれど。左右の翠簾ごしにのぞかれて。顔のをき所なからんこそ。うたておもはるれ。禿といふものゝ。何心なくて。茶漬喰たしと思へる。雀の花見顔にもたとへ侍らむ。をひさきいかなるあだ人にか馴て。物思ふ事もならひてむと。これさへあはれにおぼえられける。

へ草花の名に旅ねせむ禿ども

後鷹山ノ賦

去 來

○十月八日は。たふときちかひありて。ちかき山寺に佛をがまむとて。こゝの遊女共の。月
 まうでするなり。唐士舟も入つどふ濊なれば。浦人の氣色さへうちさはぎて。秋風の折にふ
 れては。葛の葉のうらみがほに。磯アの雁の大きに吹なされて。そごろに人を思ひ驚くなら
 ん。それが中にも。はかなき世をちぎり。諸友に苔の下になど。一すじに。祈りおもへら
 む人もあるべしと。あらぬ心さへ取そへられてかなし。見渡したる人々の。をのが國びあ
 きに。物くらべしあそばむにも。難波の浦の。あしさまにはいはぬをと。ひたすらにあまの
 子の。あさましとのみ思ひあなづりて。都の商人も。手袋ひきたるためしおほしとかや。か
 らる事などはいひいたるべき。年のほどにはあらぬを。西花坊に。此ながめの賦つくりたり
 とほのめかされて。終に後の賦のぬしとはなり侍りける。

いいなづまやどの傾城とかりまくら

風俗文選卷之三

賦類附譜

鼠ノ賦並引

此賦以三五音相通假名字爲韻。

鼠。一ノの名はよめが君。又よめともよめり。其たね品あり。四尺の鼠は圖はづれにして。大なるは五六寸。ちいさきは寸にみたず。山椒の眼。小豆の鼻。齒は糸をつけて小神も織べく。耳は木の芽のめだつに似たり。尾をきつて錐のさやとなさばなしてむ。背腹の色にめでよ。うすくも濃も染出せり。其行や。夜出て晝隠る。常にぬすみをもて身を養ふ。まことににくむべきものゝ一つなり。乃賦を作りて曰。

○二月鼠の穴を塞く。つくづく汝がいたづらをおもへ。家に居て人をおそるゝは。足のうちに疝持けらし。油をのむ事。世の酒にひとしけれど。いつしか沈酔を見ず。粟を盡し。器をそこなふは。殊更にいほじ。大糞をかむ牙にふるれば。病を生ず。耻しき文をちらして。男女の中をもさまたげ。あやしき菓をつくりて。源平の亂をきく。何をへつらひて。佞人のた

去來

めしに引出られ。いかにすゝめてか。書を焚代の宰相となしぬる。神佛のたふときも。屎糞
 に汚したてまつる。草の根をばむ月の風は。俊成ノ鶴のうらみなりけり。つくく汝が危き
 を思へ。それ人の賢しきや。万木髓をまき吹矢を儲。鵜をぬりて。往來もたやすからず。
 けはしき城をたのむとも髓を防ぐ手段はあらじ。杳なる空をながめては。煮のつかまむ愁わ
 するべからず。桁走り。障子のぼり。早業得たりがほなるも。おもはず舛にかゝりて。いか
 ばかりの思ひをすらん。虚死仕て仕合に。東坡が袋を逃たりとも。生捕れてなまなか。張湯
 が刃をうけなむ。或は鈴を頸にさげて。兒童の戯となり。あるひは筆の用に髭をぬかれて。
 老の悔を殘せり。あやまりて晝鼠とあなづられ。濡鼠と笑はれ。更に吠鼠とくるしみて。人
 の爲にぞ悦ばれぬる。我さへかなしきを。焼鼠となりて。狐狸の命とらむこそ。あさましく
 罪ふかけれ。つくく汝が尊きを思へ。日よみの初に呼れて。位司いやしからず。百戲のか
 じこぎも。甲子をむかへて。年の號あらため給ふぞかし。あら玉の春立かへれば。子の日の
 御賀あり。子祭といへるは。いづれの長者の傳へなる。からの日本の歌にもよめり。海原や。
 もし月の陰に友なふなまこは。海鼠とかゝれ。秋風の尾花が末に妻こう鶉は。田鼠の化した
 る也。烏羽玉の闇き夜は。いかづちともなれり。象といへる獸すら。かゝ恐懼ぬる。麝香鼠
 は筑紫に住なれて。こと國に行ず。かづき姿のわかやかなるは。嫁入の繪虚事にぞ。どこの
 乙子を七郎とは申す。新左衛門とつけるは。さかやきすりての後なるべし。大ねら小ねら。
 將廿日鼠と名のり。月く十二の子をうむ。誰が家にかとりつくし得む。もし白子出て。福

の神にや愛せられむ。汝が隠里はいづくの邊りぞや。武藏野の鼠穴にや。出羽の境の鼠が關なるか。信濃の奥の鼠宿なるか。目出度身をもて。かけ柳の世をむさぶる。などか歸らん事を。おもはざる。窮鼠かへりて猫を嚇の志ありとも。三井の頼豪が。千疋のいきほひすら。本意を遂る事は。猶きこへざりけり。

旅ノ賦 並引

許 六

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見残しは。皆俳諧の情なり。我翁。白川の田植歌を聞初。奥羽の間をめぐり。高館の夏草に。兵共が夢を驚かし。あつみ山の夕涼には。吹浦を詠め。佐渡に横たふ天の川に。初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡りて。七百三十餘程を吟ず。曾良が落髮の力量を感じて。一鉢の飯を分て。風流を盡さる。田どひ芭蕉庵をたゞき。繪の雑談に及ぶ時。予に旅十牀の繪をかゝせて。讚じて何某が求めに應ず。其風雅にたより。俗語をあつめ。狂賦五段となす。あながしこ奥の細道。草枕の類にはあらず。

へ旅店のさま。上段に書院床。劔菱のすかし。火のなき火燧にやぐらかけて。門口の入湯浦。かたぶけて居たり。底に小砂のさはるは。夜への残りもいふかし。出女のたて囀は。春秋をしらず。根太板敷は落て。隅くまで塵とどかず。天井襖は。雨もりにきはづき。鐵行灯はくらく。紙はわらんべの心といふ事に燃たり。錢賣。草鞋賣にせがまれ。やうく枕をか

たぶけ。心よき寐入ばなは。馬さしの聲に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに。旅人も亭主もよく寐て。夜のあけてふためくつらもにくし。

へ大名の寐間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはい。船頭の胸づくしをとり。駕籠廻しをたゞき。馬さしとつかみ合。一僕の跡にさがるをねめまはし。鶏のなかにぬに。つれの男を起し。挑灯とぼして。夜道を行を手柄とし。入湯の一番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはらくといふ前に。

へ世話やきの友にあきたる旅の宿といふ句も。此情にかなへり。

へ海道の賣物に。餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはねば。未來旭王の前にてからきめを見るといへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは。逢坂の茶屋。饅頭のほかくと見えたるは。見付の臺也。卵子の煮ぬきは。木曾の旅。はな紙は竹にはさみ。錢の看板は筒をかけたなり。蒟蒻の田樂は。何ものゝ喰けるぞ。

へ乗かげに春の密柑やうつの山

へ舟川の上。馬駕籠の情。しばくかぞへがたし。五月の大水も。かり借の手形に書入。おのが草の戸は流れど。首だけの借錢を納して。しばらく息をつくものは。島田金谷の賊なり。水の浅深を何文川とこたへたるは。大きなる洒落也。天龍の中の瀬は。馬人足を空にまどふ。乗人は股だけ入て。荷を肩にかけて待。あがるものは。負れ支度して舟端に立。且那が鐘をかたねたるは渡し場の情也。馬士駕籠昇は。輕重に日月を送り。一盃の酒に。浩然の氣を

やしなふ。一生を漂と飄とすまして。雲介の號を蒙り炎暑の日も。玄冬のあしたも。榎の木の下に眠りて。蟻の都に到。終に飲喰を座敷につかず。汁かけて出す馬士の食と作られ。小便ははしりながら。吸がらは手の裏にはたき。銭は耳の穴に納め。金は積鼻樞に結ぶ。一とせの名残も暮て。世にある人とのとぶく月日を。出替の季と定めけるは。世をやすうおくる人にも似たり。

出女も出かはり顔や年の暮

へ清浪漂泊の上にごそ。あはれるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし兼。同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝。雲の夕暮に。情ふかきあるじは。長持くさき布子かして。ぬれたる物を焼火にあぶる。あるは三寶荒神といふ物にしがみ付て。しばらく足を休れど。極めの札場より追おろされて。却てのらぬ前より股をすくめ。兩方の手に杖を携てあゆむべしとも見えず。人間病死の到來は。時も所もまたず。醫療のたすけらどく。懐中のふり薬は。やうやう急病を防ぐ。巡禮飛脚の旅は。路頭に倒れ臥片目なる肝煎に追たてられ。老僧の懇みにて門下に入。おとろへかさなり。終に黄泉の下に趣く。かねて何國の土とならん。終をしらず。犬走の土中にこめて年の齡。衣類の模様を小札にしるされて何國のいかなる人と。いふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に。經文をよみて。同行の別を惜み。隅田川の念佛を尋て。我子の古墳にのぼる。今來古往の人。旅懷の情を盡して。風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて。二たびみちのくにおもむき。不二部鳥の二句を求めて。すみやかに故郷に歸る

者は。貞室老人なり。東海道の一すじもしらぬ人の。風雅におほづかなしといはれし。翁の
 聾耳の底にとどまる。

揚揮豆ノ賦

毛 統

○赤小豆殿の能には。一に俵に納り。二につとあかふて。是よりあかの 仇名を取。初春
 の粥には疫をのぞき。卯月の空の牡丹餅。うるはしき名目を略して。今様のいき過は。ぼた
 くとのみいひならはし。歌よむ人は。秋の夕のあはれなる名を好みて。萩の花とめされて
 より。誹諧の人は。隣しらずともよむなり。饅頭の唐韻めく時は。アンとよばれ。學のつよ
 き物識のこびる時は。赤飯ともいふ也。深更とは理屈人の名づけたる名にして。あかつきと
 解謎なるべし。蕪婁亭に君臣の義を盡し。七歩の詩は兄弟の情を述。從兄弟煮。不死汁の名
 は。いづれの御時にはじまりたる由緒をしらず。又あや折の竹にからめき。張鼓の糸につな
 がるゝも。かれが中の一つの遊なり。嫌となれば大きに嫌ひ。好に逢ぬればおほきにすく。
 かゝる堪能を持たながら。頓の料理に煮かぬるは。いかなる小豆殿の御分別かおはしけむ。

四梅廬ノ賦

僧 李 由

○恙を怖れたる時は。窩に住居し。氷の雨の用心とて岩窟の所々に残りたる世もあるに。廬
 に孫庇をおろし。下側にしころをつけて。民の籠の賑ひける社めでたけれ。堅田の蟹の舟に

年を重ね。乞食は橋の下に子を産たぐひ。鶯の巢のやさしく。鳥の巢のふつゝかなる。皆おのれ／＼が生得なり。ことしの秋。予ひとつの巢を営む。燕の土をはこび。蟻の塔をくみて四根の梅をたより。頬白の家をかゆるたぐひにはあらで。病鶏が塹に憑む。鳳凰の威をふるはむよりは。凡鳥の馴りなからん事をよろこぶ。山鳩が逸物の鷹と吹上らるゝも心ぐるしく。たゞ一日の閑鷗とおほえて眠る。蝸牛の釜打破らむとせがまれては。又出て蝸牛の部とのらめく。蛇の貝の半造作。榮蝶の蓋の戸もつらぬ住るながら。風雅の友の入亂れ。賓主寄居虫の家をわすれて。例の夜鷹の寄合よと。はやされてたのしむのみ。

閑居ノ賦

汝 村

○廬山の雨の夜に月をしたひ。たれこめて。春の行衛しらぬ住るもあるに。よしや吉野の奥は住うくとも。うき世の嵯峨のさがなきよりは。中／＼すみまさりけめ。栗栖野のおくの。菊紅葉の閑伽椰も。柑子の垣に見おとされ。宇治山の隠れ家には。梅柳の風流を爲れど。人喰犬にさめたり。花は一もとのさびしきをうらやみ。水はとく／＼の雪をしたふ。秋は東籬の下をめぐつて。沓の底をきらし。冬は西嶺のさむきを望て。笠の重さをわする。茶粥糲の輕みに。五臟を沙羅し。紙子背身のさびしき音に。千石をかへたり。詩は三籜の趣をさとり。歌は山家の風を好む。手桶一。鍋二。疊三疊。米四五升。手鼻の拍子をおほえて。紙のたくはへを忘れ。自剃の自由を得て。耳の危きをのがる。壁一重に市聲の喧しきを隔て。簾一

枚に車馬の埃を避たり。世を捨。世に捨らるゝ類。まつ事もなくて明しくらす社。まことの閑居とはいふべけれ。今の閑居めくものを見るに。食には八珍を盡し。酒には五味をたしむ。摺板の障子には。四季の花鳥を彩り。皮付の柱には。樟ふくらの名木を求む。額には花紺青の文字を彫め。軸にはきれ人形の箔を光らす。窓き所には水を湛へ。高き所に亭を築く。琴三味線の夕。小歌淨瑠璃の曉。隣家の眠を覺し。行人の足をとぐむ。粉白く黛翠なるもの屋をつらね。帶廣く袖長きたくひ廊をめぐる。牡丹芍薬に數金を盡し。蘇鐵海石に財をついやす。伽羅は交跋をくべて蚊ふすとし。燭は會津をたてゝ。月の光を奪ふ。或は地黄枸杞子を植て。地子をつくのひ又は瓜茄子を作つて。八百の店に出す。夕顔の借屋に。隣の生業を語らせ。柑類の菓摺には。錢の算用を聞。これらの閑居も彼清貧の閑居と名を同じうせむや。聖人いへる事あり。小人閑居して不善をなすとは。此閑居の見通しなるべし。

招魂ノ賦

支 考

○西方に吾翁の魂あり。行ていづこにか歸ざらむ。たましひ速に歸來れ。ことし神無月十日あまり。湖南の舊草に門人あそむでたましひをまつ。またばなどか歸り來ざらむ。たましひそれかへり來れ。柴門に春の花ちれば。鳥驚きて別をうらむ。蓬窓に秋の月落れば。人荒て住ずなりぬ。さればすみれ草の住よき世中に。何に卵の花の垣ねとはよみけむ。時鳥の行衛なからむにも春の雁の終にかへらずやあらむ。しからばたましひいづこに行としてか。還る

に道なからむ。還來れく。王孫むしは草とおひぬ。麝蕪の香いまや衣にみつらむ。まして花薄の穂に出てよ。まねかばなどかへらざらむ。魂すみやかに還來れ。東化坊は。此日のあるじまうけせむに。かの蕎麥切は。宇津の山道の細き手際にはあらねど。むかしの心わすれざればなり。豆腐は夜寒の都ぢかく。蒟蒻は黒津の里の名にしあへり。いかで世の人の風味にあまからんや。琥珀の霜をふるは菓や、かうばしく。瑪瑙の氷をふくめるは。酒更にみどり也。香花なほさばかりならむや。魂まづ歸り來れ。たましむ何にかあかさらむ。さゞ波や。打出の濱のむかしおほゆらむ。水滸ととながれて。山更に長し。長等の山の山櫻も。たゞ春のあだなる物にさきちりて。志賀の古びぞ年くなりける。かの辛崎の松の孤のみ。花の臙のちぎりやはわすれむ。殊にあはれむべき比良の高根は。人江の駒とむべき人こそなけれ。むかし堅田の。秋の夜寒に落ては。病雁の旅ねに。其身を佗しか。其後のたよりはきかずなりぬ。さるは水くきの岡の。名のみとむらん。鏡山の面かけも。今宵は待人あるにぞありける。松風の音羽山とかや。こなたの岡はまそばの花も咲たり。世に逢坂の關はあれど。粟津の原のあはでや歸らん。魂こゝに歸り來れ。世にいふ天堂は。人の心あまし。さるは風月の情過たらん。地獄はたゞおろそかに。まして風雅のいとまもなからむ。されば彌陀ほとけのねふりて。いとたふとげにおはせど。左右の御手の置處なからむに。地藏ほさつは色のみ白うして。梅の花の寒き所こそおはせね。焰王宮の人とも。たゞ世の人の是非のみ見むとすらむ。そも打とけたる心もあるまじ。しかるに杜國風蘭がともがら。岡司何がし。岐山の落梧

までに。明暮の心隔つまじけれど。十とせあまりの風雅の變におくれたれば。それも心ゆかぬ所ありて。相手にはいととほしからむよ。然らばたましむ誰にかよらむ。歸りて是を見ざらむや。たましむとく歸りきたれ。むかし俳諧に。詩歌の信ありといはれて。鶯の花に鳴。蛙の水にすめるたくひ。いづれか信まことなからんと。俗は是をもて世をいとなみ。僧は是をもて後世をたのみむとせしに。中比はいかいは信まことあらずとふみやぶられて。信ある人は。このまことなしと誹そしり。偽ある人は。このいつはりなしとよるこぶ。そも又炭俵すすばり。後猿蓑ござるものの變たるべし。今や俳諧は。信あらざるにもあらずといはむに。世に指ゆびをたふすもの。終にいくばくもあらず。其あらずといふもの。こゝにあらざらんや。此日の魂たますみやかに歸り來れ。かへらば吾翁わがおきなにせむ。魂たま誠にかへり來れ。魂たま誠まことに歸り來れ。

譜類

百鳥譜

支考

○鶴は仙家のもの也。是がみさは人にちかよらず。昔し。陶淵明に達摩たつまの風骨ありといへるものは。鶴に淵明が風流ある事をしらず。されば野草の花の。あきらかにひらきぬる時。柴門の月のあらたにすめる夜ならむ。此ものひとりは見まくおもふ也。しかるを鶯うぐいすの無能にして。衣裳もおろそかに侍るは。まして風雨にもいとほじとならん。かの莊周が。夢に胡蝶とあそべる。是もむつかしとやはおもふ。

へ雉子の啼聲はいとかしこきに。百矢の數をのがれずやあらんといはれて。一朝にたまの命を落しぬるは。是も韓信が輩の。文武をつくさざるものなるべし。

へ蒼鷹の人を見こなして。眼の内に。あらゝかなる才智をそなへたる。いとにくし。されど一藝に名あるものと。世の人それをゆるしもしつべし。

へかの斥鷃せきさんが蓬生よもぎふの宿は。膝をいるゝに過ねば。大鵬たいてうの雲の万里をうらやまず。さらばおのれをたのしむのみにして。かならずうらやむ方にもあらず。彼鳳凰といふ鳥は。いかなる鳥にかあらむ。

へ稻負鳥いなねせりぶがどり呼子鳥とかや。はこ鳥は春に住なるよし。なかぬ物にやしらず。椋たけと櫻うづとの二鳥は。

其實をはめる時の名なるべし。しかるを鶯といふ鳥の。花におきふしたらむ。いと心得ぬ。木々の花の咲こぼれて。明ぼの雪にもまがへる時は。駒鳥の聲のみ。ひややかにしていとよし。されば此鳥の名は。聲のたくひをいへるならん。をのれがかたちを。名になせるものは。目白頬白のたくひなるに。鶯は殊におかし。年々菊をいたどきける。自然の理はあやまたねど。ことしは珍しう。梅花をもかざせよかし。

メ雲雀は終日に啼暮して。はては雲にもふすにかあらむ。此ものは小春の空をよくおぼえて。鳥羽の田づらなどに。ふと啼出たるに。かるつけて囀る鳥もなければ。あはれさびしきものかなと。おもふ時もある也。

メ三光は。啼時に月日星といふなるよし。むつかしとも思はめや。佛法僧と啼鳥ありて。高野の山にのみ住なる。是をも三寶とこそいはめ。しかるに鶯の。法華經と唱ふる。さるは世さらに老めきたるわざ也。提壺の美酒をかひ。布穀の袴をぬけよといふは。皆おのれがゆゑならねど。世の人のしからしむるものなるか。蜀魄の不如歸と啼は。きはめて托物の聲ならくのみ。

メ秋の雁の江天におくれ。時鳥の曉の雲にさけぶ。いづれにかさだめ侍らん。鷹はあはれにほととぎすは悲し。

メ鸚鵡は恩をわすれぬよし。此國にはまれくなれば。よくもしらず。むかし蔡君が鸚鵡は琵琶が身まかりし跡の名を呼つたへしに。心をいたましむ瘴江のほとり。おなじくあそべど

もおなじくかへらずといへる。配所の詩ならばさもあるべし。我國の鳥も。物はえいはずし
て。万里の別をしたひ行けるとかや。扶桑十夷志八二有銅鳥
渡海三主名之故事是さへおもひかけぬ事なるべし。

ハ燕もゆかりはわすれぬ鳥也。終日にひるがへり。終日に轉りて餌にはかならず身をつくさ
ずや。いはゞ江湖の僧の。一夜二夜にちぎり捨て。身を雲水にまかせたるが。年を経て後は。
見しらぬ人もおほかる。されば行脚の身の。人にもおくられ。をのれもおくりたらんに。涙
のこぼるゝは。いかなる時にかあらん。かの法師の。宿かし鳥とよみつゝけぬるより。孤村
に出て夕陽を啼盡せは。誰が家にか今宵もおくらんと。あぢきなき事もおもはるゝなり。

ハ鷓鴣しことは名のかしこきもの也。青草の暮の雨には。遊子くまの魂をおとろかし。黃陵の曉の雲
には。旅人の涙を催す。すべて夜啼ものはかなしきに。水鶏くまは隱逸の風情を得たり。

ハ星月夜のおぼつかなき比は。磯のちどりのおほくあつまりゐて啼は。心もきゆべくてかな
し。たゞ人の別墅なる所に。水の湛たへもいと淺くて。常は來馴てあそぶらん。戸などかるやり
たる音に驚て忽二三聲のすみ行は其あとも。遙たうに見送られて河風寒しと思ひ出たるは。また
るゝ人もなくて。何にかはせむ。

ハ鳴はましてたつ時のあはれなるに。馬糞まぐそといふ鷹の。風にひるがへりたる。なまうかひに
ていとにくし。彼澤の夕暮は。江山の風情をそなへたれば。もろこしの雲夢うんむときこえし澤は。
いかなる澤にかあらむ。

ハ白鷗は人をさけて。をのれ靜しずかなるものなり。しかるを諫鼓かた鳥の。をのれ啼て。人をさびし

がらせむとす。なべて卯の花の曇は。いとねふげなるに。夕日の影も木の間にちり残りて。山にはおもひかけぬ鳩も啼也。啼處のさだかにしれねば。是もいとさびし。此ものはひとへに雨の日をかなしめるとかや。百花の深き所ならば。終日ぬるともいとほざらまし。

ㄨ 梟うぐいすの晝出て。まよひありきぬるいとおかし。かならず笑はれじと。はたらきたる顔にもあらず。さるたぐひの老僧にや。むかしも市中にあそびける也。

ㄨ 深草に住なる鶉は。其聲すみやかにして。世をはゞからず。山にもちかく。水にも遠からず。粟の穂の静なる時は。こゝにも出てあそぶなるべし。

ㄨ 啄木鳥つくだりの飢うまをしのびかねて。木にそひ。梢をたゞきあるきて。終日しづかならぬこそ。はかなきわざなれ。かぎりなき生涯の。いとなみとならば。誰もくあさましき事おほかるべし。されば空山の日影に。雹たばしりて。檜ひのきの柏かしわもちりくりに吹れ行比は。此鳥の聲の更に幽かすかにして。いさや。張道士が家を。とぶらふ人にも似たれ。

ㄨ 木がらしの夜一夜吹あかして。しのゝめには吹ずなりぬるを。さし出る朝日の。殊に珍しう。さし籠たる障子のかぎりは。もゆるばかり長閑なるに。物の影のさと過て。またゞきもあへぬは。いかなる鳥にか侍らんと。いつもくおもはるゝ也。蓋かた蓋とびなどのゆるやかに舞ありくも。隙を過るほどなればあはたゞしきか。

ㄨ 軒の雀の晴を喜こびて。何やら殊の外に囀る。是は市人にもたとへ侍らん。鶉は若僧の風情にして。人の隙を窺ひありくものなり。家鴨まなもおなじ家にはありて。おのれが身をおしと

もおもはずや。たゞに淤泥のけがれをもいとはずして。是を世の外に出て。物にもかゝはらぬとおもふは。さばかり悟たがへたる事は。世の人の上にもあるかし。そなへおきたる翅も。いつかは青雲の心ざしにあへらむ。誠にあはれむべし。

〽世に人を葬る者ありて。常は顔など見合すべきにあらねど。なすべきわざあれば。呼て酒のませ。價をもやりつ。しかるに鵜といふものは。詮なき鳥なるべし。早川に魚などかづきあげたる。をのれならずとも。網しても得つべし。さるものならば。わきまへぬ事もあるべきに。人の手にかはれて追はみたる魚をも。白地に吐せて。それをめでたしとさゝめかし。笹の葉打きせて。おくりもおくられもする人は。鳥よりは一しほもおとり侍らんか。鷹は羽の下に鳥をくみ敷て響れを人にも見られむと思ふは。せめて名の爲にもなさばなりぬべし。さらば此ふたつのものを。我友となさば。打おきたる心のいとまもなからん。

〽鵬はたちむにつれなくて。へつらはぬものなり。子など持たらばいかにあらん。

〽驚の風情はいとなまめかし。何がしの中將が。はつかに人を思ひそめて。雨にもそぼち。露にもしほたれて。常の心もさだかならねど。色には出じくところしのぶなりけれ。されど田面にうかれ出て。田螺ふみまよふ比は。まさしくさるものゝ。たとへとおほえずなり。〽楚臺の夢は。一夜の枕に驚き。驪山の契は。万里の雲を隔つ。朝の嵐に。錦帳を動せば李夫人が影も。ふたゝびはかをる事なし。しからば翡翠といふ鳥は。いかなる美人の魂にかあらむ。杜子美が衣桁に啼といへるも。此鳥ならで外はあらじ。名にめでゝ是を我友となさば。

はしなき人にやあやしまれむ。名を聞より。其姿のおもはるゝ。鶯鶯の中は更世瑠璃といふ名は。世の人のきくをもかざれるかな。

鶯の聲は。滑なめらかにして。殊に住所もいやしからねば。是も美少年のたぐひにはあらめど。風

情やゝおだやかならず。まして夜なかなぬは。いぎたなしともいへりけり。

鶯鳥とびかきの世をさみたる中にも。鳥ばかり鶯のいやしきものはあらじ。夕べには寐まどひ。朝にははやく起て前栽の木の實などにつきては。えおもひ捨ずや。いかなる時にか。息などもつまるやうに啼て。いととにくさげには待るなり。それをも神のつかひのみならば。かゝる事いひもせまし。

およそ鳥の。鶯のたいらぎたるものは。死水のあかを攪り。とがつて長きものは。魚を探り侍る。五穀をはめる鳥の。まどかにしてほそやかならぬは。誠に備たる事なるべし。鶯のさきのかいまがりたるは。おのれが友をやぶるべきたくみにや。いとおそろし。

鳥にして鳥の名にあらざるものは。鷓鴣いづかきの一名を泥滑ぬいおち々といひ。倭國わくににも。行子といふ鳥ありて。聲は少すくにこりたるやうに待れど。啼時はやゝ涼し。かの明々といふ鳥は。かしらふたつにて。はめるよし。むかへて我友となさば。米櫃いねの底をやはらはれむかし。

世を便々といふ鳥ありて。春秋のさかひをしらず。遊ぶ所又常なし。しかれども。巢つくらふ鳥の。明ては忘れ。暮てはかなしめる類たぐひにもあらず。たまゝ啼聲はありながら。公治長が輩ならねば。しるものなし。一説ニ夜遊テ朝寝ヲ好鳥也。其餌ハ。蕎麥白米ノ類。饑頭ハ睡ナリ。誠にしるものなからましかば。世

にありて是も亦詮なし。其形にたぐへたる陸鼻鳥（カラスガ）は常に人の悪をたゞし。（愛宕高麗ノ山ニ在テ、杉ノ木ニ懸ル鳥ナリ。）
迦陵頻（カラスガ）は聲の美におほれたれば。我はしらず。かの蝙蝠といふものにしたががはむか。

百花ノ譜

許 六

○當世の人の花過。古人の實すぎたる。いづれの時か。花實兼備の世あらむ。

梅の風骨たる事。水陸草木の中に似たる物はあらじ。十月一陽の氣に。燦々たる江南の玉妃。まづえめるより。生涯を物すきにくるしみ。風流のほそみに終る。是を色にたとへていはゞ。吉野高尾などいふべき遊君の。心おとなしく。名を恥。いき過たる心より相火の高ぶり。かたち瘦ぎすに。涙もろく。きのふの我に飽ける心より。一たび着たる衣類調度など。ふたゝび目にもかけず。人に打くれ。金くれる男なれども。愚癡なるにはすりぬけ。請出さるゝ場所をはづして。はづむだる男の一言に。百年の富貴をかへたり。借錢の利に利を重ね。やうく盛も過たる比。生前の本望を遂て。幽なる住居に。朝夕の烟をたてゝも。猶物すき風流の細みに富めり。子さへなくて。夏冬の寐覺もやすし。待事もなくて。世を靜にいとなみ。同穴のかたらひを。なせる人には似たり。

梅紅梅といふ花は。一度彼岸參の心を動かし。未開紅（未開花）の光をはなちぬれども。やがて菴（つぼ）くだけ。花ひらけてより。日くにおとろへ。雨風を帯。夕日にしらけて。つぼめる色を失ふ。たとへば三十過たる野郎の。大躍につらなり。心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

〽櫻は全盛の傾城なり。天晴あまはら富風に打こみたる風俗。行末明日のたくはへの。一點もなき花なり。〽海棠は。同じく時を得たる野郎の。大夫と仰がれ。勢ひもさかむに。世ノ中猛とのしれども。質素にしてうるほひ少し。誠に香のなき一色の。欠たる心地こそ本意なけれ。

〽梨花は本妻の傍に侍る。妾のことし。よろづ物おもひにうちしづみ。常に人の下になたてることがとし。

〽椿は。たゞありの人の。本妻とむかへたるが。端手はなでなる風俗をも似せず。ありがゝりに家を治め。身を脩めるをもとゝし侍れども。さすが女色なれば。うす化粧に紅粉をたえさぬ。

身持のよき花なり。

〽桃は元来いやしき木ぶりにて。梅櫻の物好ものずき。風流なる氣色も見えず。たとへば下司げしの子の。俄いつぱに化粧けしょうし一威いつせきを着飾まきざりて出たるがごとし。爛漫らんまんと咲みだれたる中にも。首筋小耳くびすぢこみみのあたりに。産毛うぶげのふかき所ありていやし。

〽藤は。執心のふかき花なり。いかなるうらみをか下に掛けむいとおぼつかなし。

〽山吹のきよげなる。眉目容まゆめくみすくれ。鼻筋おしとほり。襟廻りえりまわり奇麗きれいに生れつき。たゞ透融すうじゆうなソどいへるばかりにて。さして命をかけてとおもはざるたくひこそ。女の本意むねいとはいふまじけれ。〽長春。薔薇しょうばいのたくひは。紅白うつくしく。粧まきひたるには似たれど。元来いやしき花の。殊ことにさかり久しきこそうたてけれ。たとへば惣嫁そうよめといへる辻君の。日のくるゝを符兼。世上に徘徊はいかいし。物ごゝろおぼえてより。其ながれをたてゝ。五十にちかき比まで振袖を着し。始も

なく終もなきこそうるさけれ。

〽牡丹は。寵愛時を得たる妾の。天下にはどかれる。心なげに打ほこり。常は嫉妬我執のいかりふかくして。青天にむかつて吐息をつきたる風情に似たり。

〽芍薬といふ花は。いまだ嫁せざる娘のよはひも二八にあまりたるが。ねよげに見ゆる心地ぞする。

〽罌粟は。眉目容すぐれ。髪ながく。常に西施が。鏡を愛して。粧臺に眠り。浮世なソドの事は。露ばかり心にかけてぬ身の。一念のうらみによりてこそと刺こぼして。尼になりたるこそ肝つぶるゝわざなれ。

〽杜若は。のぶとき花也。うつくしき女の盗して。恥をしらぬに似たり。

〽あやめは。小づくりなる女の。目を病る心地ぞする。

〽百合花は數品おほし。笹ゆり。博多ゆり。鬼百合。色は異なれども。元來一種にして。生得いやしき花なり。たとへば輿車にのれる位なければ。かゝえ帶つよくからげあげ。上づりに懸たかく。あゆみ出たる女に似たり。

〽姫百合は。十二三ばかりなる娘の。後に帶うつくしく結びたるがごとし。

〽合歡の花のねふげなるは。深閨の中に縫物をかゝえ。晝眠る女に似たり。過にし夜半の。いかなる事かありて。かくはねふりけむ。いとおぼつかなし。

〽其下に書顔の目を覺したるは。廿にちかき比まで。男心をしらぬ女の。はじめて宮づかへ

に出たる比の。よろづつきなきありさまならんか。

紫陽花の花は。色白に肥ふとりたるが。ちかくよりてみれば白病瘡のあとのすき間もなくて。興さめてやみぬ。

蓮は。うつくしき所すくなし。たとへば上手の繪にかける。天人の顔にひとし。どこやら佛めきて。心こそおかるれ。

卯の花は。第一名目よし。時鳥の來べき比は。かならず。咲とおぼえたるこそおかしけれ。うつ木の花といふ人は無下の事なり。卯の花月夜の夕すゞみに。しろめたる衣裝に。黒き帯仕なしたる女の。ふと打つれたるが。行違ふ程もなく立わかれて。顔のほともおぼつかなく見かへせばはや尻影ばかりを。見送りたる心地ぞする。何方へかかよふらんといとなつかし。朝顔の盛すくなきは。よき女の常は病がちに打なやみ。土用八專のかはるく。隙なきに打ふし。一月の日數も。廿日はかしらからげ。引込たるが。たま／＼空晴きり。朝日さし出たるに。心地よげに打粧ひ。衣裝などあらためて。ほのめき出たるには似たり。

鶏頭は。和のなき花なり。よからぬ女の。一筋に貞女をたてるがごとし。

へらにの花は。蝶の羽に薫物すと。先師の賜より搜出し侍ること。其佳人の面影もなつかしければ。これに先をこされて。口を閉ていはず。

鳳仙花といふ花は。是もけばくしく。紅粉鐵醬を粧ひ。人の眼を驚かすやうなれども。手に携へて見るべきものにもあらず。木ぶり葉つきのいやしき事は。彼出女の李喰口もとに

は似たり。

〽女郎花は。いにしへより女にたとへ。我落にきと。法師の破戒によめるは。女郎の二字になづめるならむか。初秋の風によるめきたるも。菊にさきをかけられたらむは。手柄やすくなからんと。おもへる物ずきこそやさしけれ。此女郎花といへる物。花にしてはちと請取がたし。たとへば辭のうつくしきを撰みて。小歌を習はせ。髪をおろして是を比丘尼といふ也。大卒おほむねは女色にして。かざりなければ。大象をつなぐべき。執心のきづなもなし。さればとて。男色のかたづまりたる類にもあらで。男女の中にたてる風俗也。此花百花に類するて下葉すくなによるめきたるは。彼比丘尼のたぐひに比すべきか。葦あしも花も等ひとしく黄わうにして。桔梗は。其色に目をとられり。野草の中に。おもひかけず咲出たるは。田家の草の戸に。

よき娘見たる心地ぞする。

〽萩はやさしき花也。さしに手にとりて愛すべき姿はすくなけれど。萩といへる名目にて。人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の。よく歌よむときうつたへたる。なつかしさには似たり。

〽菊の隱逸なるは。和漢ともに名にたちたる花なれば。あらためてはいひがたし。風流物好すけ目だちたる事を嫌へるは。よき女のおつとなどにおくれて。閑なる片はづれに立しのび。よはひもいまだ三十に。なるやならずの盛なれば。さすがに髪などおろすべくもあらず。たゞ

一人あるおさなきものにひかれて。心ならず世中に住侘たるを。はづかしともおもへる人には似たり。

ハ寒菊の霜をいたゞき。雪をかつける中に。忽然と精骨を盡したるは。天地造化の行はれざる所はなしと感ぜり。たとへば越路の果のはてにも。三國。金澤。富山。高岡などいへる所くくに。おもひかけず風流のある心地とする。

ハ多牡丹のしやれ過たる。たとへば大津伏見など。分内狭き所の遊女町。工商の家の軒をならべ。打交りたれば。幽地のむすめども。傾國の風俗を見習ひ。養父入。牛身玉の里がへりにしやれを盡し。一向遊女の立振舞に似たれば。両親いかばかり悲しと制しつらむ。時と所をしらざるは。大きなるいき過ならむ。

ハ當世の人の花過。古人の實過たる。嗚呼いづれの時か。花實兼備の世あらむ。或問云々。當時人情の花にうつり。鳥に心を驚かしやすきは。ことごとく此文章に盡て。はじめて人の耳目を動し侍る。今先生が歎く所の俳諧の實は。いかなるをいふにかあらん。おほつかなしはやくこれを明し。はいかい大道に悟入させよ。答云々。夫、實のかたちをいはむ。荔枝の顔のぶつくとしたる。實性の人の髭尤よりくるしく。若暑き題の歌よまむとおもはゞ。はや此もとに立よるべし。姫瓜の丸顔は。さんちや風の佛あり。瓢の青ざめたる。熟柿のあから顔。下戸上戸はふるくして。今様は是をとらず。日やけの梨のじやくれたる座當のあたまこそ。俳諧の實には究り侍る。

山水ノ譜

許 六

○凡山水を多かくに法あり。一丈の山には一尺の樹。一寸の馬には豆ほどの人なるべし。遠人には目鼻を書ず。遠樹には枝なし。遠水波なくして雲とひとしかるべし。岩に三面を見せ。道には二の岐あるべし。すべて畫は遠近を知を第一とす。遠山近き山とつらならず。遠水ちかき水とまじはらず。林木遠きものは疎平にして。近きは高密なるべし。葉あるものは枝やはらかに。葉なきものは硬。土に生ずる時はなほく。石に生ずるものは曲れり。古木は節多して。半は死を書べし。四時の變化を察し山の淺深をしるべし山谷樹深き所には。寺觀樓閣のやねを重ね。水郷山店の間には酒旗の青白を懸すべし。これ王摩詰が。山水の賦の法式なるべし。やまと山水とてかはりあらず。されど城ある所には。天守を聳かし。神社ある地には。鳥居を書べし。山石水木ともにやはらかに。櫻は白妙に。和松は緑にして。これ其和漢各別の沙汰なるべし。富士は下野長く。景大やうに書べし。松島はあやしくたえに。景冷しかるべし。氣流は景を残してあはれに。九世戸は景等分にして麗はしかるべし。須磨明石はあはれにさびしく。吉野龍田は花やかにさびし。住吉は神久て面白く。泊瀬はむかしなつかしかるべし。六玉川近江八景。風雅の上をもて知べし。唐の僧。和の江湖を見ていへる事あり。これ唐の西湖に十倍せりと。和畫西湖を寫して。帆ある舟をはしらす。唐の西湖は水淺くして。人の溺るゝ湖にあらず。遊人の舟のみといへり。世上に洛中洛外の繪とて。

切箔惣金をきちらし。丹青あざあざかに彩りいろど黄白細微に文をなす。奴の頬髭ほらひげに墨を點し。傾城の唇くちびるに丹を含む。これ其遠近をしらざるもの也。假令丹青は塗とも。洛中城外の景色は。まつたく山水の部にして。遠人の格式なるべし。すべて畫圖をよくせむものは。先風雅をしるべし。古人畫中ノ詩。詩中の畫と云は。此所なるをや。世に料理する者。魚鳥を切事を知て。喰事をしらず。畫工はゑがく事を知て。面白事をしらず。されば面白事しらずして。面白事を書ざるは。何のおもしろき事あらんや。

風俗文選卷之四

説類

蓑蟲説

素堂

○みのむしく。聲のおほつかなかきをおほはれふ。ちよくとなくは。孝に専なるものか。いかに傳へて鬼の子なるらん。清女が筆のさかなしや。よし鬼なりとも魯叟を父として舜あり。汝はむしの舜ならんか。

メみの虫く。聲のおほつかなかくて。かつ無能なるをおほはれふ。松虫は聲の美なるが爲に。籠中に花野をなき。桑子は絲を吐により。からうじて賤の手に死す。メみのむしく。無能にして靜なるをおほはれふ。胡蝶は花にいそがしく。蜂は蜜をいとむ

により。往來おたやかならず。誰が爲にこれをあまくするや。メみのむしく。かたちの少なるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば。其身をうるほし。一葉を

得れば。これがすみかとなれり。龍虵のいきほひあるも。おほくは人の爲に身をそこなふ。しかし汝がすこしきなるには。

ハ義虫く。漁父が糸をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわすれず。風波にたへず。幾度かこれをときて。酒にあてむとする。太公すら文王を釣の誇あり。子陵も漢王に一味の關をさまたげらる。

ハみのむしく。玉虫ゆゑに袖ぬらしけむ。田鏡の鳥の名にかくれずや。いけるもの誰か此まどひなからん。鳥は見て高くあがり。魚は見て深く入。遍照が鏡をしほりしも。ふるつまを猶わすれざる也。

ハ鏡虫く。春は柳につきそめしより。櫻が塵にすがりて。定家の心を起し。秋は萩ふく風に音をそへて。寂蓮に感をすむ。木がらしの後は。空蟬に身をならふや。骸も躬も共にすうるや。

又以「勇文字」述「古風」

簞虫とと	落入臆中	一絲欲絶	寸心共空	似寄居狀
無蜘蛛工	白露甘口	青苔粧躬	従容侵雨	飄然乘風
栖鴉莫啄	家童禁叢	天許作隱	我憐稱翁	脱袈衣去
誰識其終				

柴賣説

○柴賣の柴うる事。小野。細河。くらま。高雄もあれ。矢背。小原は。花園梅が知よりは先お

かし。深山柴おのが籠に折くべてといへるは。すめるあたりの氣色ならん。かの秦の毛女が醫にも似ず。河陽の焦子か仁にもあらず。唯世渡りのよすがにして。女は都に出てこれを賣。夫は山に入てこれを樵る。頭は日に晒せども黒く。足は泥に染れ共白し。さすがに建禮門院の女房。阿波の典侍の扇などいふ人の名残あるにや。あをきひとへは。色香の爲に袴をつくろひ。裾して二布をあらはし。白き手おほひ。しろきはばき。白き帯はうすくたゝむでうしろにむすびさげ。幾男の心をか動す。春は躑躅山藤を興き。茅花虎杖をたばね。行さきさきの山づとゝなしぬ。道のほど一里二里。とほくは三里にあまりて。肩かゆる業もなく。花の陰には睡をもかけず。漸々京の町にちかづきては。歸の事どもちぎりて。大路小路にわかる。或はおろして門をはき。あるひは出口の市に米をしろがへて。小袋の首をくゝる。月の夕はつれにおくれて。紅葉の雨を分行こそ。いつかは我屋にいたらめと。見るをだに物うきに。東の翁の笑ひて曰。身のいやしきを思へば。官女もかたらひがたし。心の鈍を思へば。傾城もなほまじはりがたし。若妹脊をなさむに。此をなごをなむといたはり給へり。左禮言ながら殊勝にぞ侍る。

閉關ノ説

芭蕉翁

○色は君子のにくむ所にして。佛も五戒のはじめにをくといへども。さすがに捨がたき情のあやにくに。あはれなるかたぐもおほかるべし。人しれぬくらふの山の梅の下ふしに。お

もひの外の匂ひにしみて。忍ぶの岡の人めの關も。もる人なくはいかなるあやまちをか仕出
てむ。あまの子の波の枕に袖しほれて。家をうり身をうしなふためしもおほかれと。老の身
の行末をむさぶり。米錢の中に魂をくるしめて。物の情をわきまへざるには。遙にまして罪
ゆるしぬべく。人生七十を稀なりとして身の盛なる事は。僅かに二十餘年也。はじめの老の
來れる事。一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたふくより。あさましうくづをれて。
寤寐がちに朝起したる。ね覺の分別なに事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩
惱増長して。一藝すぐるゝものは。是非の勝るもの也。是をもて世のいとなみにあてゝ。貪
欲の魔界に心を怒し。溝洫におぼれて。生かす事あたはずと。南華老仙の唯利害を破却し。
老若をわすれて。閑にならむこそ。老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辨あり。出ては
他の家業をさまざまぐるもうし。尊敬が戸を閉て。杜五郎が門を鎖さむには。友なきを友とし。
貧を富りとして。五十年の頑夫。自畫。みづから禁戒となす。

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

師説

許 六

○いにしへ學ぶものは必師あり。師は道をつたへ。業を受。惑を解ものなりと。されどもろ
こしにも。此事久しくたえてつたはらず。まして吾朝には。むかしよりさる事をきかず。往
昔神道のさかむなりし時は。唯一の師有て道を教る事。退之がいひにかはらず。然るをいつ

の頃よりか。兩部といふ事はじまり。神道は日々にとろへ。佛法は月／＼にさかむにして、和國の風俗はたえ果。やう／＼家／＼に大黒どのをあげめ。初春をむかへては。惠方棚にしまめ引まはしたるこそ。はつかに和國の道の残りたるしならめ。當世佛道の師たる人を見るに。大路に門をし披き。鐘鼓を打て貴賤をあつめ。利益を説て實を誇かす。其弟子となる者を見るに。孤になりて家業にたよりなき人。あるは飛鳥川の淵瀬にかはりて。家を賣田をうり果ては。行所なき人。又はあほうの子共。片輪者の行末。父母の産つけたる黒髪。露ばかりもおしまず剥落し。素性法師がつぶりを撫ては。たらちめはかゝる涼しき事は。よもしらじなど輕みに落し。何某寺の新發意とはいふなりけり。これもいにしへの師道に相似たれど。世を渡る口すぎなれば。巫醫樂師。百工の師を求むるにかはらず。又弓馬兵法の道。諸禮。射方。讀書。有職の師たる人の。由斷せぬ顔つきこそをかしけれ。山伏の師を先達といひ。其弟子を強力と名付。比丘尼の師たるものを。お寮といひて。其弟子を米かみとはいふなり。伊勢富士の神職の人を。御師といふはいかなるゆゑかしらず。其道其業を教へて。仁にちかしとはいへど。年の暮のあはれを感じては。二朱一步の使を待かね。無盡の企。表がへの御付もうるさく。朝夕の搦鉢時を考へ。夜食の遅きなら茶を侘たり。さるは世の風俗にして。教ふる人もぬからず。まして習ふ人も猶ぬかる事なし。こゝに俳諧の師たる事。貞徳老人よりおこりて。貞室は弟子となり。花の本をうけ繼。これを天下の宗匠とはいふならじ。それより厨子小路に。點者の看板をかけて。あたらしき道を説て。宗匠めくものは一座

一興の宗匠にして。眞の花のもととはいはず。先師芭蕉翁、ひとり天下に甲たり。世擧て道を受。まどひを解。これを天下の宗匠とはいふなり。今のはいかい人を見るに。一生師と頼む人も見えず。見取聞どりの人眞似に。朝夕をあやまり。まどひより惑ひに分入事をしらず。人生れながらしるものなし。師にしたがひて惑を解。師説にうとき人は自己の善悪を究る事をしらず。先師身まかりて。十とせ餘。二とせの春秋をへぬれど師の餘光いまだ國中をかどやかせり。其道を繼十哲の門人。口をならべて我こそ血脉道統なれと。手ほめの宗匠にかどはされ。眞の道統ある事をしらず。其人の俳諧をしらんとおもはど。先其所のはいかを見らべし。眞の俳諧一人あれば。一郷すべて道に迷はず。これ言下に惑を解て。あらぬくまぐまをたどらぬ故なり。茲に弟子孟遠。余にしたがひて道を聞事久し。我官袴懸命につながれ。沈痾老衰の床になやみて。たすけとなる事稀也。今かれが爲に師説作つて送る。かならず余が俳諧のたうとき事を知て。余がはいかいたうとき事に迷ふ事なかれ。若明眼有徳の師あらば。すみやかに乗かへて。行たき方へ行べし。

名ニ阿段ニ説

許 六

○左右の下に物をつけて。文字の埒を明したるを社。李斯が手柄とはいふなれど。通字ありて己の己とよむまじければ。なくとも事は缺まじくや。名目のなき世ならば。一日もあるまじ。されば味噌桶に水風呂もせず。尿桶に飯をもらぬためしは。ありがたき名目にあらず

や。さるを今の人。名は天地以前より。つけ置たるとおもへる。いとかなし。けふ名をあらため。明日はや目のさけやう。鼻のかゝり。さも呼べき人とは見する。教識とは驪密の名。鐵巖とつめてはぬれば。禪師の號。大むね一派一流の名目あり。もろこし人の名づく事。深き心なし。敵を殺して我子の名とし。白魚を得て其名を定む。わづか一兩字の間に。ふかき心をつくめ。夕可木端の類も。漸きゝあき。一笑志計もあまりにつたなし。小坊主阿段よく茶をくむ。予が涙ととゞむ事。杜子が獠奴に等しければ。名づくる説つくつてかれにとらす事かくのごとし。

出女説

木 導

○傾城傾國は。唐人のつけたる名にして。白拍子ながれの女は。我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまた。かぞふにいとまなからん。國々の名目。當世の洒落。柄杓。干瓢。白人。巾着のたぐひ。大むね一種より出て。位階の高下は金銀の相當なるべし。たつとからずして勅撰にゆるされ。貴人のかたはらに侍るゆゑにや。少子細過て。おほくはふるみに落たり。爰に道人がゝりの遊君ありて。終に人の魂をとらかす意氣張も見えず。まして歌よむ程の戀にてもなし。たゞ物くひ。酒のみ。言語進退のやすき事は。かりに和光同塵の姿をあらはし。慈悲第一の出女とはいふなりけり。情生涯のありさまを見るに。地をはしる旅客の勞をなぐさめ。女郎花のたぐひにもあらで。江湖行脚の獨坊主を落さむとす。あるは朝立旅

人を送り。打着姿をぬぎ捨ては。箒を飛ばし。葎やり戸おしひらきてより。やがて衣引かづき。再寐の夢のさめ時は。腹の減期を相圖とおもへり。高足打の塗壁にすはりながら。通りの馬士に言葉をかはず。やうく晝の日ざしはれやかにか々やく比。見世の正面に座をしめ。泊り作らんとて兩肌ぬぎの大げはひ。首筋のあたりより。燕の舞ありく景氣こそ。目さむる心地はせらるれ。關札の泊りをうけては。あたらしき緊嶋に。京染の帯むすびさげて。鬢の雫のまだ露ながら。門の柱にうち添たるは。かれが一世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりで。いかばかりの仕合すらんもしらずと。頼母しく見やられ侍る。あるはすさまじき髭やつこになぶられ。弓同心の灸のふたつけかへ。座敷の手拍子に輕忽の聲を上て。返事をこたへ。油火かきたてる指は。をのかつぶりにぬくふなるべし。青天に塗木履を引づり。急用には赤脚で飛。御油。岡崎の全盛もむかしになり果。班女照手がうけ出されたる取沙汰もなし。もろこしの楓橋にて。月落烏啼の吟も。此君にあはぬうらみをのべ。江口の泊に。宿かさぬ君もなくなりて。今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかめがちにて。天津草津は少しうすかるべし。冬枯のまばらなる比は。いつとなくよはり果て。鼻の下の煤氣も寒く。木綿所の小車の音も。さびしく暮て。水風呂の火影に足袋さすわざも佗し。行田舎は法度きびしく。表向は勤もせず。されどあはれなるかたには心ひかるゝならひ。夜更亭主しづまり。ぬけ道よりしのびやかに。書院床の小障子あけて。神の瑞籬もはゞかりなくて。大腿に打こへ。終に一夜の枕をならぶ。出替は年の暮を定め。給分の加増は赤前垂をこぎる。物皆終りあれ

ば。古筵も意にはなりけり。此ものゝ行衛何にかならん。昔は普賢ぼさつにもなりたる先例もあれど。今はすこしの違ひありて。果は駕籠昇の妻にこもり。瘦子あまた産捨。間鍋の間まなべに餓て生涯を終る。未來とても覺束なし。紺屋の地獄まではあれど。出女の地獄の沙汰はきかず。たゞ八万地獄の門くくにたゝむも。又あはれなるべし。

雑説

不知作者

○人物禽獸は。其人物禽獸の粉骨なる所に倒れ。山川草木は。其山川草木のすぐれたる所にたふる。物皆おのがたのしみの纒なる所に。たふれ果るも哀なる事なるべし。瞿曇は無爲に倒れ。仲尼は仁義にたふる。莊老は寓言にたふれ。神仙は靈異に倒る。伯夷叔齊は賢にたふれ。楠正成は忠に倒る。火はあつきにたふれ。水はひやゝかなるにたふる。砂糖はあまきにたふれ。野老はにがきにたふる。長はながきにたふれ。短はみぢかきに倒る。されば瘡を愁ふる人は。痒をかく所にたのしみ。貧を苦しむものは。盜賊の難なき事をたのしむ。是皆和漢人情の趣く事は。さら／＼かはる事あるべからず。昔より風雅に倒るゝ人おほき中に。西行は歌に倒れ。宗祇は連歌にたふる。先師ばせを翁は。はいかにたふれて。生涯を終る。其門葉あまたの中に。たふるゝ所同じからず。武の杉風は耳のとほきにたふれて。微細の論をきかざれば。二十餘年半は流行し。半は流行せず。洛の去來は。風雅の正直にたふれて。春風桃李花の開くる日をしらず。其角は作にたふれ。支考は理にたふる。涼兎はふるみのしたる

木朝文選ニ
丈ハ松本
の閉關にた
ふるノで關
竹は大坂に
倒れ。尙白
は天津にた
ふさる。桃
隣は松本の
追善に倒れ。
洒落は雅波
の病床にた
ふる。嵐宮
は妻にたふ
れ。如行は
友にたふる。
正秀は金山
に倒れ。乙
州は宛にた
ふる。舍鐘
は遺棄にた
ふれ。惟然
は高みに倒
る。我は口
にたふる。
ものなり。

きに倒れ。露川は誹諧の數にたふる。史邦本導は風雅のつよみに倒れ。千那李由は風月の情の過たるに倒る。嵐蘭は鎌倉の月にたふれ。丈艸は松本の閉關にたふる。杜國は横にたふれ。惟然が高みにたふる。尙白は忘梅の趣向に倒れ。許六は文章の文に倒る。されば芭蕉流に倒るゝものあれば。ばせを流をたふす人もあるなり。鶯は時鳥に倒れ。櫻は紅葉にたふる。人は人にたふるゝもあれば。我は我に倒るゝものなり。

愛 梅ノ説

全篇説レ梅而無シ梅字。終句以ニ梅字一結レ之

○屈原楚辭にわすれ。菅家宰府に招く。西の對のおほる夜に。我身ひとつをかこち。孤山のたそかれに。疎影横斜をうつす。山路の朝日のどやかにさし出たる。折かけ垣の匂ひ殊に春めき。谷の扉うらゝかに打霞み。竹の嵐枯葉がちなるに。初音ほころび。十月江南の天氣。醉客馬にねて。酒家の村を出。師走の冬籠たる。越路の雪の中に。朝數寄の袂に匂をとどむ。遍照が折箸。皇后の額。數珠。十露盤の粒。書木。染屋の汁。これ皆かれが。風姿風情のわづかの端なるべし。彼説にいへるは。牡丹は花の富貴なる物なり。菊は花の隱逸なる物なりと。是れそのかたちにより。其愛する人によれり。蓮は花の君子なる物なりと。是は其理屈によれり。我は其理屈をとらず。梅は花の風雅を好むもの也。我は其風雅を好むものを愛する物なり。

艸字藤ノ説

五老并四絶之一也

程 己

○草臥て宿かる藤は大和路や。實となつては。俳諧のかたちにはあらはれ。手折て塗笠にかざさば。大津繪の風流なるべし。高松に倚托して。佞者のためしにひかれ梅の傍に來れば。怒て斧をとるわづらひもなし。藤の性酒をこのむ。山主常に餅をたしむに何の興ありて。かゝる曩々とは長き事ぞ。我おもふ。草字藤は。藤の中の下戸なるべし。情中^{じやうちゆう}にあれば色に出。これ其餅のかたちをあらはし。三尺さがりを咲けるよと。賓主とり廻してぞうらやまれける。

ハ打鏡^{うちかがみ}に蝸^{かぎ}のかざしや藤の花

草苧ノ説

露 川

○松の葉かきは雪間のけしきありながら。その親のまづしきより。其子はつゞれ着ておかしからず。馬糞かく子のいかなれば。親もなく。兄弟もなく。いづこより出て。いづこには歸るらん。さゞ波や。粟津の松の木の間かけて。馬の鈴音に風情は得たれど。鮑のいふかひなき名なるべし。此草苧は。笛の名人。さてこそ牛にも乗せておきたれ。夏は朝かけの。見てもいと涼しく。百合風車苧入て。絡緯^{らくりつ}のゐて鳴^な日もあるべし。秋はむら雨のとりあへず。道かきいそぎ。荷ひつれたるに。空また晴て又おかし。鈴鹿はかゝるけしきありて。坂は日

のてる所なるべし。

ハ草薊の道くこぼす野菊哉

山ノ芋ノ説

吾 仲

○芋に數種あり。山中に生ずるを山芋と號し。自然生と稱して山藥に用ふ。畑に植てまろがせとなるを。つくねと呼ぶ。其功も少なく。其味も次也。秦楚には玉延といひ。鄭越には土稽と號す。杜詩囊中の法をこゝろみず。陳簡齋は玉延の賦作る。鍾山の薯蕷は。三日炊るれど色を變せず。我國みちのくの芋は。糸を引事藕のごとし。四月に葉を生じ。初秋に子を結ぶ。ぬかごとよばれて座禪豆に入られ。いもが子ははふ程とよみて。叡聞に預る。寒夜の寐酒には。蛾眉山の芋をすり込。卯月の麥飯には。まり子の宿のころゝをうらやむ。世に腎藥をもてはやさるれど。貧僧の爲には少よろしからず。人參よく人を活し。よく人を殺す類なればとて。椶櫚ばせをを植ませて。其勢ひをもとされけるこそおかしけれ。

嘲ニ宵惑一説

毛 統

○秋の暮のあはれをしらぬ人は。人麵をこのみ。長雪院をする人は。唐様の書をすく。風雅のうつる。うつらざるの違ひなり。かの人生得灯を見ず。眠室にかきこもり。寐る事を樂の最上とする。寐酒さめ。夢盡て。ひたものねがへれども。夜の明るけしきもなく。屋普請の

胸算用も仕あき。大國を領じ。治めむとおもへば。言下に治り。又は金持の浪人となりては。嵯峨の奥に引こみ。斗薨頭陀に心を變じては。松島象潟に身をよす。されど繪に書る色に心を動かし。献立紙にすわりたる心地せられて。やがて興盡ぬ。たま／＼庚申の夜ありて。宵寐せぬ物とおどされ。大欠に懸金をはづし。田樂の焼るを待かね。病人の夜伽にあたつては。藥風爐に額を焦す。かゝる人たのしふといふ事をしらず。琴碁書畫は屏風の模様とおぼえ。花鳥風月は手本に書とばかりしる。昔宰予が晝寐も。夜ふかすあてに寐つらんかし。古人の燭をとるといへる。誠にゆへあり。人生七十今時はいきす。たとひ五十で死たりとも。百年の算用にはたつべし。晝ありく鶴鴻は。鷹につかまるれど。夜出る情鳥は。網にかゝりても。やがていなさるゝを。たふとしとおぼえたり。

解類

獲麟ノ解ノ解

許 六

○魯の哀公十四年。西の狩に麟を得たり。孔子大きになげき給ひて。春秋をとよむ。夫麟は
いづれの時出て。孔子は見覚え給ふぞいといぶかし。鼠は愚にして火難の家をさけて命をた
もつ。麟は四靈の隨一にして。狩ある事をしらず。うろたへ出たるも又いぶかし。孔子みづ
から聖に高ぶり。もしや牛馬の生れそなへるにてやありけむ。これも又いぶかし。麟うせ
道おこなはれざる物ならば。道は麟にのみありて。聖人の上にはなき事にや。猶又いぶかし。
麟ほろぶれば。聖人も共にうせ給ふ例にてもあるや。たとひ聖人うせ給ふ例ありとも。道は
まさしく存せり。是とともなげくにたらず。儒道たふとしとおもふものは。麒麟を第一にた
ふとび。次に聖人をあがむべきか。箸折るれば親に離れ。櫛の齒欠れば子に別るゝ占とて。
童蒙のものはふかく悲しめり。箸おるゝ毎に親にもはなれず。櫛木履欠るたびに。子を失ふ
にてもなし。されば仁義の占もあはぬためしもありぬべし。麟をすかぬ聖人もありや。又聖
人を好ぬ麟鳳もありや。むかし三皇五帝より以來。孔子の外出たる聖なし。和國も神代より
打つゞき。當時百年枝をならさぬ聖朝なるに。麟鳳出たる取沙汰もなし。夫は戸口を守り鶏
は時を報ず。麟出て人もおどさず。鳳啼て旅客の夢を破る能なし。出ぬ方の聖人。いよく

目出たかりぬべし。見ぬ唐土たうとの鳥もねじと。徹書記てつしきがあやまりたるは。もし出ぬ方をよみたるにや。世間聖人をしらずして。麟鳳にのみ目をつけて。末の凡夫の不目利ふめきは。かの一言のあやまりにて。聖人なしとおもふなるべし。今此麟を解かして見るに。とまり兼たる春秋のよき場所に出合せ。擧句あげの趣向と見こなしたらば。何の麒麟に理屈のあらむや。

長雪隠解

許 六

○一藝の達人は。郷童に上座を許ゆるされ。名字持たる人と。座席の争あざひをする。早喰はやぐ。早糞はやくそは。男子の一藝とは稱し侍る。此藝おほくは無風雅の人にあり。たとひ一藝はつきたりとも。一藝一徳ありて。萬徳一藝にはかへがたからんか。されば甲斐の名將の分別所に定め。山といふ隠語を残し。森もり蘭丸らんがんが。きざは鞘かぞへたるは。信長公も藝者と見えたり。詩歌連俳の名句も此所より産出うみだし。大悟十八度も。此室に入て工夫を極まめり。つくくくと一とせのあはれを盡して。鳴や霜夜のやまゆふ。菘すの編目あやめをもる月夜まで。人に心はつくめり。いにしへより朝市に隠家かくれがありといへるは。儘に此所の事なり。世務所用のいとまなき身も。しばらく閉關する時は。印纒おんたいを解とて。公役を許ゆるす。いそぎ閑居に入て。跡を遠ざけ。半日の寂寞ひまじくを樂まむと。尻しりをかゝげて走る。

何おもふ長雪院のしぶ團

藪醫者ノ解

汝 村

○世に藪醫者と號するは。本名醫の稱にして。今いふ下手の上にはあらず。いつれの御時にか。何がしの良醫。但州養父といふ所に隠れて。治療をほどこし。死を起し生に回すものすくなからず。されば其風をしたひ。其業を習ふ輩。津く浦くにはびこり。やぶとだにいへば。病家も信をまし。薬力も飛がごとし。それより物替星移つて。今は長助も長庵となり。勘太夫は勘益となる。當時の藪達を見るに。先門口に底抜の駕乗物をつるし。竹格子に賣薬の看板をかけて。文字の紺青も。半は元たり。たまさかの薬取を頼みて。薬店にはしらせ。物申は暖簾の内に答へて。女房の顔をつむむ。町役には牢舎を療じ。薬代にめで々は。河原者にのます。牛膝には牛の膝を尋ね。鶴虱は鶴のしらみをさがす。薬のみも次第にかれて。胃の氣よわり。元氣衰へて。果は何がし村の道場の明をまつ。我、俳諧の道をもてこれを押ば。師説もいまだとほからざるに。其手筋を失ひながら。宗匠めくをみるに。今はやらるゝ紗綾ちりめん。乗物の中もおぼつかなく。緋衣木蘭色のさとの拂子も。心許なけれど佛法には薬毒の氣遣なければ。其分なるべし。たゞ藪醫者のやぶはらに。又出る竹の子も。藪とならむこそうるさけれ。

風俗文選卷之四終

風俗文選卷之五

記類

落柿舎記

去來

○蟬にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど。このみも持來らず。代かゆるわざもきかねば。もし雨風に落されなば。王祥が志にもはぢよ。若鷹鳥にとられなば。天の帝のめぐみにもなれなむと。屋敷もる人を。常はいどみのよしりけり。ことし八月の末。かしこにいたりぬ。折ふしみやこより。商人の來り。立木にかい求めむと。一貫文さし出し悦びかへりぬ。予は猶そこにとまりけるに。ころくと屋根はしる音。ひしくと庭につぶるゝ聲。よすがら落もやまず。明れば商人の見舞來たり。梢つくくと打詠め。我むかふ髪の頃より。白髮生るまで。此事を業とし侍れど。かくばかり落ぬる柿を見ず。きのふの價。かへしくれたびてむやと佗。いと便なれば。ゆるしやりぬ。此者のかへりに。友とちの許へ消息送るとて。みづから落柿舎の去來と書はじめけり。

へ柿ぬしや木ずゑはちかきあらし山

幻住菴ノ記

芭蕉翁

○石山の奥。岩間のうしろに山あり。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて。翠微に登る事。三曲二百歩にして。八幡宮たゞせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には。甚忌なる事を。兩部光をやはらげ。利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日比は人の詣ざりければ。いと神さび。物しづかなる傍に。住捨し草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ。やねもり壁落て。狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじの僧何がしは。勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを。今は八年ばかり。むかしになりて。正に幻住老人の名をのみ残せり。予又市中をさる事十年ばかりにして。五十年やちかき身は。糞虫のみのを失ひ。蝸牛の家を離れて。奥羽象潟の暑き日に面をこがし。高すなごあゆみくるしき。北海の荒磯にきびすを破りて。今歳湖水の波にたゞよひ。鳩の浮巢のながれとどまるべき。芦の一本の陰たのもしく。軒端茨あらため。垣ね結そへなどして。卯月のはじめ。いとかり初に入し山の。やがて出じとさへおもひそみぬ。さすが春の名残も遠からず。つゝじ咲残り。山藤松にかゝつて。時鳥しばく過るほど。宿かし鳥の便さへあるを。木つづきのつゞくともいとはじなど。そらろに興じて。魂吳楚東南にはしり。身は瀟湘洞庭に立。山は未申にそばだち。人家よきほどに隔り。南薰峯よりおろし。北風海を浸して涼し。日枝の山。比良の高根より。辛崎の松は霞こめて。城あり。橋あり。釣たるゝ舟あり。笠ど

りにかよふ木樵きせうの聲。麓ふもとの小田に早苗とる歌。螢飛かふ夕闇の空に。水鶏くいなのたゞく音。美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は。土峯の俤にかよひて。武藏野のふるきすみかもおもひいでられ。田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽。千丈が峯。袴腰はかまこしといふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて。網代守にぞとよみけむ。萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと。後の峯うしろに這はのぼり。松の棚たなつくり。薬の回座を敷て。猿の腰掛こしかかと名づけ。彼海棠に巢をいとなひ。主薄峯しゅぼくに菴あまを結べる。玉翁除たまのおんじよが徒にはあらず。唯睡たひ睡すい山民となりて。屏ぞん顔がほに足をなげ出し空山に虱しじみを捫ひらて座す。たま／＼心まめなる時は。谷の清水を汲みて自炊みづからかしく。とく／＼の雫を侘わて。一爐いっろうの備まいとかるし。はたむかし住けむ人の。殊ことに心高く住なし侍りて。たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔て。夜の物おさむべき處など。いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は。加茂の甲斐何がしが嚴げん子こにて。此たび洛らくにのぼりいまぞかりけるを。ある人をして糶がを乞こふ。いとやす／＼と筆を染て。幻住庵の三字を送らる。頓とんて草庵くさあんの記念きねんとなしぬ。すべて山居さんいといひ。旅寐りびといひ。さる器うつわたくはふべくもなし。木曾の檜笠ひがさ。越こしの菅簔すさばかり。枕まくらの上の柱はしらに懸かたり。晝ひるはまれ／＼。とふらふ人々に心を動し。あるは宮守の翁。里のおのこ共入来りて。ゐのしゝの稻いねくひあらし。兎の豆畑まめはたけにかよふなど。我聞われきこしらぬ農談のうだん。日既ひごとに山の端にかゝれば。夜座しやざ靜しずかに月を待ては影を伴ひ。燈を取ては闇くら雨あめに是非をこらす。かくいへばとて。ひたふるに。閑寂かんじやくを好み。山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦うんで。世をいとひし人に似たり。つらく年月の移こし。拙せつき身

の科とよをおもふに。ある時は仕官懸命しわんけんめいの地をうらやみ。一たびは佛離祖室りまじつの扉とぎに入らむとせし
も。たよりなき風雲に身をせめ。花鳥に情を勞じて。しばらく生涯はかりごとの計はかりごととさへなれば。終
に無能無才にして。此一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり。老杜は瘦やせたり。賢愚文質
のひとしからざるも。いづれか幻まぼろしの樞すゑならずやと。おもひ捨てふしぬ。

へ先たのむ椎の木もあり夏木立

十八樓記

○みのく國ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。[臨葉山りんはな後ごに高く。亂山左
右にかさなりて。ちかゝらず遠からず。田中の寺は。杉の一むらにかくれて岸にそふ民家は。
竹のかこみのみどりも深し。曝布所はくふじよく引はえて。右に渡し船浮ぶ。里人行かひしげく。
漁村軒をならべて。網をひき。釣をたるく。をのがさまぐも。たゞ此樓をもてなすに似た
り。暮がたき夏の日も忘るばかり。入日の影も月にかはりて。波にむすぼるゝかどり火の影
もやちかく。高欄のもとに鶉飼するなど。誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の
八はちのながめ。兩湖りやうこの十じゆの境さかいも。涼風一味のうちにおもひためたり。もし此樓に名をいはむと
ならば。十八樓ともいはまほしきなり。

へ此あたり目に見ゆるもの皆涼し

芭蕉翁

五老井ノ記

許六

○靈泉あり。水のたゞゆる事。纒つづみに尺あまりにして。三尺の盆池よりながれ出る事。潺湲せんぜんと滔たうとたり。五老井と名づく。別墅をひらきて。五老庵を結ぶ。主人姓は森。名は許六。みづから五老井ノ先生と潛す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川ながれて。鳥籠とりかごの山南に近し。十旬の休暇をうかどひ。半日の閑を領する所なり。遙はるかに聞。東江ばせをの翁。錫を坂西に趣しめ給へるの折ふし。靈泉を共に汲で。風騒の匂ひを。葎ひづらの中にとどめむとならじ。其水の清き事は。惠山の泉脈を通じ。甘き事は肅州の金泉にひとし。立かへる春の朝。白散の薬をさげてより以後のちかた。四時の生涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間に。わきて泉を翫ふ事は。夏を主とす。霍山くわくざん鳴が井盤へいばんの納涼。西上人の柳の陰も。今此水に佛そひぬ。其德其要廣大にして。神佛のたふときをすゞしめ。且堯の井を堀ほり。禹の水土をたひらけてより。四民猶おだやかならしむ。後に山あり。さゞ栗の岡といふ。晴はれにのぞみ。雪に對して。眺望たうぼうきはまりなし。湖水の島々。江南江北の山のたゞまらる。日枝伊吹の嵩たけ。比良ひら三上の高根に眸まぶしをさく。西南の間に千鳥が岡あり。聖徳太子の御歌より。犬上いぬがみの名どころとなりぬ。杖を曳ひては籬さきを廻り岡に登る。炭は壘あへをたすけ。栗は茗粥めいしゆくを炊く。抑庵おさげは。纒つづみに筵むしろ三枚をまふけて膝ひざを窄すぼめ。賓主六人一座いっせに全まからず。茶碗五ご。枕五ご。三疊さんじやうの外に物なし。月に杜鵑つとくをそへ。驛路えきぢの鈴かねに。里の砧うづを合せて。秋をかなしむ。庭に箒はらをあてず。樹きに木鉄まがねを入ず。窓前の草おのづからな

り。たま／＼畑を穿てば。狛こまの爪種を求め。五色の茄子を植るといへども。山蟻の爲にせり落さる。吁あへ潜居士。文畫に僻へする事二十餘年。子斷せだ。芝瑞しずみを師とし楸子。梅道人が骨體を伺うかがて。雪裡のばせを。炎天の梅。自然に一味の風雅を兼かむとす。世上予が筆痕を樂みて。予が心頭のたのしひをしらず。風雅は是非をあらそひ。畫風は郷童の前のたはふれとなる。いまだ風雅の爲に。文畫をたのしふといふものを聞ず。予と共に志を同じうして。はやく吾をたすけよやく。終日樹下に徘徊すれども。更に答ふるものなし。四隣しりんの鳥巖。花間の蜂蝶のみ。笑て青天に腹鼓はらこぶを鼓し。五老の流りに脚あしを洗せんて歸る。于レ時元祿五年壬申、春二月。於ア三婆樂樹林下二澗さんばらくじりんか一澗せうくわうを

へ水筋をたつねて見れば柳かな

九花亭ノ記

汶 村

○亭あり。九花と名づく。九華は何ぞや。抑九花安妃あんひは神仙の名にして。山に九花あり。丹に九花あり。衾あふに名あるは王侯の用る處。魏ぎの武帝は臺たいに名づけ。唐の伊氏は室むろに名づく。觀あり。殿あり。帳あり。扇あり。菊に九花の名ありて。茶にも又此美稱あり。上清真人は。日月を呼んで大寶九華とし。李正臣は。壺中の九華をたくはふ。建勳けんくんは九花先生と號し。荀鶴けんかくは九花山人と稱す。我わ四柱の亭。九は陽の極數といふ。理屈にもわたらず。華は壯麗のひくみにもあらず。たゞ方寸をやしなふの天地にして。春は曙あけぼの。千里鶯啼あせりて。梅かうばしき隴

月に嘯ささき。青楓風すゞしく。ほととぎすあやめにかほり。水鶏くわがな若竹たに敲たたく。萩女郎花露細うらして。菊は黄きに。柞はくさびしげなり。比良伊吹遠くそびへ。金龜金花ちかく峙そびてり。亭外の風物すくなからず。亭中の物製もの。又いくばくぞや。屏風傘味あま。馬一疋。鶴一羽。亭あり。其主人は誰そ。近陽城下。松氏汝村みづから記すといふ。

琵琶亭ノ記

許 六

○むかし嘉祥かしょうの比。貞敏ていみんといふ人。三面の琵琶を唐土より傳り。猶代ゆだに作りおかれたる。樂器がくきおほしといへどもあるは火の爲にやかれ。又は田舎の土に落て。口おしき事のみおほし。こゝに名物一面ありて。終にもてあそぶ人なし。島の經政も。撥短はつたんうしてとどきがたく。關の蟬丸も。膝ひざせまければすえ所なし。柱ちゆうには四の島しまくをたて。落べきわづらひもなく。何某が袂たもとのそくいゐもいたづらなるべし。撥面はつめんにはから崎の松をゑがき。覆手ふくしゅには。勢田の長橋を横たへたり。二の月は。出しほ入方のながめを添そ。四時の細き絲筋を。絃手せんてにねぢあけ花さそふ山風に。春のわかれをおしみ。鶉鳴濱の夕暮には。秋のあはれをかなしむ。あけては彈はじ。暮てはおさむ。倦時うづは比良横川に足を打かけ。眠る時は三上伊吹に枕を高たかうす。此亭のあるじは誰そ。杉原氏みづから高たかぶり。これを琵琶亭と名づく。むかし伯牙はくががしらべも。鍾子期しゆんしきが耳みみなくては益えきなし。これをきく人は誰そ。五老井の許子六。力を合せ口にまかせて記す。同じ穴の狐の寄合。犬の嗅かつけぬ間を重寶じゆうほうと見るべし。

風臺水臺ノ記

許 六

○西梅廬の南北に。風臺水臺を築く。風は涼をとり。水は月を弄するの心なるべし。春の風あたくかに吹ば。水香しうして。梅の影を浸し。秋の嵐雲に音信ては。池あれて荷葉おろそかなり。主人律師。風に乗じて遊び。醉客李氏酌で月をとる。兼て榮耀をこのまざれば。まして名利の煩しきもなし。常に風狂の遊士。此臺にのぼつて。風水の二を諍ふ。其争ふ處は。たゞ餅酒にあり。上戸方は。風臺にふかれて水をうらやみ。下戸等は。水臺に腹をふくらかして風を望む。其いとみを見るに蠅牛双角の諍に等しく。源平水陸の戦に似たり。されど酒のみは。舌もぢれ。足よろめきて。下る事得難く。餅好は。胸こがれ。喰おもりして。更に動に懶し。終に相引に引退き。上戸は。桓公の蚊となつて禮を忘れ。下戸は。蝦蟇と化して。腹を撫て樂しむのみ。

紀行類

鹿島紀行

芭蕉

○洛の貞室。須磨の浦の月見に行て。松かげや月は三五夜中納言といひけむ。狂夫のむかしもなつかしきまゝに。此秋鹿嶋山の月見むと。おもひ立事あり。伴なふ人ふたり。ひとりは浪客の士。ひとり水雲の僧。僧はからすのごとくなる墨の衣に。三衣の袋をえりに打かけ。出山の尊像を。厨子にあがめ入て。背中にせおふ。柱杖曳ならして。無門の關もさはるものなく。あめつちに獨歩して出ぬ。今ひとり。僧にもあらず。俗にもあらず。鳥鼠の間に名をかうふりの。鳥なき島にも渡りぬべくて。門より船に乗て。行徳といふ所に至る。船をあがれば。馬にものらず。細脰ほこぼねのちからためさむと。歩行あちよりぞ行。甲斐國より。ある人の得させたる。檜木もてつくれる笠を。をのくいたゞきよそひて。やはたといふ里をすぐれば。かまがいの原といふ。ひろき野あり。秦甸しんけんの千里とかや。目もはるかに見わたさるゝ。つくば山むかふに高く。二峯ならび立り。かの唐士の双劍そうけんの峰ありと聞へしは。廬山の一隅いもなり。雪は申さず先むらさきのつくばかなとは。我門人嵐雪が句なり。すべて此山は。日本武尊たけのみことの言葉をつたへて。連歌する人の。はじめにも名づけたり。和歌なくはあるべからず。句なくは過べからず。誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地にしけらんやうにて。爲

仲が長櫃に折入て。都の土産ツツセに持せたるも。風流にくからず。きちかう。をみなへし。かるかや。尾花みだれ合て。小男鹿のつま戀ふ聲。いとあはれなり。野の駒。所得がほにむれありく。又あはれ也。日すでに暮かゝる程に。利根川トネガハのほとり。ふさといふ所につく。此川にて鮭サケの網代といふものをたくみて。武江の市にひさぐ者あり。宥の程。その漁家に入てやすらふ。夜の宿醒ヤトクサマし。月くまなく晴けるまゝに。夜船さしくだして鹿嶋に至る。晝より雨しきりに降て。見るべくもあらず。麓に根本寺ネモトジのさきの和尚。いまは世をのがれて。此所におはしけるといふを聞て。尋ね入てふしぬ。すこぶる人をして。深省シんせうを發せしむと吟じけむ。しばらく清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴ぬるを和尚おどろかし給ふれば。人とおどろき出ぬ。月の光。雨の音。たどあはれなるけしきのみ。むねにみちて。いふべき言の葉もなし。はるくと月見に來たる。かひなきこそほゐなきわざなれど。かの何がしの女すら。時鳥の歌。えよまでかへりわづらひしも。我ためにはよき荷擔かたんの人ならむがし。

八月はやし梢は雨を持なから翁
 へ雨に寐て竹おきかへる月見哉 曾良

南行紀

李 許 山 六

○鳥は黒く生れながら。鷺の白からん願ひもなし。笠はあるにまかせ。雨をしのぐ物に。菅簍カサはあれど。今様は合羽あつぽで仕廻しまわふ。錢を入したるは。草鞋一足にて。天晴あつぱれ旅人の出立は出來た

り。二月晦日といふ日に。蝸牛の家を離れ。名吉の國廻りにうかれ出て。田づらの柳。木瓜すみれ。遠音の雉子のうす曇。旅の心にはなりきりたり。前途路遠しと。杖の頭をからめかし。首にかけた頭陀袋。身は雲水の果しなき。布引山の山中に。道づれせばやと見れば。見しれる聖なりけり。男是より。角文字やいせの野飼の。跡や先やと打つれ。やがて土山の泊につく。手ふるき水風呂の時宜に時をうつし。聖長袖の役に。其夜はあら湯を請取。明日よりは湯番の前後を定め。猶日／＼の事筆に記さむ。これも湯番につけて廻すべしとて。書記も湯番も男に渡しぬ。

へ明れば彌生朔日。湯番の男ぬからじと起て。行べき所へはしる。例の一藝長と勤ければ。聖も、尻にて待兼たり。天氣よき夜明の雲あひしらみかゝり。並木の木蔭。まだほのくらく。遠近人の笠の内。そろ／＼見えたり。鈴鹿山越むとて。聖駕籠。男馬。

へ天井てんじやうに首くびはつかへて山さくら 聖

へ伊勢はてる馬士うまこの鈴鹿や花曇 男

へ下り坂。山あひくらく。朝霞の中に。坂泊の咄も程なくちかよたり。

へ鶯も竹屋どまりや朝あらし 聖

へ晝景色は。關の地蔵にて見るなり。茶店をすこし打たゝきて。しばらく。腰をかけたなり。

へ田樂やあふのく口になく雲雀 男

たそがれ過る比雲津ひぐもに着つば。宿の案内もおぼつかなし。

〆二日。聖夜ふかく起て。非番の男を起す。煤氣たる行燈の影に。會津盆の打ひらめたるに。日野碗の壺皿。いとさびしげにつきすへたり。見る目いぶせく胸ふさがり。やがてもかゝらず。杉箸しらげ直し。腹の氣しきつれなければ其日の役をはらふ。はき物は疥所よりしめつけ。笠は上壇より着ながら。此宿を出たり。前後の家並はしづまりかへり。左右の鶏の聲。みだれたる中を出ぬけて。火繩の火影ちら／＼と見えがくれなり。紀行毎に。溫底均が早行も聞あきぬれば。此度は法度にして。雲津川の假橋を渡る。かくはいへど景氣胸の内にかめたり。松坂の矢川といふは人の面白がる所なり。其所さき肩にとへば。今は絶てたゞの所になりたりといふ。筑摩。朝妻。江口。神崎は。むかし語りともおほえぬるに。きのふの淵は。けふの矢河となりて。人かはり。家かはりぬれば。搗米の船には。むなしく蠅のむらがり。草履草鞋の鍔は。徒に風に動く。今は其土に色香もなし。

〆松坂や越後屋とへば江戸さくら 男

〆出女の雪むら消て明野哉 聖

宮川の渡りを越て。代垢離の子共は。蛙のとく。一錢剃の缺は。蟹に似たり。

〆髮結の腰にしたるゝ柳かな 聖

山田に入て。何がし大夫のもとにつく。日高ければ。參宮の支度して出たり。

抑神前に詣でぬれば。よろづの事は忽わすれて。かたじけなさの一すじに。涙はおとし侍りぬ。

奉納二句

〆青海苔も和光の塵のひとつ哉 男

〆松 櫻川を隔て、墨の袖 聖

天の岩戸に入れば。灯明かややかし。常闇のむかし思ひ出られ。有難き事かぎりなし。

〆穴藏と見ればおそろし雉子の聲 男

内宮に詣で、御社ちかき杉のむら立に。御裳躰川はきよくながれ。御寶前はしんくとし
て。くり石の上に畏り拜し奉る。つたなき心にもまことはありて。又上もなき嶺の松風身に
しみわたり。小袖の膚にさはりぬるも。いまくしき心地せられ。あまりに忝きと思ふおり
は。さむきものなり。又奉納。

〆百八のなみだのかゝる蕨かな 聖

〆今ぞしる月日の花も梅さくら 男

つきせぬ御名残も暮に及べば。すでに御暇申て出たり。二見の方もゆかしけれど。行さき
そがしければ。おもひとままりて。例の大夫の許に歸りて臥ぬ。

序 類

曠野集ノ序

芭蕉

○尾陽蓬左。檀木堂主人荷兮子。集を編て名をあら野といふ。何ゆへに此名ある事をしらず。予はるかにおもひやるに。ひととせ此郷に旅寐せし。おり／＼の書捨をあつめて。冬の日といふ。其日かげ相つゞきて。春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着彌生の空のけしき柳櫻の錦をあらそひ。蝶鳥のおのがさまざまなる風情につきて。聊實をそこなふものあればにや。糸遊のいとかすかなる。心のはしのあるかなきかにたどりて。姫ゆりのなに／＼もつかず。雲雀のおほ空にはなれて。無景のきはまりなき。道芝のみちしるべせむと。此野の原の野守とぞなれるべらし。

元祿二年彌生書

猿蓑ノ序

其角

○はいかいの集つくる事。古今にわたりて。此道のおもて起すべき時なれや。幻術の第一として。其句に魂の入されは夢に夢見るに似たるべし。久しく世にとどまり。ながく人にうつりて。不變の變をしらしむ。五徳はいふに及ばず。心をこらすべきたしなみなり。彼西行上

人の骨にて人を作りたて。聲はわれたる笛を。吹やうになむ侍ると申されける。人には成て侍れども。五の聲の別れざるは。反魂の法のおろそかに侍にや。さればたましひの入たらば。アイウエヤよくひびきて。いかならん吟聲も出ぬべし。たゞ俳諧に魂の入たらんにこそとて。我翁行脚のころ。伊賀越しける山中にて。猿に小簍をきせて。はいかいの神たましひを入たまひければ。たちまち斷腸のおもひを叫まびけむ。あだに懼おそるべき幻術なり。これをもととして。此集を作りたて。猿みのとは名づけ申されける。これが序も。其心をとりにて。魂を合せ。去來凡兆のほしげなるにまかせて序す。

宴スガ柳後園ニ序

支考

○世にあそぶ人ありて。綾羅錦繡にたのしむ時は。樂つきて後たのしむものなし。山林樹下にあそぶものは。心にみたざれば世にうらやむかたも出きぬべし。此ふたつのさかひに居らざるものを。心に天遊ありとぞ。むかしの人もいへりける。されば柳後園の何がし。三四の友達ありて。遊ぶ事日あらず。額には閑の一字を題して。しづかならぬ時は横になし。やかましき時はさかさまに置て。その時の心に随ひ行は。大小の額見る心にや侍りけむ。此日東花坊も。此中にあそびて。人々酒のまむと催したるに。心に物をとめ。口に餘情をいふ人ならば。爵は金谷の酒もおしからむ。俳諧に案じ入たる時は。こよりといふものして。くさめさせむとぞたはふれける。

近江八景序

千那

○近江八景は。湖水の絶景をあつむ。比良堅田より。三井石山につらなり。粟津辛崎を見渡し。勢田矢橋を合せ。瀟湘の八景になずらへ。八の所を定む。そのかみ永祿第五。仲秋の月に乗じて。近衛の政家公。石山寺にあそべる時。はじめて此景を詠ず。すべて我朝國くくの八景。諸寺諸山の十境。題せずといふ事なし。されど此湖上の八に。いまだ並ぶものを見ず。いにしへより。八の詩歌はあまたあれど。俳諧の八景ある事を聞ず。されば近江八景はあうみ人がよしとて。繪は五老子が筆をかり。題はわが里。堅田の病雁の夜寒をはじめ。自他遠境の作を集て。すでに近江八景の一軸となす。これを集め。是に自序するものも。江州の産。葡萄坊の主人。僧千那。筆を本福寺の東軒にとる。

四絶文章序

李山

○許氏が五老井に四絶あり。絶は絶勝の義なるべし。ひとつには艸字藤。二には揚揮豆。三には雲花園。四には紫芝岡なるべし。我問事あり。四は須彌の四州によるや。曰。不然。四海四方の四にあらずは。四時四月の四ならずや。曰。不然。四恩四教の四にたよらずは。四民四姓の四の數によるや。曰。不然。四天四睡の四をねがはずは。四王四皓の四をうらやむか。曰。不然。我惘然として。問をやめたり。許子が曰。分別理屈は。我有にあらず。若三

絶五絶の増減あらば吾子が算用はたち所に相違すべし。たゞ一二三四の第四番にあたれば。四絶とはいふ也。むかし愚なる法師あり。無才にして法名の文字にくるしめり。ある人おしへて云。まづ法の一字をかしらにかうふらしめて。下はいろはを以てつくべしと、法師おほきにちからを得て。やがて法以。法呂と。段々に名づけて。すでに一二の篇にいたり。第六の番にあたれり。時にかはらけ賣身まかりて。法名たべといへば。法六と改名して。やがてとらせぬ。妻子ふかくなしひ。たとひ此世の業は是非なし。せめて來世に生るゝ時。此苦患をたすけたべといへど。法師かしらをふりて。我法名は土のたくひにはあらず。今六の當番なれば。是非なしとて。終に法六になして贈りぬ。今予が四絶もかくの如しと。おのゝこれを感じて。説。賦。銘。贊の四文を書して。終に五老志にとむ。某李由これに一章をくはへは。おそらくは五絶とならん事を知て。やがて四文章の始に序して。此心をのべて。此罪をのがるゝのみ。

要文集序

許 六

○相坂山の杉に雪はふれども。法花經くんと囀出し。淀のわたりの夜ふかきに。本尊かけたくくとぞ鳴ける。百千のとりくに。おのが一聲の外に。かはりたる音聲もきかす。鳥のかあくと鳴暮し。雀のちいくと同じ事囀るに。飽ずやありけむ。本尊をかけ。法花經よむ鳥は。かあくと。ちいくとよりは。少物しりたる顔つきこそおかしけれ。其顔つきにても。

同じ事ばかり轉るに。イヤ。ヲウ。にくし。可愛しのかはりめやありけむかし。よくぞ聞わけける。もろこしの鸚鵡あまうりといふ鳥は。人のいふ事をよく眞似ける。此國に渡りても。和語を聞きしり。父。母。爺。爺。口鼻かいはをよくぞまねける。此鳥此國になければ。はじめ終り慥ならず。かれもこれも。もどかし鳥といふは。父母の産うまつけたる轉りもなくて。明春諸鳥の眞似を所作とし。一生餌袋にたくはへたる轉りもなし。たゞさらく。さらく。と霞はぐふりける柞原はくげに。ある事ない事虚言うそ八百。これを樂の最上とおぼえて。筆にまかせ書付たるを。要文集とぞ申侍りける。

畫樓繪合ノ序

許 六

○和朝のいにしへ。繪かく人の中に。火難に家を焼て不動尊の妙筆をふるひ。あるは他の國に越き。漢王の夢に入て。雪ふねの名を残す人もありけり。當世の風情はあはれすくなし。布袋。福祿壽の二筆をおぼえて。あつぱれ畫師の一行いっぎょうに入。弟子となり。師と頼む時。第一番に人前をおしへ。次に筆法をしめす。唐土のゑかく人は。樓を造りて人を禁ず。起てゑがき。寐てゑがき。おのが精神を盡す。猫をゑかきて鼠ねを絶たすも。むべなるかな。われ畫樓えいろうを造らむ事。望久し。されど沈痾老病につかれて。筆をとる日稀ま也。一とせの中。夏暑の六七月は。墨爆すみはれ。膠かとらけて。ゑかく日なし。冬寒の三月は。水凍こほり。筆かじけてゑかく日なし。是を一とせ五ヶ月の禁筆とさだむ。猶雷雨風霜は。一日の禁筆。又公私のいとまをぬすみ。

花に座し。水に戯れ。月に嘯き。雪に吟じて。又ゑかく日すくなし。たま／＼清朗の日あつて。ゑか／＼むと席をうつし。水を汲時。例の雜客入みだれ。あるは物喰。酒飲。炭火にからをはたき。果は莊蝶が生寫しにあき果て。今年の春。頻に畫樓を造る。おほきさ方丈餘。東西の銘は。薄暮雲霧のくらきを扶く。北に書齋あり。半日樓にのぼり。半日は齋にこもる。人來て繪を好む時。きはめていふ詞あり。遅き事は三會の曉を期すと約して歸る。次の日來て。はや遅々の罪を責む。予が隣家にすむ人。一生ゑかく事を知ず。一生遅々の罪をうけず。我たま／＼繪なつて求に應ず。遅しといへども隣人にははやし。三年過る日は五年め也。五年終る時は。七年の月日也。これ成就の時節とするべし。樓成て門弟子六人。題を採て。人物山水花禽をうつす。各一軸を懷にして左右に列なり。すでに勝負を争ふ。此撰にもるゝ門人すくなからず。これを畫樓の繪合といふ。樓主五老井。許子六。自序作つてふける。鄭公が樗散にして。老畫師と稱するのみ。干し時元祿壬午冬。十一月日書之。

麻生、後序

許 六

○麻生あまの名を、烏帽子折あしやうともいふは。好に赤烏帽子と。同じゑぼしの釋なるべし。すべて世は好嫌ひの二より流れ出て。天地黑白のたがひともなるなるべし。妹といふは人丸の好。西行はなりけりより事起りて。後京極殿は。雪の明ぼのやうを好給ふ。俊成卿の鶉に。寂蓮法師の槇の夕暮は。たま／＼なるべし。桃といへば。桃隣にきはまり。翁は昆蕪をすかれたり。

是は精進物の沙汰に及べし。晋子が傾城に。阿山人が出女は。朝夕にして。名護屋の柿の。かの字のひゞきは。未摘花のから衣と。同じ五音のカキケコなるべし。鳥落人が赤いはく／＼の赤きは。好に赤烏帽子の。あかい所を發明したり。されば。撰者の范疇も。柳後園の人なれば。柳の青き所をも。此集に述らるべしと。俳諧大居士跋す。

銀河序

芭蕉

○北陸道に行脚して。越後、國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは。海の面十八里。滄波を隔て。東西三十五里に。よこおりふしたり。みねの嶮難谷の隅／＼まで。さすがに手にとるばかり。あざやかに見たさる。むべ此島は。こがねおほく出て。あまねく世の寶となれば。限りなき目出度島にて侍るを。大罪朝敵のたぐひ。遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞えあるも。本意なき事におもひて。窓押開きて。暫時の旅愁をいたはらむとするほど。日既に海に沈で。月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら／＼と冴たるに。沖のかたより。波の音しば／＼はこびて。たましひけづるがごとく。陽ちぎれて。そゞろにかなしひきたれば。草の枕も定らず。墨の袂なにゆゑとはなくて。しほるばかりになむ侍る。

△あら海や佐渡に横たふあまの川

番椒序

野坡

○とうがらしの名を。南蠻がらしといへるは。かれが治世。南蠻にて久しかりしゆゑにや。未詳。酸醬子。天靨のまき。空見。八なりなどいへるは。おのがかたちを好める人くくの。蕪びて付たるなるべし。皆やさしからぬ名目は。汝が生得のふつゝかなれば。天資自然の理。さらくうらむべからず。かれが愛をうくるや。石臺にのせられて。竹椽の端のかたにあるは。上々の仕合なり。ともすれば雷鉢すいかちのわれ。底ぬけ釣瓶つりびんに培れて。やねのはづれ。二階のつま。物ほしの日陰をたのめるなど。あやうく見え侍るを。朝貌あさおものはかなきたぐひには。誰もくおもはず。大かたはかづら髭ひげつり髭ひげの益雄ますおにかしづかれて。貧乏樽ひんぱんざんの口をうつすみさかなとなり。不食無菜の時。不岡ふもと取出され。おほくは奴僕やつこ豆腐の比。紅葉の色を見するを。榮花の最上とせり。かくはいへど。ある人北野詣の歸るさに。道の邊の小童に。こがね一兩くれて。汝が情とひとつみのりしを。所望せし事ありといへば。いやしめらるべきにもあらず。しかじ。今は其人とも此世をさりつれば。いよく愛をも頼むべからず。からき目は見すべからずと。小序をしかいふ。

へ石臺を終つひに根こぎや番椒がら

風俗文選卷之五終

風俗文選卷之六

箴 類

飲食色欲ノ箴

許 六

○善は常也。惡は變なり。惡出て後善あらはる。善惡に迷はぬ人は。其善惡になづまぬ人なり。食は禮より重く。色は民と共にせよとかや。されど食の命をやしなひ。色のあはれをしれる功も。なづむ心より。やがて大病を生ぜり。色は三教ともににくむ事甚しきゆゑに。甚制せられず。和朝歌道のおしへの高き事は。戀を第一とす。色は風雅也。風雅は仁なり。惻隱の心あり。大舜の二女に嫁し給へるも。今日おして見る時は。是畜生なり。かのながれを汲やからは。これらをもよしとなづめり。元來畜生兄弟姉妹と嫁する事をせずは。人倫は姉妹と嫁する事を道とやはいはむか。彼教には。後なきを不幸の第一とたて。孝を五倫の始におけり。若周公。孔子。天性精の虚したる人ならば。子なけむ。第一の孝道は欠ぬべし。是とも聖人のまつたきといふべきか。桀紂が極惡も。子あれば是孝子なり。子なき君子にはまし侍らんか。

〽吾朝。いづれの御時よりか。西域せいやくの教を廢めり。此教は後なきを第一とせり。其ながれをたつる者世よかに多し。大路を行人も。十が三四はこれ也。神の道に合してこれを兩部と云り。扶桑東夷の機きをよくしり。かつ小國の分量をよくさとせり。地のせまく。人の過たる國也。彼やからの人と。後なきを不孝とし。鼠の子を産捨侍らば。程なく富士山もこぼち入られ。湖も彌鹿飛いやくしとびを切ぬく沙汰に及ばむ。堂塔に金銀をちりばめ。法事法序に美を盡すといふも。其費は國にとどまりて。他の所へはもれず。多の眷屬くわんぞくの食ひつぶし侍らんよりは。いとめでたし。佛供といへる物は。備へたるばかりにて。曾てへらず。是日の本建立の源ならむか。こゝをきれ。かしこをたて。子孫あらせじと思ふなりとの給ひて。一人の罪人つみびととなり給ふ。御心こそありがたけれ。しかはあれ共。此頃は。僧のかくし子といへるものあれば。少しもどるか。

〽温飩は汁をほめられ。蕎麥切は。からみに威をとられり。奈良茶は。跡一盃を茶につけらるれども。其號なづなを持ち。飲食器物共に。勝れたる極品の物は。賓客のもてなしとせるに。たばこばかりは。亭主を奔走せり。客人たばこは。へらぬを調法とせるは。何ぞや。

〽餅は心地よき物。酒はうれしき物。茶は淋しき物。もちくひは酒をのまず。酒好は饅頭をくはず。是天の自然か。たま〜上戸に。嫌なき生れつきあるは。牙あるも角をいたゞきたる類とやいはむ。

〽傾城の色は。晋子が見届て。いひふるしたれども。遊君の情は。下品にこそおかしき事はあ

れとて。木導は出女の上を盡せり。よき遊女のきぬくのうつり香は。こぬか袋の匂ひともおもはる。やす傾城の匂ひは。郡内島のうつり香ならん。追込辻君のたぐひは。にほひ曾て定まらず。

〆隠居の妻ほど。うらやましからぬものはあらじ。さだまれる名をさへいはれず。若きをも。祖母くよばれつるこそうたてけれ。色欲におぼれて。あくまで淫するものは。男女に上下のたがひありて。高家富貴の人の妻は。七人半のあてがひといへるも。男子の徳とおぼえり。たとひ七人が十人といはれたり共。いやとはいふまじきに。半とかぎりたる。はしたの妻こそおぼつかなけれ。

〆雪駄の男。鼻紙の知音とさだめて。いくたりの妻を重ね侍るは。下女やはしたの上の奢なりけり。筑摩の祭のあとたえて。おこなはれざるは。かれらが爲には。おほきなる仕合ならんかゝる淫樂の世となり行も。神道のおとろへたる。神のとがめとやいふべき。

〆鮫鱈。河豚魚といふ魚あり。形も大きにうまれつきて。あくまで肉をくはれながら。汁を吸るゝを手柄にいはいれけるこそ。大きな損なれ。

〆鯛は魚の最上とほめられながら。鼻尿にて釣られける。ためしもありや。いと口おし。〆鯨といふものは。魚類の下品にいひなされて。いやしきものゝそへ物となるのみならず。田島の肥となるこそ。猶口をしけれ。しかれども。正月のことぶきに引出されて。上臈のましはりをするを。自慢顔なり。されどもかしらばかりをはやされ。獄門のごとくになりて。

口／＼にさゝれ。果は帚の先にかゝりて。行方しらず成行けるも。猶／＼口をし。
 ㄨかながしらといふ魚は。あたまかちのみにて。くふべき所すくなし。彼かしらのかたき所に手柄ありて。産屋のことぶきには。かしづかれて出る。惟然坊が。つぶりのやはらかなるは。かれにも似よかし。

ㄨ魚鳥の匂ひをもてなざるゝは。むしり喰れながらも。本意とやはおもふらん。

ㄨ鶴は。芹の香の俤を残し。雉子は。昔なつかしき匂ひをとどめり。瘦て小兵とはいへとも。雲雀のいきりもの。水無月の鶴鴝とはこりける。

ㄨ生海鼠といふものゝ匂ひは。たとふべき物なし。牛房の香にかよひておかし。松茸のふん／＼たる物に。毎度相の相客に出らるゝ類ひ。

ㄨ焼蛤の馨しきには。胡椒の粉の鼻に入たるがうれし。かばやきの匂ひ。風流にはあらねどうまき匂ひとやいはむ。

ㄨある法師の。茄子の鳴やきをほめられければ。傍の俗人。鳴の茄子やきも又よしと返しける。ㄨ時を感じるといへるは。かけ菜に打大豆汁の春めきたるもあるに。つまみ菜に。唐がらしの青くさきは。初秋のあはれをすゝめり。

ㄨ芹露のたうを。春の景物に撰置は無念なり。定家の卿。冬の花に梅を讀給ふいとよし。

ㄨ鯛は。節振舞をかぎりとし。鯖は生身玉を終にとれり。

ㄨさんちやは四つ時。出女は。八つを威勢の盛といふべし。吾翁。色と義の道をしめし給へ

る詞に云。

色をおもふ事は。うどんを見るがごとく。

義を守るものは。唐がらしの辛に類せよと。

ハ山葵。生姜。蓼。からし。山椒の辛き類も。各其場所を得たり。海鼠腸といへる物には。わさびの打あかりたるからみをすり込。昆布に巻込るゝ時は。山椒の手柄を見せたり。鯉のにつけの清げに。飯鮓のおぼつかなき味をもてる。

ハ色はおもひのまゝならぬを命とはよめり。あはぬをかこち逢夜の鳥をうらみ。待宵の鐘に。戀の情を盡せり。湯殿柴部屋しやべのせはくしきちきりに。百とせのよはひをのべたる心地して。さらぬ顔をつくり出たるもおかし。せはしき事を。戀のあはれといふとも。八坂北野の茶屋ものゝ振廻ほど。手廻しなるはなし。燭臺ろうだいを握り。階子かゐしに上り。客を迎ふるより進退に左右の手を空しくせず。内の亭主心得て。二階口へ銚子ちやうし盃さしさし出し。取肴あまたならべり。二三献の過るを待かね。屏風引廻したるは。つまみくらひたる。鮓しよや酢貝の。胸につかへたる心地やせむ。

ハ玉子。山芋は。腎の薬とばかりおぼえて。同じくひ物ならば。水をます物にしくはなしとて。朝夕すゝめり。虚實ともに病となりて。尅する所をしらず。古人も。口よく病を致し。其徳を敗る。口を守る事は瓶のごとくせよとはいへり。吾生はかぎりあり。情欲はかぎりなし。色好むものは。みだりに淫せず。傾城に家を亡すものはあれど。腎虚をしたる人をきかず。

聽ノ箴

許 六

○耳はきく事の役者にして。聖人耳に惡聲をきかずといふは大きな無理也。たとひ山林深谷にかくれたり共。惡聲を聞ましとはいひがたかるべし。されば釣鐘も通ぜぬかな響こゝろをよしとはせず。瘧やせは元來母の胎内より聾にして。此世の音聲をきかずとかや。元來舌の短きにはあらず。其かたちを見ず。其聲を聞て埒するものは。神鳴。ほととぎすのたぐひなるべし。尤鳴神は。雲中の沙汰なればさもあらんか。昔より此鳥。此聲をなくと。慥たがに引合てきく人なし。當世は鳩ひよどりのたぐひ。此聲を鳴もしらず。たと本尊かけたとなげば。是非共此鳥にするもおぼつかなし。和漢詩歌の相遠あり千聲萬聲。たと鳴くとばかり。詩には作れり。此國の歌には。なかぬ事をかこちて。きかぬうらみをよめり。つまる所はひとつなり。和國風流の手柄にして。此鳥にかぎらず。此たぐひ多し。琴をきむとよむは。禁の字の心なるべし。此音を聞時は。邪念を禁する事也。もろこしの人は。常住これを左右にし。旅行にも擬へ。瀧を詠むにもたせり。すべて一日の中。見る事は一にして。きく事は九つなるべし。須臾しゆんの間も。耳中に物の音聲の。客とならざる間なし。されば見る警せいよりも。聞警きこせいはさきなるべし。其かたち見たらんより其聲をきくに。情をますたくひこそおほけれ。むかしより見ぬ戀にあこかれ。思ひをちとにくだき。傾城の箱階子あらゝかに踏ならす音は。見るよりも其音に胸つふるゝわざなれ。蕎麥切はおろしの音に心ときめき。樂屋がくの笛のしらべは。其

猿樂のめでたく。舞かなづるよりもゆかしきわざなれ。隣家に餅つく音。極熱の頃。垣を隔て、車井のはしる音は。其亭主の心まで。涼しく思はれ侍る。和朝もてはやす。小歌。淨瑠璃。築後。三味線。是皆姪樂とて。君子はいやしまれける。此音曲をきく時は。何のあて事もなく。不圖戀慕のおもひを催す。鉦鑊鉢の音は。我人心よからぬ聲と。おぼえたるこそことばりなれ。此音聲は。無常を催す事を。第一につくれり。むかし聖人。樂を以て天下を治め給ふ。我朝の樂も又同じ。夫樂は。天地を動かし。神鬼をなかしむるもの也。これを聞人感をなさずといふ事なし。是其民の邪を禁ずるの源也。されば畔を譲り。戸さしをわするもことばりならん。淫樂暗に戀の思ひをなし。鉦鑊鉢。自然に死の近づく事を悲しふ。是人心の私なきしるし也。何ぞ聖人樂を以て。國を治るに治らざらんや。王昭。西施が美なるをきけど。人終にほれたるためしなし。これ其王昭西施に念を動かさざるしるし也。吾情ただしき時は其物にあつからず。聖人耳に惡聲をきかずといましめ。禮にあらざればきく事なかれといふも此あたりのいましめなるべし。

銘類

机銘

芭蕉

○間なる時は臂をかけて。嗒焉吹嘘たつんすいすいの氣をやしなふ。靜かなる時は書を紐とひて。聖意賢才の精神をさぐり。靜なる時は筆をとりて。義素ぎすの方寸に入。たくみなすおしまつき。一物三用をたすく。高さ八寸。面おもて二尺。兩脚にあめつちのふたつの卦けを彫ほりにして。潜龍牝馬せんりゅうひんばの貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせむや。

東銘

支考

雙白堂ノ主野紅子。夫妻相共ニ好風雅。因有双白之號。東銘指野紅子。
西ノ銘ハ曰「其ノ妻」

○むかし人の繪を書そめしに。丹青は後の事なりとて。此白の一字をぞたふとまれける。身に錦繡をまどひ。頭に金冠をいたゞきて。君といひ。臣といひ。男といひ。女といふ。さるは人の見て名づけたる名なるべし。しかるに女のをみなへしは。嵯峨野の露のよすがもあるに。男のをみなへしは。いづこの野邊の秋にかあらん。たゞ此双白堂のあるじとならば。かの商山の翁に頭ならべて。花もおもしろからん。月も面白からむ。其銘にいはいく。

へ花鳥にさとれはもとのしら髪かな

西ノ銘

許 六

○つよからずつよからぬ女の風雅は。糸筋のごとく。此糸五色に汚れざれば。狂客の悲しみをそへても。何がしが緇塵にそまらざるよろこびを見せたり。天の香來山の衣をたち。布引の機物をはえたる糸すぢも。皆是ほそみより出たる。女の手わざならん。猶日本紀の局か。初音の巻にいひけむ。瀧のよどみの年なみより。水上としつもりて老にけらしな。黒き筋なしとは。共に双白堂の事なるべし。其銘にいはいはく。

へ髪の花女瀧男瀧のかざしかな

茶碗ノ銘

嵐 雪

○黒茶碗あり。花の朝は。ますくくろく。雪の夕は。いよく黒し。月待宵のやみをさぐり。闇夜に鼻をとられしは。をのくつちめくらのまじはりなるべし。

檢校 貧僧 大黒 小ぐろ はちの子 早ふね 小雲雀

三代目をのん子といふ。のむこゝそふかき意味あれ。秘してしばらく残す。

へまつむしのりんともいはす黒茶碗

雲華園銘

五老井四絶一章也

汶村

○夫茶は龍鳳を貴とするは。歸田録の詞也。和漢飲食の中の重味也。陸羽が茶經にのする所。建州。洪洲に名茶多して。杜牧もこれをほめたり。和朝明惠といふ聖。唐巴東の實をとりて。始て越前の國に植。都の北。梅の尾に移せり。猶茶の土地に住ならずとて。終に宇治山に掘りつして。上林何某が家をかぐやかす。近世の土産は。駿州の安部。美濃。莖長。熊野。近江。其中に江東の茶勝れたり。政所。松尾は極品也。しがらき。宇治田原は。又其次也。槩山禪師來朝して。唐茶の鍋煎を製す。世もつて隱元茶と號す。これは是出し茶也。それより首の長き茶鑪を作つて。給仕の小坊主をたすけ。几下牀頭にすへて。手づからくむ。其銘に云。

能さます 能まじはる よく悟る よく寂す 能すゝむ 能へらす

六の徳を兼るといふ共。茶ありて水なく。水あつて茶なくは益なし。龍焙。金砂の二泉は。茶を煮るによろし。三の間の水。柳の水ありといへども。許子が五老井を汲で。此茶を煮る時は。白雲滿碗花徘徊す。一たび。これをすゝる人は。專風雅の志をすゝむ。廬同が七椀といふは長過たり。

飯 鮓ノ銘

吾 仲

○飯鮓イナズメは。いづれの時よりもてはやしけむ。此六條の銘物にはいへりけり。今はおほやけの奉りものにかぞふれば。下さまの人は。日を限りかぎても待べし。まして卯の花の咲ころは。此ものよけしきも清からんに。藤の花の咲時に。それが節せうをあはせたらん。いかなる人の深き心か侍りけむ。是にて二季草ニキキの名も。世の人はいふべし。器物うつはは。杉の香もてつけたる折に入いて。此花をかさしにも。又は文など付てもやるべし。かくことよくしきやうなれど。すべて上さまのもてあそびもの也。長良ながらの鮓は。むかしをししのぶより。梅津かつらの名にしられて。大津松本の旅人も。笠をかたぶけずといふ事なし。かの茄子たけの子の鮓といへば。何のこけらにも似かよひて。あま法師のこがれものならんに。是は形のもてはなれたれば。人の得しらぬも尤なるべし。是に黄な粉といふものを。など添ては給はらぬぞと。ある人のいひたるを。飯ずし見るたびの。笑ひ草にはいふなるべし。其銘にいはいく。

以テ飯ヲ名メ鮓ト鮓ニ而シテ非ズ飯ニ一ツ點シ鱧ノ皮ヲ十ツ重ニ鳥ノ子ヲ色ハ於レ雪ニ白ク香ハ非ズ梅ノ酸シ藤花漸ク暗ク橘ノ香ハ已ニ近シ貴介ハ尤モ褒ム下ノ藤ハ未ダ知ラ昔シ下ノ和玉似テ之ニ是レ照ル

座右銘

芭蕉

○人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

銘に云

いものいへばくちびるさむしあきのかぜ

是非齋銘

許六

○是を是とするは。詔へるにちかし。

非を非とするは。謗るに近し。

羽官平日。儒釋道の書をよむ。道は儒の敵となり。儒は佛のむかふ座主にとれり。若酢吸の三翁。世に再生して。吾はいかいの道を鹽梅せば。きはめて是非齋の遊を眼ひて。箸箱の連衆に入らむと。あの方より望まむ。

誄類

嵐蘭ノ誄

芭蕉

○金革を袴かぶにして。あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて。君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は。義を骨にして。實を腸にし。老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事。十とせあまり九とせにや。此三とせばかり。官を辭して。岩洞に先賢の跡をしたふといへども。老母を荷になひ。稚子ちしをほだしとして。いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず。日々風雲に座して。今年仲の秋中の三日。由井金澤の波の枕に月をそふとて。鎌倉に杖を曳ひき。其かへるさより。心地なやましようして。終に息絶ぬ。おなじき廿七日の夜の事にや。七十年の母に先だち。七歳の稚子におもひを残す。いまだおしむべき齡ひの。五十年にだにたらず。公きみの爲には。腹をしきりても悔くまじきうつはものゝ。はかなき秋風に吹しほれたる草の袂。いかに露けくも。口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに。老母の恨。はらからのなげき。したしきかぎりは聞傳へて。偏ひとへに親族の別にひとし。過つる睦月ばかりに。稚子が手をとりて。予が草庵に來たり。かれに號得さすべきよしを乞こふ。王戎じうちゆう五歳の眼ざしうるはしと。戎の一字を摘とで。嵐戎と名づく。其よろこべる色。今目のあたりをさらさず。いける時むつまじからぬをだに。なくてぞ人はとしのぼるゝ習。

まして父のごとく。子のごとく。手の如く。足の如く。年比いひなれむつびたる佛の。愁の袂にむすぼゝれて。枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべむとすれば才つたなく。いはむとすれば胸ふたがりて。たゞおしまづきにかゝりて。夕の雲にむかふのみ。

〆秋風に折てかなしき桑の杖

丈艸カ詠

去 來

○今歳ことしきざらば二月末の四日。月は草庵に残る物から。禪師身まかり給ひけりと。湖南の正秀が許よりしらすれけるにぞ。胸ふさがり涙とよめかねぬ。つくづく此人の昔しを思ふに。尾張の國に生れ。犬山に仕へて。勇猛の名もありしとかや。一日若黨一人を供し。ひそかに君父の前をしのび出。道の傍に髪おしきり。黒染には引かへられける。常の物語には。指ゆびの痛ありて。刀の柄つか握るべくもあらねば。かく法師にはなり侍ると也。ある人のいへるは。其弟に家祿譲り侍らんと。かねて人しれず志ありて。病にはいひよせられけるとなむ。其後洛の史邦にゆかり。五雨亭に假寐かりねし。先師に見え初まられしより。二疊の蚊屋の内に。頭をおし並べ。四間の火燵の上に。面をさしむけて。吟會おほくは此人をかゝず。先師の言ことばに。此僧此道にすゝみ學ばゞ。人の上にたゞむ事。月を越べからずとのたまへり。其下地のうるはしき事うらやむべし。然れども。性くるしみ學ぶ事を好まず。感ありて吟じ。人ありて談じ。常は此事打わすれたるが如し。先師深川に歸り給ふ比。此邊の句ども。書あつめまゐらせけるうち。大

原や蝶の出て舞ふおぼろ月。などいへる句二つ三つ書入侍りしに。風雅のやゝ上達せる事を評じ。此僧なつかしといへとは。我方への傳へなり。又難波の病床。側かたはらに侍るもの共に。伽がの發句をすゝめ。けふより我が死後の句なるべし。一字の相談を加ふべからずとの給ひければ。或は吹飯ふきいより鶴を招むと。折からの景物にかけてことぶきを述。あるはしかられて次の間に出ると。たよりなき思ひにしほれ。又は病人の餘りすゝるやと。むつまじきかぎりを盡しける。其ふしゝも等閑なはずりに見やり。たゞうづくまる寒さかなといへる一句のみぞ。丈草出來たりとは。感じ給ひける。實にかゝる折には。かゝる誠こそうごかめ。興を探り。作を求るいとまあらじとは。其時にこそ思ひ知侍りけれ。先師遷化の後は。臆所松本の誰かれ。たふとみなつきて。義仲寺の上の山に。草庵をむすびければ。時々門かど自啓。曲々水相逢などと打吟じ。あるは杖を横たへ。落柿舎を叩たたて飛込だまゝか都の子規とも驚かされ。予も彼山に這のぼりて。脚下琵琶湖、水。指頭花洛山と。眺望を共ともにし侍りしを。人は山を下らざるの誓ひあり。予は世にたゞよふの役ありて。久しく逢坂の關越る道もしらず。去と年の神無月。一夜の閑をぬすみ草庵にやどりて。さむき夜やおもひつくれれば山の上と申て。こよひの芳話に。よろづを忘れけりと。其喜びも斜たぬならず更行まゝに雷鳴地にひよき。吹風扉をはなちければ。虛室欲ほころし卷まけ閑ひらき是寶。満山、雷雨震ふる寒更ふゆと興し出られ。笑ひ明してわかれぬ。身の上を啼なからず哉ときこえし。雪氣の空もふたゞび行めぐり。今むなしき名のみ残りける。凡十年のわらひは。三年のうらみに化し。其恨は百年のかなしみを生なず。をしめても猶名残をし

く。此一句を手向て。來しかた行末を語り侍るのみ。

へなき名きく春や三とせの生別れ

去來カ詠

許 六

○雜こしをもろなれば 寶永元甲申のとし秋九月。落柿舎の去來卒す。嗚呼あゝかな悲しいかな。此郎は。向井氏支那老人の末の子に生れて筑紫の方におひたち。名は平次郎。武を業とし。若かりし時より洛に居す。弓矢を捨て十五年と吟じたるは。十五年先の事也。合せて三十年來の大隱士。和名これを浪人とはいふ也けり。いつの比よりか。先師蕉翁にまみえて。風雅の名に高ぶり。京師にかまへて。諸子のかしらに坐す。南西の氣を押へ。東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱じて。あら野の時。正風體のまなこをひらきて。

へ湖の水まさりけり五月雨、とかや。猿蓑の選を蒙りて不易流行の巷ちまたをわかち。後隙の新風しんぷうにのぞみても。終に幽玄の細みをわすれず。

へ木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほととぎす啼や雲雀の十文字とは申けり。又いづれの仲秋にや。

へ岩はなやこゝにもひとり月の客と吟じて。先師の耳を驚かし。月賞瓶の第一。古今の秀逸には極まりたり。すべて一代秀逸は。一兩句もてる人さへ稀なるべし。此おのこは。已に數句に及べり。二十餘年薪水の功積り。嵯峨の落柿舎に師を迎へ。石山の幻住庵に

老を訪ふ。心ざし深くて。一とせ難波の變を聞て。速にともづなを解よ。義仲寺の葬りにも。肩衣に鉤鍬を携ふ。死後の城を堅ツ守り。諸生をなつけ。初心をたすく。越の浪化にかはりて。有磯ありま砥浪とみなみの書を選じ。崎さきの卯七をたすけて。渡り鳥を集む。此秋我大願に力をよせて。文選序者の一人にすまみ。病床に伏ても。三度自他の書を寄たるに。いかなる蕉門滅亡の月日にやありけむ。去年の冬は。中越の院家壽じ給ひぬ。ことし衣更着。丈艸卒す。秋九月此郎去て。手もぎ足もぎの思ひをさせて。人の腸を斷たせけるぞや。猶い生き残りたる十大弟子の中にも。世のたすけとなりがたきもあるべし。其人かの人と。かへまほしと思ふ方も有べし。従來の因縁ふかきえにしありて。しかも同じ痢疾のやまひをうけて。共に終りをとれり。身は貧閑清寂の高みに遊びながら。老兄法印の孝養を忘れずして。常は心ならぬ余所のいとなみもいそがしく。ある時は攝家親王の御館みだちに候じ。遠近の來客に對し。四時の運氣を祭し。二六の陰晴を考ふかんが。されど花鳥の細みを忘れず。月雪のあはれに。情をなやます。病ありて。起臥のさびしさをしらずとかや。猶思ふ人のなきにしもあらで。此事かの事仕果してむ。今宵は森の下露わけそぼちて小萩がもとに袂しぼらんと。玉だれのひまもとむるに。あらぬさはりのみ出來がちにて。初夜過る雪駄の音も程なく静まり。夜がれのみぞおほかる。又の日もつとめて。とくより例のいそぎに。心のどまるきはもなくて。そとる事に暮しつま。夕陽西にかたぶけり。こよひこそと。物くひ湯あみし。みじか羽織に長刀。足ばやにすべり出て。東がしらにむかふたるは。天晴私あつはれしの黨かたの籠頭かごづむ熊谷笠くまがやがさの見いれもよしや。よしやあしやの取沙

汰はせそ。うき名は賀茂の早瀬にながせと。川風塞み千鳥さへ啼て。下庵したはなちかき聲こゑつくりひ。仕はてざるにさつと明て。打入たるけはひ。しばしいふべき事さへなくて。灯火とうかほそき方に向ひ。盆引ひらよせ少すくくゆらせてより。心地づきたり。此ほど四五日のとだへに。珍めづしと見るなでしこの。もとゆひものびやかに。露つゆけき心地せられて。あはれなる事くさに。節せま小袖せうそでの染もやうも。いまだ其夜はきはまり兼て。膝ひざのはづれに打ふしたれば小夜もやうく更て。衣手いすてさむくそひ臥たり。明ばとくかへらむなど。契ちぎりかたらふひまもなく。南禪寺の豆腐屋も馳はをおかし。白川黒谷の鐘も。手枕てまくらのすき間をつたふに。うち驚おどかされて。帶引おびひきしめ。刀やいばぼつ込こ。氷交りの朝川越て。小芋中ぬきの比。京にはいきつきたり。今はの時の人しらぬ。心の中さへ思ひやりぬ。現まの境まがひも千々の思ひを碎くだき。娘むすめの生なまさき。其子の母の行末。いかに覺おぼえなく見果みたまつらんア、悲かな哉いか。松本山の僧が身まかりぬる時は。此秋我に誅とがせらるべしとは。よも思ひよるまし。今我辭いまわがことばを作つくて彼かを痛いたむ。此次必我番こゝろにあたらむも。又哀あはなるべし。ア、悲かな哉いかや。

風俗文選卷之七

歌類

落柿先生、挽歌

支考

此歌四章、而後。加三變聲之歌三章、漢無此法。蓋和文一體歟。

○ことしはいかなる年なれば。かくあぢきなき人をのみ見るらん。去年の神無月は。浪化の君にわかれて。霜の光に名をしたひ。粟津の丈艸は。此きさらぎの願ひにみちて。花の陰に歸り給ひぬ。卯月のはじめは。落柿舎に日をくらし。其事彼事語り合て。是よりたれが。身の上をや。鳥も啼らむと。はかなみいひしが。去來はいはるゝ人の數に入て。かくいふ我計り残り居たらん。沖の船の友を失ひて。老の渡のよるかたなき心地ぞせらる。なき人の此ごろおほき世やさらにと。むかしの人のなげかれしも。かくあぢきなきをりなるべし。人は廿ばかり。三十も過るまでは。をのれが友達も。同じ心のすこやかにおひたちて。たま／＼なき人の上を見ても。あはれとは思ひけめ。おどろくほどの悲しさにはあらず。よそぢも過行ほどよりは。幾とせの交をかさねて。その人ならねば此事はしらず。あはでは戀しう。見ざら

んはいかにと。文にもいひかはすほどに。けふは其人もなくなりて。世は扱はかなきもの哉と。ことし初めてしらる也。誠に此人よ。風雅は武門より出れば。かたき所にやはらみありて。先師もそれをゆるし給へりしが。我はやはらぎたる所にかたみあらんと。逢時はたはふれていひもしつ。まして蕉門の高弟にして吾輩の先生なるをや何にか此人をおしまざらん。我のみかくおしむにやあやし。其歌曰、

家は聖護院の森にかくれて。

寒き梟かぐろよの聲に驚き。

名は落柿舎の梢に残りて。

空しき秋の色を恨む。

世ははたいかならん。

我はたかくならん。

窓のあらしに燈をまもり。

軒のしづくに影をしたふ。

おしむべし。ア、かなしむべし。ア、

柿の木もあれ行猿のなみだには。夜こそねられね。人も歎なげらむ。嵐の山の山あらし。世にあらしとは山ぞしる。嵯峨野に人のさがなごころや。

鄙 歌

ㄨ鶯に。あふみぶり
北方きとろはさふいみなべらの。南邊うらしか。已等ことの。軒所にけよやれ
よみ人しらず
 自得

ㄨ思ふと。ふたつのけたる其あと。花のみやこも。ゐなかなりけり
おなじく

ㄨあみあ雑ざ喉こを。升ますにはかりて賣人は。かふ人よりも。あはれなりけり
去

ㄨなとてかく。いそがしいとて二階から。おちての後はひまになりけり
許

ㄨ白かゆは。きらいなれどもやめはたど。いゝをばくはで。駈かる也けり
六

文類

俳諧發願文

浪化

○人死して六道に生れ。からき目見むは。ひとへに娑婆しよばの業因によれりけるとかや。世に立
 花はなすく人は。たてゝは崩し。くづして又たて。終日大汗ながし。霞たむのさきに。枇杷の葉つけ
 て。馬の耳のおもひをなし。屈曲くまを好みて。鐵釘てつていに打つけ。針がねにしぼりかゞめて。見る
 めもくるしかるべし。わづか五寸の瓶びんに。千山萬水のおもひをこめむも。猶なほく氣つまりな
 らんかし。若立花わかしせむとならば。曾根の松を心に立てながしに清見寺の梅ならば。少は心の
 びやかなる風情も有べし。されど一時の榮花も盡て。まづ椿ころりと落て。無常をしめし。
 木槿きぎん一日の榮をさとりて。程なくしほる。例の心短きにや。やがてぬき捨。果は烟と立のぼ
 る。それさへあるを。碁いうつ人は。赤目引つり。喰物時をわすれ。終夜同じ事ならべたらん
 は。飽あずやあらん。よき手あしき手とて。一座打こぞり。案あんじふくれ。碁石の限り蒔ま盡す時。
 何のをし氣きもなく打崩したるは。さりとて殘多き事なるべし。さしも手間入て案あんじたらんは。
 せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は。必ずさいの河原に生れて。父母戀しが
 る子供に立たまじはり。地藏おほさつの御衣の下にかくれ。あけくれ同じ事すらんも。又あは
 れなるべし。若し一枝さして諸佛に奉り。一目投てはあみだふ唱へたらん人は。うたがひな

く西方に生れて。百味の外の飯食には。なら茶。蕎麥切はくひ次第たるべし。今吾はいかいの結縁は。狂言綺語のふるみにおとし。百韻千句の數を合せて。一座の廻向は。あみだぶあみだぶと申て仕舞侍りける。

聖靈、祭文

李 由

○それ娑婆しあはのありさまは寸地に五穀を植ぬ所なく。寡婦いへなが紡績つぎの隙なる日なし。されど貧報に追ぬかれて。餓口更に閉る事かたし。いかなれば極樂淨土うてなの臺うたかを去り。百味の飯食せんじきをさし置。盂蘭盆うらんぼんになれば。取物とりあへず。瓜うりの馬の迎むかひを待かね。麻骨あせの杖引つぎつり。戸板といたあら菟の座敷つき。葛荒ひげあ和布わふの賞瓶しょうへい殊ことに。きり麥冷素麵むぎひやの腹中はらあひこそ。覺東かくとうなけれ。淨土じゆん土のあまみに飽あきて。娑婆しあはのかるみをよろこばれたる。聖靈せいりやうもあるかし。地獄ぢやくの釜かまの御戸みかどをひらけたらんば。たまさかの仕合しあひなるべし。食たべ好このみの振舞おどまては。ちと奢おごの沙汰さたにもなるべし。たゞ修羅しゆら畜生ちくじやうのあふれ者。中有ちゆうゆうの浪人なみのりかはきとこそ。おもひやられ侍おどれ。常に願ねがひ置れたる作善さくぜん功德とく。讀經念佛どくきやうの行ぎやうは。そも何なにになりたるぞや。佛果ぶつぐわを得られたる歴ことも。餓鬼がきあしらひにおもはれ。中にも新聖靈しんせいりやうは。葛籠つら持もちの夫おとこにさゝれて。外側そとがはに直ただるこそあはれなるべけれ。生前せぜんの列座れつざのころは。あまた數かずよみて。膳ぜんだてもせられたるに。灰はいの足跡あしあとに人數にんずをしられ。終はつに送火そうかの明あかりに。はやし出でされて。草葉くさばの陰かげに歸かへりても。料理りやう馳走ちそうの評判ひはんせんは。もとの人界にんがいより。願ねがひ損との後生ごうじやうなるべし。伏惟ふくしやう。中元ちゆうげんの佳節かせつ。浮屠ふとの教きやうにおほはれ。目連もくれんの母ははを始はじとし。

西の海へ父を沈めしあはれまで。放逸の衆生。たま／＼五倫親屬の名を呼出し。我も一たび此馳走の數には入べし。一念の慈悲に。寺の小僧が腹ふくらかし。一包をよろこばしむるこそ有難けれ。あがり膳は齒のあともなし。果は魚鳥のたすけとなりぬ。報恩經に。一とせの中六度。聖靈の來去の日ありて。上古は年の暮にも。此祭ありしを。いつの比の簡畧よりか。世間一統にいひ合せて。其沙汰もなくなりたるは。たゞつまる所は。坊主の迷惑とはなりにけり。聖靈達／＼。今年は殊に穗づるもよし。地獄極樂の亡者達。才太郎畑のいき過まで。さそひ合せて御出あるべし。六日飛脚の頓死をきゝたて。一紙の祭文は御免を蒙らんと。仍謹如斯。

へ聖靈よ蓮にあまらば芋ばたけ

剃髮ノ文

支考

○浪花の舍羅。剃髮の前も舍羅といひ。ていはつの後も舍羅といふ。此舍羅を捨て。との舍羅をか求めむ。舍羅／＼として。更に舍羅なし。

へ一たびは瓢の花のあたまかな

祭猫ノ文

支考

此文、以三四六之法、用漢字ノ韻、也是全似俳諧、之漢和、而不然始、以三

萬葉手爾波、文字ヲ用レ之ヲ爲シ、詠ト惟爲ニ和文ニ用レ詠ヲ之始祖ニ太キ奇也

○李四が草庵に。ひとつの猫兒ありて。これをいつくしみ思ふ事。人の子をそだつるに殊ならず。ことし長月廿日ばかり。隣家の井にまとい入て身まかりぬ。其臺を庵のほとりに作りて。釋、自圓とぞ改名しける。彼をまつる事。人をまつるに殊ならぬは。此たび爪牙の罪をまぬがれて。變成男子の人果にいたらむとなり。其文曰。

秋の花の霜にほこるも。 島部山の四時に噪ぎ。

秋の花の霜にほこるも。 馬東が原の一夜に衰ふ。

きのふは錦茵に千金の娘たりしも。

けふは墨染の一重の尼となれり。

されば 柏木、衛門の夢。

虚堂和尙の詩。

戀にはまよふ。欄干に水なかれて。梅花の臙なる夜。

貧にはぬすむ。障子に雨そゝひて。燈火の幽なる時。

鼠は可捕とつくりて。褒美は杜工部。

蛙は無用といましめて。單見は白藏司。

昔は女三の宮の中。牡丹簾にかゝやきて。花まさはやく。

今は李四が庵の邊。天藜垣にあれて。實すでおそし。

前生は誰が膝枕にちきりてか。さらに傾城の身仕舞。

後^は世^ははかならず音楽にあそばむ。ともに菩薩の物敷奇。

玉の林の鳥も啼らむ。

蓮の臺の花も降らし。

涅槃の鐘の聲^{まへ}芽^へて。圍爐裏の眠たちまぢにおとろき。

菩提の月の影暗^くて。卒都婆の心なにかうたがはむ。

如是畜生

南無阿彌

弔ニ古戰場一文

芭蕉

○三代の榮耀。一睡の中にして。大門の跡は。一里こなたにあり。秀衡が跡は。田野になりて。金鷄山のみ形を残す。先高館にのほれば。北上川は南部よりながるゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて。高館の下にて大河に落入^り。康衡等が舊跡は。衣か關を隔て。南部口をさしかため。えびすをふせぐと見えたり。扱も義臣すぐつて此城にこもり。功名一時の叢となる。國破れては山河あり。城春にしては草青みたりと。笠打鋪^{しよ}て時うつるまで涙を落し侍りぬ。

へ夏草や兵どもがゆめのあと

校訂者云此
文流布本ニ
ナシ今本朝
文選ニヨリ
テ之ヲ補フ

返店ノ文

路 通

○旅店喰物をかしかむとて。鍋ひとつを求めたり。おほきさ一升あまり。其料にすへ置たるへつゝ。また一めぐりもちいさかるべし。火のあたる所わづかなれば。鍋の底みなひゞきれたり。手にふるゝ毎に。いとうあやうければ。煤おとす業もなむなかりけり。

△旅店一物二用の物あり。夏はすみ／＼を釣て。蚊虻の齧をとをさけ。冬はよきところにてたゝみて打かふりぬれば。霜雪の愁。藥のふすまにかへたり。

△旅店はわづかの板庇なり。是は貧しき人々のすむ。長屋の端をしきりて。一間なる所にしつらひたれば。假のやどりに事かひて。中／＼おかしき住居なりけり。月の末には。家のあゝるしなりける人に少づゝのあたひをやる。もらひ求めて贈る時は。心を易し。贈ざるをりは。追出されむ事を思ふ。其是非にある事三十日。日々世にむかひ。人に随ふ毎に。にくまれむ事を悲しみ。譽られむ事をよろこぶ。油皿をこぼさるゝがごとく。氷の橋をつたふばかりになむ侍りける。

△おの／＼三ツの物。求ざりしむかし。髪すり足をかろくして。容も潤ひ。心もさかむなりしかば。十とせ餘り。こゝろさしの至るに任せて。乞巧のまねをしあるきけり。しかありしも。其境にいらざればにや。あるは風雅に魂うごき。あるは人情にすがた轉せられて。いまだ止ぬる道をしらず。折から深川の翁。行脚のつてに。かり初の縁を結び。その様もゆかしかりけり。

れば。過し比の春江戸の府まで尋ね來れり。六十餘弱あまねく人擧り氣のあつまる所なれば。ゆゝしき事の數／＼にして悲しき品をかくせり。まづはとて。翁を訪ひまいらせければ。古郷の方に斗敷し給ふと。あたりの人々こたえ侍りぬ。むなしき跡は草ふかき庵を閉て。はせを一もとを殘せり。藪梅のほひ籬にちり。小鳥の聲軒にあそぶ。頼み來し心より悲しみを求めて。しばしのあはれさいはむ方なし。情あるものありて。なつかしかりつゝ。我を伴ひ。おもひかけぬ此すまゐのあるじとなせりける。それかれはちなみやすく。友とする人ひとりふたりまうけ侍れば。あなたこなたに思ひそみて。一とせあまり。ふたとせの春までとどまりけり。翁も頃日歸庵なりしかば。かぎりある命に。求めがたき願ひみちて。佗るにつのり。詠するに高し。晝は杖を攀。杳を覓て。志を雲雨の外にあそばしめ。夜はともしびをとり机にそひて。おほくは千古の餘を論ず。かならず世をいろひ。人を謗るとはなけれど。目なれ聞馴し。上さま下さまの品など。物ずきにいひのゝしるは。暫時の情をむすぶなるべし。かくてなむ。此春も春めきぬれば。霞の朦々たるは。目をくつろげ。梅のかうばしきは。鼻をうごかし。雲雀のちり／＼と囀るは。我に流浪の思ひをすゝむ。嗚呼。いづれの時。いづれの里。いづれの狂人か。同じく此むねをあはれまむ。つながれたる庵はぬしにかへし。彼鍋は人にうちくれて。身は笠ひとつのかげを頼みて。行衛なき方をぞたのしみけり。

肌はだのよき石にねむらん花のやま

斷絃ノ文

許 六

○鳥の嚶々たひと啼な。木の丁々たうとひびく。専もつと友をもとむるかなしみの聲也。人はいふにたらず。子を捨妻すてをすて。山林の友にまじはり。琴を斷た。金を擲なげて。まことのこゝろざしを盡し。語りかたらふこそ。うき世のおもひ出とはいふべけれ。假初の旅ねに。一夜二夜の別をさへ。かなしと思ふならひなるに。あるは雲井の國に貶へせられ。遠きあら磯に配せらるゝわかれ。いたりてかなしかるべし。されど濁江に影見ざる歎きのみにて。同じ世にすむなくさめもある也けり。たゞ長門、國に舟を出し。廣島の方に趣く人の別は。みるめなき海士の呼聲のいなせもきかず。磯駒松の獨さびしきに音信るゝ便もなし。こしかた行末おもひつゝけぬる悲しさは。遺方あまなからん。我に方外の友あり。江東平田、邑。光明遍照寺十四世の僧。亮隅上ひやうぐも人。字、李由。一の字は買年。四梅廬と號す。嘗て律師に任ず。姓は豫州河野かたの嫡流にして。安藝の宍戸ししどを兼合せたり。母なむ。やむ事なき深窓の女めにして。藤原なりけり。僧三代。我三代。あるは茶に交りてさびを好み。又は碁に暮して勝負をよろこばず。我、僧は風雅に交る事二十餘年。僧は寺を忘れ。我は家に歸る事をしらず。ひとつ蚊帳にむれ入。同じ衾に足をつゝむ。若孔孟の理屈人を親にもたば。生なまたる甲斐はあるまじといへば。老佛のいき過たるを。子にしたらん時。身代破滅は立處たてなるべしとて。是より天地をそしり初て。牡丹芍薬はひくき花也。櫻海棠は能過よたり。かれは愚痴。それは鈍なりとて。果は食好の上に落て。

餅蕎麥切は急用にたゞず。終にはやみの豆腐に流れて。夜中の勝手をおびやかし。面目もな
く其夜も明たり。月見。雪見。星祭。玉まつり。四梅廬の明ほのには。鳥の初音を待侘び。
七種の踏草には。露の臺を捜す。笋の藪を覗き。瓜なすびの島をあらす。風臺に吹れ。水
臺に冷し。爐開きの次手には。歳旦の句を鍛ふ。煤掃の逃所。鯉汁の定舞臺。従者が無返事
に空耳をつぶし。小僧が白眼もわきむいて通る。遅々たる春の日みじかければ。長々たる秋
の夜長からず。伊勢住吉の物もうての比も共に奉幣をさゞげ。吉野龍田の旅ねの夜も。同じ
花紅葉に臥たり。三日對せざる時は。百日のおもひをなし。五日音信されは。三年の月日を
隔つるがごとし。然るにことし寶永第二。乙酉の六月廿二日の夜。例の積氣胸膈にさしつめ
たれかれよべとばかりにて。終に息絶ぬ。親族朋友のしたしきかぎり。末寺諸檀の僧俗男女
足を空にまどひ。國中さはぎかなしみ。四日五日はとりつゝみ物しけれど。壁生草の。いつ
までかはとて。終に夏野々原に送り捨て、平田山に立のぼる一すじの烟に。遠近の里人もい
まはと思ひやるべし。後の事共は。有難きかぎりとり盡し。法中の高僧。日夜に席をかさね。
和泉なるはらからの御坊も。朝夕のまことをつとむ。中陰の日數も程なくすぐれば。つどひ
あつまれる人々も。おのがかたざまにわかれさりぬ。反魂の香も。招魂の袂も。共に手ぶ
るき處を好まざれば。ふたゞび佛を見る人もなし。無碍堂の垂布の色も。鴈來紅に時を奪は
れ。五老井のまつ宵も。一人の席を欠たり。つらく四とせ五とせ。僧は肝腎に積をうれへ。
我は肺肝に疝をやむ。平生病がちに打なやみて。朝夕の露に世をはかなみ。夕の鐘に命をか

ぞふ。僧と我といへる事あり。我死は。僧口を閉む。僧身まからば我絃をたよむ。思ふに蕉門のはいかいも。日々に衰へ。正風の血脉も。次第に絶て。きく人もなければ。する人も猶なし。孔子の道は。春秋にとまり。五老子がはいかいは。此文選に盡て。これより後。はいかい聞の博士とはなる也。僧すでに身まかりぬれば。我果して絃を斷ぬ。

風俗文選卷之八

傳 類

東 順ノ傳

芭 蕉

○老人東順は、榎氏（きののうぢ）にして。其祖父江州堅田の農士。竹氏と稱す。榎氏といふものは、晋子
が母方によるものならし、ことし七十歳ふたとせの秋の月を。やめる枕の上に詠めて。花鳥
の情。露を悲しめる思ひ。かぎりの床のほとりまで。神みだれず。終に更科の句をかたみ
として。大乘妙典（だいじょうみょうてん）の臺（たい）に隠る。若かりし時。醫を學むで。恒（つね）の産とし。本多何某（もとたになんご）の公より。
俸錢（ほうせん）を得て。釜魚（かまうしほ）餽塵（くじん）の愁（うれ）すくなし。されども世路をいとひて。名聞（なもん）の衣をやぶり。杖（じょう）を拆（ひ）
て業を捨。既に六十年のはじめ也。市店（いちてん）を山居（さんこ）にかへて。樂（たの）む處筆（ところふで）をはなさず。机（つくえ）をさらぬ
事十とせあまり。其筆のすさみ。車（くるま）にこぼるゝがごとし。湖上（うみかみ）に生れて。東野（とうの）に終りをとる。
是かならず大隱朝市（だいゑんあしち）の人なるべし。

へ入月のあととは机の四隅（よこぐし）かな

牧童カ傳

支 考

○牧童は。もと小松の素生にして。賀の金城に居る事年ひさし。家は劔刀の業をもて。よのつねのたつきとはなせりけり。牧童は彼が兄にして。北枝は是が弟也。本より謝公が才能をあらそはざれば。かつて阮家の富貴をもうらやまず。たゞ同胞のあはれみ。をのづから世の人の鏡ともいふ也けり。むかしは梅翁の風流をしたひ。中比は芭蕉の門に入て。時の風雅にあそべる心の。ふたりともにあそぶ所おなじからず。たとへば一巢におひたちぬる鳥の。彼は梅の花の清きに囀り。是は卵の花の曇れるにあそぶ。あそぶ處の同じからずといふは。たのしむ心の殊なればならじ。砥取の山の時鳥も。けふはとぎそと啼わたれば。夜を梟のあそび數奇となりて。吟席交會此人をしらずといふ人なし。時に居眠りをもて。生涯の得物とせり。ある時は欄干の花にそむき。ある時は檐外の鳥を聞ながら。眠り來りねふり去て。四十年の春秋も過行ぬれば。貴介もこれをわすれ。高明も是をゆるし給へば。終に兜卒の内院にも。高くねふらんとぞたかぶりける。湖南翁。かつてある法師に向ひて。牧童はよき者なりと申されしよし。よくてあしからんや。あしくてよからんや。其翁ならずはしらしかし。しからば生天は先なるべくとも。成佛は後ならんといへる。むかしの人の心も。人はふたりの人に似てや侍らん。牧童常にいへりけり。我むかし。芭蕉の翁にまみえて。武の素子堂が。浮葉卷葉此蓮風情過たらんといふ句の。物語に及ぶ。此句は此蓮と聲にとなへたるがよしと。

おしへ給へりし外は。別に何事もおぼえ侍らずと。時の人は人を評じて。げに人は人のならひありて。さらぬみなもともたどりたるやうに。およづけいふらん。かくたどありの人は。世にたふとしと。されば世の中の老の坂越たらん。其人は飢寒の間におきて。風雅もやゝあやうからずといふべし。

東花坊賛して曰。むかし人け。恒の産なければ。つねの心なしとて。つれづれの法師だに。安部野のあたりに。花むしろ織て。都のつてには賣もせられしか。まして世にある此人ならば。劔刀のわざのみにとよげなり。かくするどなる物の中にも。かの居眠りのさむまじくは。物と我とわすれたりとやいふべき。物其我をや忘れけむ。我其物をやわすれ劔。ねぶるに時もなく。さむるに又時もなし。何がし和尚の。虎によりて居ねふりたらん。世におこがましく見られがまし。ある上人は。目のさめたらん時。俳諧せよとも仰せられしか。扱はいかいは人の心にすまじきや。たゞ我心にすなりけり。然れ共。人のおもしろがらずは。我もおもしろがらず。此さかひをしりてこそ。俳諧はすなりけれ。さりや。はいかいは人の心をやはらげて。花に啼鳥の。花ならずしてかうばしといへる。世のまじはりの媒とならば。彼鶴鴒のはらからも。などや一巢のよしみなからん。俳諧はたゞ戯也。はいかいはあそぶべし。世にたはふれ。世にあそぶ時は。草荊笛の世にわすれて。牧童の名もおしむまじけれ。所謂素子堂が一蓮のちぎりあらば。其時の翁の心にあそびて。今も一字の師の影をも。ふまざれとなり。

公平カ傳

汝 村

○坂田公平まきはらは。何いづれの處の人といふ事をしらず。源、頼義朝臣つとむらに仕へて。公時むねときが男。山姥やまばあが孫とはいひ傳ふ。年のほどは三十あまりにして。終に衰老の容かたちなし。其生質なまぢ正直正路にして。人の異見を聞ず。一生彼が妻といふものゝ沙汰なし。其高名をいはず。夷やまが千島の末しよくまで。しらざる人もなく。慥に見たる者もなし。たゞ好む物には茶筌ちやせん髪かみに鉄棒てつぼうにて。其勇力ゆうりきのつよき事は。恰あたかも木綿織物もくわたぬいの名目にさへなりにける。かゝる兵へいも。すこし艶えんだちたる所のあるや。公平女こうへいめとはいへ共。いまだ男子の號には蒙かぶせず。治世榮花の程を見むと思はず。和泉大夫が芝居に走りて。寺上りのわらんべ。又はつよみを好む中小姓の。感に堪たたる顔つきを見るべし。つらく無常迅速むじやうじゆんそくの哀をしるや。いづくの隠元いんげん禪師にはだまされけむ。ごそとすりて。公平道心こうへいだうしんとはこゝをいふ。剛たけき物先ほろふためし。死ぬべき場所をこしらへ。終に黄泉に旅立せて。地獄破ぢごくやぶの沙汰まではありて。其後は便べんをせず。彼公平が手柄のほど。上下萬民おしなべて。かんぜんぬものこそなかりけれ。

五郎四郎傳

支 考

○筑紫に五郎四郎といふものあり。其性は小麦の餅也。明暮あけくれこれに馴たる人は。たゞ五郎四ともいふ也。此もの野島のしまの間に生じて。肌はだをろそかに色くろし。しかれども菓子屋の手にわ

たりて。百鍊千鍛すれば。あるひは饅頭の肌やはらかに。かすてらの味ありて。ほとんど僧を落さむとす。むかし志賀寺法師の容こそ瘦たれ。心は花の都人を戀そめて。玉の緒の歌はよみ給へり。まして其名も。三輪の山本に住て。葛城の神の。晝のかたちにもはづる事なし。されば心くだり。姿いやしきだに。色はずつまじき世なりけり。五郎四何にか佗しからんよ。あるつらの人は。衣食の價をむさぼらず。酒肆娼坊の眼高しと。人の人にもてはやされて。こゝろの外に見ぐるしりやつれ。座上にありて頭をひねる。さばかり捨てたる世ならば。石上樹下のすまゐこそあるべけれ。しのぶ山の關路も。こゆる人のあればこそあれ。戀せし酒のまじとは。誰にかかためたるぞや。先師、曰。色をおもふ事。温鈍のごとくせよと汝をよろこぶもの。日夜に愛せず。汝をにくむもの。絶て嫌事なし。しからば物のほどをいへるなるべし。汝が本性はいやしからねど。多くは賤の女の杓子にかゝりて、ありがたき生涯をあやまる。されど世をてらひ人にこびて。身をかざらむとする人には。をのづからまさりもすべし。此さかゝるは。汝、五郎四がしる處にもあるまじ。何晏かおしろいせぬ顔も。一世の願ひにはあらず。兵部卿の宮の。かりのほひもまた化なりとするべし。世はたゞ世にしたがひて。眼前のたのしみをたのしむべき事なり。

メ夕がほに鏡見せばや五郎四郎

靈蟲傳

去來

異本本朝文
選此文ノ終
リニ、
米の音や日
に／＼よは
る秋のくれ

○浮世に米といふ虫あり。母は出雲の國。稻田姫いなでのながれとかや。父はゆく方もしらぬ稻のとのゝ。夜なくかよひ來りて。かくはいなほの孕み初けるとなむ。ふるさとに侍りし中は。川水にやしなはれ。案山あかやま子法師にもりそだてられ。やゝ生ひたちぬるまゝ。賤しんのふせ屋やに糶あぶとよばれ。晝はあら庭わらわの上にならび。夜はせはしき俵わたの中に臥ふ。されど久しく民間にとゞまらず。地頭代官のもとに上あられ。或は鞍くらつぽに這はのほりて。須磨すま逢坂おうさかの關をこえ。あるひは船板ふねいに飛とりつりて。敦賀つるが下田しもたの沖をはしる。終に商家の藏くらの中にかくれて。おそろしき空音を啼なき出しぬるは。あやしき里に春の鳥の花にたはふれ。秋の虫の露をかなしめるおもひにもあらず。時しらぬ虫の音ながら。春は一しほ音もまさりけり。又は旱いであうちつゞき。雨風さがしき年の暮には。かならず高ねを出して。婆婦おばの胸むねをおどらせ。窮士きゆうしの腸はらわたを斷たせるのみか。乞食こじきなどのこれになきころされむも。いとあはれふかゝるべし。常に國／＼よりあつまりて。おほき時はねよはく。旁／＼に分れて。すくなき時は音つよし。まことやみづからなかずして。人の口をかりて音をふるゝこと。あだにあやしかりける。虫のしわざなり。たゞ富貴ふきの場ばにはあそべる事をよろこびて。貧賤ひんけんの籠かごに入い。事を恥はづ。しかはあれど家／＼にかひとられ。唐櫃からぶの中の辛からめ見しより。ながく晝ねをとどめて。いつとなく滅失めつしつけるにぞ。人々は皆あきれ果待はられける。

疝氣ノ傳

李 由

○瘧は病の名にして。氣をつむ事山のごとしとは。素間の説なり。いづれの臟腑より出る事をしらず。陰經に城郭をかまへ。淫囊をかくれ里にさだむ。常は腰のあたりに逍遙して。火箱燉母の陽氣にうそぶく。かれが一世の手柄をかぞへば。花に啼。梅に囀る時。人のとかめをうけず。卯の花に千聲萬聲を叫び。陰を感じては。秋の野もせの聲よりもしげく。時雨ふり初る比。火燧にやりわたしては。きりくすのよはりにひきかえ。高音をはりても。庇負比丘尼の働も見えず。公界に出て不圖とりはつしても。おのづから咎を疝氣に蒙らしめ。病氣不相應の大食も。かれが病の色に取なし。青ざめたる顔色も。ふく病やみと名付がたし。貴賤老若。男女小兒のさかちもなく。又は虚實のわかちもなし。大雪をしり。雨氣をさとり。土用八專には毎度聳起して。胸膈に横たはり。痰を帯ては眩暈を起し。恆仲をしては胸をおどらす。世に醫術の良薬ありて。三和五積の煎湯を施し。あるは蕎麥切のおろしに驚き。芥子番椒に目を醒して。斗方を失ふ時か。飛脚の膈にかくれ。瀉腹の勢ひにさそはれて。不圖此界に下る時。矢場に杖のさきに巻出されて。果は六條河原にさらされて。尸の上の恥辱をかうむる。一陣やぶれては殘黨まつたからずして。終に太平を誦ひ。腹つゞみを鼓いて。天下戸ざしをわすれたり。

ハ橙や疝氣治る御代の春

直指傳

○百年後の人に傳へて云。俳諧直指の傳あり。たとひ上手の名ありとも。理屈あるは。眞の直指の俳諧にはあらずと知べし。むかし守武宗鑑より以來。興をとる物はいかいと名づけ。實ある事はかつてしらず。先師はじめて。躬恒貫之の魂を見ぬき。正風幽玄の實を得たり。道のべの木鐘は馬に喰れたるより。あら野猿糞に至つて。正風の躰を髓に顯はせり。俳諧中興の開山となつて。是より翁とは稱し侍りける。されば其風になびく門葉。里にみち。巷にみり。されど理屈の境にまよひて。直指のいかいは一人もなし。夫理屈を離るゝはやすし。理屈をはなれたる後は。趣向をはなれ。手に携る一物もなし。人鷹のほのく。赤人の田子の浦の場所は。先師のはいかにして。ふるくざひかへりたる事は。たゞ百人一首の歌を見るがごとし。無爲の妙句はいひながして盡す。跡に光明の光を放つ。理屈の句はつまりて跡へもどる。是彼、光明をあやまり覺て。終に理屈の境をしらず。和歌は貫之より甚俊。俊成に傳り。連歌は宗祇宗長とつゞく。今先師の俳諧血脉相承の者を聞す。我東に趣き。始て師にまみゆる時。旅の句問れけるに宇津の山にて

八十圍子も小粒になりぬ秋の風と申ければ。師驚ていへり。汝何れの教によつて。愚考が流を見屈たるやと問。我あら野猿糞を師とすと。吾子は俳諧の集を見る者なり。今わが陽は見ぬかれたりといふ。再會の日。嵐蘭子に語つて云。我門人の器をもとめて。はいかいを残さむと思ふに。昨日許子に會して我望を休せり。撰集に我魂をとどむる時は。後代許子がごときも又あるべし。千歳の後も。愚考が血脉は朽ざる事をしれり。其後三月盡の夜。師

來りて。終宵閑談して衣更ころもがへの句を望のぞめり。我一兩句いへどいまだ叶はず。師云。すべて世の人。句の髓たまを好む。上手はあやうき所に居まり。されば上手の上には。かならず仕損じおほし。愚老が當歳たしか且。

年／＼や猿にきせたる猿の面は。まつたく仕損じの句也と。我問。師の上にも仕損じありや。答て云。毎句あり。仕損じたらんに何のくるしみかあらん。下手は仕損じを得せずと。我此時はじめて眼をひらきて。

へ人先に醫者の袷あはや衣更といへば。師云。是也。吾子が俳諧の底は此所にてぬけたり。はいかに底ある者は。新古にわたりて自由を得ず。愚老は常に許子が行末を恐れて。みだりに句をいはず。諸門人由斷すべからずといへり。當時もてはやす門人の俳諧は。全く先師の流にはあらず。晋子は作を好みて。己おのが一風を立たり。猶傾かたむ日の風躰は。はいかいの名を改め。餅とも酒とも名つけたらんに。何のたがひかあらん。東花坊は賢かしこき者也。先師身まかりて後。みづから上手といはせ。師説にうとき事もあるにや。虚實新古の取ちがへも有べし。俳諧を弘ひろむるには利ありて。はいかいの道を残す爲には。おほきに害あり。他の俳諧の事は。おいて論ぜず。其角支考は下手にてはなし。先師の口僻くちがへはよく眞ま似にける。芭蕉流にはあらず。はせを流正風躰の血脈を得たる者は我也。當時ははいかに酔よて甲乙をしらず。後世は忽たちまち醒さて善惡を定むるには遠慮なし。其遠慮なき人に正風躰を示しめす。

へけふ限の春の行方や帆かけ船
 へ春なれや田の青苔に啼蛙
 へ四五月の卯浪さ波やほととぎす
 へわが跡へ缺口立よる清水かな
 へ欄干にのぼるや菊の影法師
 へ看經の間を朝がほのさかり哉
 へ初霜や鐘樓の道の杳の跡
 へはつ雪や治る江戸の人こゝろ

是先師滅後の句也。先師生前の耳を驚せざるも無念にして。今又一人も。此句の勝を聞人なきこそ。猶又無念の事なれ。後人芭蕉翁の血脉。嗣人なしといふ事なかれ。今此傳を讀んで。定て過當といはむ。謝して云。過當人も死し。又過當といふ人もほどなく死せむ。これその怒をやはらぐる處なれば。かならず見ゆるしおくべしと云々。

碑類

壺ノ碑

在_二奥州市川村多賀城_一

○つぼの石文は。高さ六尺あまり。横三尺ばかりか。苔を穿て文字かすか也。四維國さかの
 の數里をしるす。此城。神龜元年。按察使。鎮守府將軍。大野朝臣。東人之所里也。天平寶
 字六年。參議。東海東山節度使。同將軍惠美朝臣。修造而。十二月朔日とあり。聖武皇
 帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る歌枕。おほく語り傳ふといへども。山崩れ川落て。
 道あらたまり。石は埋れて土にかくれ。木は老て若木にかはれば。時移り代變じて。其跡た
 しかならぬ事のみを。こゝに至りて疑ひなき千歳の記念。眼前に古人の心を閱す。行脚の一
 徳。存命の悦び。羈旅の勞をわすれて。涙もおつる斗になむ。

笠塚ノ碑

李由

○江東平田ノ邑。光明遍照寺の地に。先師はせを翁の笠塚あり。十四世の僧某。舊門に入て學
 をつむ事二十餘年。恩は琵琶湖より深く。をしへは打出の眞砂より高し。朝には香華を備へ。
 夕には句を鍊て。推藏を定めむ事を祈る。むかし芳野山にのぼりては。花の明ほのを見せか

校訂者云
 猶へ朝編ノ
 誤

風俗文選卷之八終

け。竹植る日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に。時雨霰あられのいかめしき音を。侘られたる佛もなつかしとて。死後に此笠を乞こうけ。終に土中にこめて。門人各一句をさゝげて。かの塚に同じく納む。世に報恩を残したる。長崎に尾花塚。深川に發句塚。越中に翁塚。木曾塚は直に遺骨を葬る地なり。されば西行の塚とて。國くにに残したるも。此類たぐひならん。あなかしこ。死後の門人。師にまみえぬ事をなげく事なかれ。はやく此塚に來り。季札きさが劍をかけて。一句をたてまつらば。生前の門葉にひとしかるべしと。弟子李由字買年諱なづでこれを書かす。

風俗文選卷之九

辯類

詩歌諷諧辯

丈艸

○一士あり。火燧壇上に誹謗を把て。諸生に示して曰。秦平聲震つて。風雅四海に波わく事久し。中にも俳道の一流。あらゆる國郷に入わたりて。村童野老も干麥を流し。鉞杖を朽さむとす。然れども。詩哥の高みに涼居て。古人よぼりする輩は。にがしく弾指していへり。渠がこと。なんぞこゝろざしをやしなひ。道におもむくたよりならむや。ひとへに滑稽の雑口。虚言にして。俗中の俗なるもの也と。今我一辯を出して。銘くの境をあらため道くのをし及べき所を判断すべし。まづ和歌の徳たる事。誰かあふがざらん。上つ代より傳へ來て。人の心を種とする言葉。其誠より實らるれば。鬼もあら男も頂をたるゝ正道なり。其様琳。たとへば雲の上人の。衣冠つやゝかに。帶笏けだかうして轅の中にいませかるがごとし。青侍白丁はなぐしく。警よそほひ。住吉玉津島と氣色うかひ。あるひはよし野はつ瀬の遊山めきたり。たまぐには富士。淺間。須磨。明石の逆旅に。浦のとま屋の夕暮ま

ては。ながめ盡しぬれど。さすがに蝸壺の底さし覗きて。あはれしるにたよりなく。小鮎まじりに。竈馬鳴蟹の屋には。腰かくべき褥も見えず。まして野くれ山くれのはしく。牛道。鹿道。猿すべりの邊は。名を聞にも及ばず。これその位高く。官高きが故に。下に臨める風景。棄る物おほしといつつべし。詩ははなはだ無碍自在にして。志のおもむく處辭の隨ざるはなし。其飛行のすみやかなるありさま。かの名におふ。八匹の駿馬をまるめ合せて。飼にかふたるがごとし。手綱すれば。盤面にしじまり。鞭すれば。四方八極。時の間なり。況やその上の風流。山を見て後むきに跨り。句を録て手閤をなしぬ。鞍の上羸勝りにして。前後左右かけ障なし。嗚呼快なる哉。如何せむ。今是に乗るもの。おほくは桃尻なる事を。俳諧のかたちたるや。簀笠竹杖屨鞋しめつけて。朝立したるがごとし。京田舎去嫌ひせず。一所にあなまとひせず。雪の市中に押れ。陽炎の芝原にこけたり。あるは山寺の小料理になくさみ。土亭に逗留をあかれたるも。一段の笑ひなるをや。月ほとよぎすの曉を。木の根。岩ばなに寢覺て。又見ぬ方に歩をすむ。はてかぎりなき津く浦々。薩摩瀉。蝦夷が千島の門背戸までも。さらばいへ。残す物あるかは。是吾道の廣みにして。我あそび所といふべし。氣の向く處。目のおよふたけ。風せよやくと。募ておぼえず手をうちけれど。従者は例の茶に倦して。火の氣を打消し。勝手は夜半の時雨じみけり。

定ムル先ヲ後ヲ一辯

○林紅法師。むかし浪花にぐせられ侍りて。吾翁と物いひ。顔をもしれるける人なりしが。其頃は年いと若くて。風雅もねふたきころなるべし。此地に嵐青のおのこありて。其時の次手ならん。手水湯もまたなつかしき梅の花といふ句を。手水湯に竹椽あをし梅の花と。翁の生前に筆を添られたれば。かれは林紅が下にたゝむ事を恥はぢ。是は嵐青が上にあらん事をあらそふ。其あらそひは。まことに君子なるや。東花坊これが判者たらんといふに。いとけふたし。風雅に通じて。翁を見ざる嵐青は。見ぬ戀にあくがれ。翁を見て。風雅に通ぜざる林紅は。逢つてあはざる戀なり。いづれも戀の部にはありながら。心とけぬほどはいかにかまさらむ。くらふ山の嵐も吹あへず。あだし野の露もをきかはりて。八とせのむかし語ならば。我も其翁は戀しかりける。世に風雅の信まことあらば。其翁は湖南におはして。面白き人には見ゆべきとなり。されば風雅の心にあそべ。心の風雅をは求むまじき也。

逢坂も粟津も果は秋の草

豆腐辯

許 六

○むかし晝ひるとあけ。夜と暮たる時。豆腐といふ物一丁出て。名もなく。類もなく。甲もなく。乙もなし。たゞうまきと斗おぼえたるこそありがたけれ。それより小路ちみちに出生して。世々の聖賢に料理せられ。昔豆腐は。石部いしべ金吉とてすたり果て。今やうのおぼろめく物を。豆腐の聖とはいひはやらす。猶五倫五常の獻立を作りて。是は仁也。それは義なりと。急用

に取出す。七つ入、子の三つめ五つめを。求に應ずるには似たり。田樂一串にも。仁義は自然にありて。天地をつらぬく風味はもてり。折ふし藪賢人あつて。豆腐あへ物にせむといへば。朱子程子の鹽から口は。これを異端寂滅と配すれども。元來聰明睿智の飛助ならでは。此行過はならず。たとへば用名介が口傳云々隣家にあたつて。碓あうすを穿うてり。終日耳中に客たり。過去の聲は盡て。未來の音はひゞかず。たゞ一聲の碓あうすにして。終日一聲のからうす也。許由むかし。堯の天下をうけず。なりひさごもかしかましとて捨たり。天下國家のたくはへは。輕かろして弃するにやすく。耳中の飄ひまの著ちかは。重おもうして捨るに難し。巢父が牛をあらはざるは。元來許由が耳の汚けれたるをにくむなるべし。和漢同じ耳垢みみかた等が。ほめしるしたるこそ口をしけれ。されば前後なき事をみづからしらば。すたりたる田舎豆腐も。匠あひや一丁の豆腐に。異なる事はなかるまじかし。

天狗ノ辯

木 導

○萬の形かたちある物。いづれか畫圖えがにうつされぬ物はあらじ。されど眞向まきやう天狗ばかりはなるまじとて。繪かく人は常に笑ひ侍りけり。いかにぞや。天狗しりの古法眼も。正面の鼻にはこまりぬらん。此もの。神祇尺教にもあらず。人倫生類の部をのがれて。俳諧の爲には。よき道具ならむ。世の人の我慢長ずれば。鼻にあらはれ。天狗となりて。杉の木ずゑに居まを下しも。愛宕高雄の山住を好み。都の秋のなつかしとや。浮世の醜みにくのあたり近き。嵐の山の夜あらし

に。木の葉天狗ぞさそはるゝ。又は大峯かつらぎや。高間の山の花ざかり。富士の高根にねぶりては。月雪のふる里をわすれたる。浮世のさまぞあはれなる。されど名歌などよむべき顔にもあらず。かの里も出かはりやありけむ。虚氣たる男をたぶらかし。嫁取もせぬ宿に。磔を打かけ。火事をすかれたるこそうるさけれ。かゝる境界にも。何の奢かありて。無盡の沙汰には及び。天狗頼母子と人にはいはれ。弦めその一座につらなり。六波羅の酒盛は。酔狂ひの擧句もいぶかし。うるさき顔にても。花の都人を戀せめ。牛若殿に浮名をながし。心中のしるしにや。爪をはなし。果は竹生島に送られて。たから物の數には入ぬ。ある人。洛の大儒に天狗を問。これ深山幽谷のいきれより。かゝる變異は生ずる也。何の怪とするにたらんと。されば天狗の山谷のいきれといはど。麟鳳は聖人のいきれならん。尾長虫は糞土のいきれにして。虱は乞食のいきれなる事慥なるべし。

手足ノ辯

汝村

○甲冑のよろひかぶとをあやまり。行燈挑灯をとりちがへたるは。むかしより國中みな誤りおほえければ。却てあらためたる人を。あやまりといふも理ならん。こゝに一身の中。足をいやしとし。手を貴しと定め置たるは。いづれか賤とし。いづれかたふとしとせむや。いやしとて。終に斬捨たる人もきかざれば。持にこそ定。置たけれ。それ足は行歩を産として。外の用をしらず。沓木履をかけ。草履わらぢをはきて。直に土をふまず。居る時は。足袋襪

につゝみまはし。あゆみつかるれば。馬駕籠かごとに扶乗たすられ。千山萬水の間に坐して風情に嘯なまく。手は一身の奴やつこにして。定めたる産うぶなし。頭の虱しむを捫ひり。跟かかとのあかぎれを撫なる。至らざる所なく。又なさずと云事なし。是いやしき事の第一なるべし。貴人高家の傍かたはらに。侍女小姓のつとめあれど。廁かまの役ある事を開ひす。されば我脚あしにて。他の鼻端の塵ちりを拂はは。人怒いかつて我を罪せむ。人また我頭の蠅あぶを。足にて追は。我是をたふとしとおもへど。世の人我に代つて。にくみのゝしり。怒をうつして。我を阿方あほうと號なづすること。おほきなる僧上そうじやうなれ。其僧上人。蒲團ふとん簞かたしるに臥ふて。休する時も。かならず足を伸のすを一番とす。湯に入。人も。足からならでは這入こがたし。向後足にあたらしみをつけて。手を古風のふるみにおとさむ。但し徳利とくり子は。各別の沙汰さたなるべし。

人參ノ辯

許 六

○夫、人參は。元氣大補の聖藥也。からやまと。これを賣とす。とりわき三十年來の和醫。人參なくて。人を療やする事かたしと見えたり。邪氣濕熱陰虛火動のわかちもなく。人參くには。病家おほきに草臥くたたり。凡人參の斤兩はかぎりあり。かぎりなき人參つかひに買とられて。世界の人參威あをまし。時を得たり。價あ高直にして。凡夫貧僧の口に入事かたし。産は朝鮮を最上とす。其代物。たちどころに魂たまを失ふ。醫家朝鮮の産を好このむは。重きがうへの小夜衣。質しちに置より外はなし。彼、人參醫者を察し見るに。理屈人の利錢する心になぞらへ。又

は低人の價高直物にめでし。ひたすらたふとまるゝと見えたり。人參の力にて。あまねく人の命を助かるならば。邊塞醫療なき地は。人種は盡べし。たとへ死ぬるにもせよ。人參に殺さるゝ者なし。人參ある國は。人參にて人を助け。又人參にて人を殺す。生死の算用は。持にして置べし。されど大切の金銀ついえぬ方勝ならん。やまひに三ツあり。人參にてたすかる病。人參にて死ぬる病。人參なくて活るやまひ。此三ツの内。人參なくて事久ぬ方。ふたつなれば是もひとつの勝なべし。我沉痾老衰して。折ふし人參を用ゆ。唐の産。朝鮮の産。其功すこしもかはる事なし。醫家は人にあたへて。外より察し。病者は我吞て功を知。たまゝ病家に入て脈をつまみ。そこゝに尋ねちらし。病見どをしの顔つきにて。合點くで。歸らるゝなり。彼人參にもり殺され。忽あたりたる事をしらず。其功いまだとゞかずして。空しくなりたるに極ぬれば。又人參のきゝたるをも。たしかには知り給ふまじと覺束なし。きくとあたるとの境目もわかれざるに。朝鮮唐の産の微細の能は。知り給ふまじと。猶くおほつかなし。我おもふ。唐より渡す所の。數百方の醫書。皆唐人參にて組たる方也。若人參朝鮮にかぎらば。其國所を記すべし。唐人何の遠慮すべき。されば川芎鷓弓のたぐひも多し。それ萊菔は。尾張の産を極上とす。されど大根のなき國所。なくて事の欠たる事をきかざるがごとし。それ醫道。俳諧。よく相似たるべし。醫者やまひにむかひて方をつけ。作者前句題に望みて。趣向をよする所。其理屈をはなれ。つくつかぬの危き境は上手名人の手限同じ場所ならん。當時醫をまなび。歌道を習ぶ人を見るに。其稽古前後なり。まづ所作

を盡しからして。なを其道に精くわしからん時の。學文なるべし。これ古人上手の仕しかたなり。ざるを學文よりまなび入て。一切理屈にてすますゆへ。祭過まつりての皆掃除也。むかし丹溪。素問そもんを見て。四十より醫に入いる。古今の醫聖と稱す。すべて醫學は狭せまき物ならん。道を盡し。理を究きまむは。素問一部の事也。其餘は味噌鹽の獻立にして。以呂波寄の字盡を引よりもやすかるべし。今の上手めく人は。毎度素問の語で堅かため。本章の説せうをつばなかず。文盲の病家。平詞を信ぜずして。大きに漢字に驚おどろきて。上手名醫に極まむ。當世のやまひは文盲にて。素問本草を聞きけずして。彼名人の御藥はかつてきかず。ある人犬の吠ほかゝるには。虎こといふ字を。書て見すれば。忽たちにぐると習ひ置て。ある時人喰くひとびかゝりけるに。習の文字を書て見すれば。其手にくらひつかれけり。日本の犬は文盲にて。虎の字のよめぬがごとし。たゞ理屈より理屈にくひ入いる。是は上を見てゐる句。これは下を見てゐる句なりと。小刀製せの小細工は。みな素人しらに耳みみぢかければ。終に理屈にすゝめ入いて。理屈地獄じごくに墮おすなり。されば霍亂くわらんの靈藥は。はくらん病が買かなりとは。名人の一言なり。百年の後。若し理屈がすたらば。わが潜ひそむること葉も。又眞まこととなるべし。

射御ノ辯

許 六

○比類ひるいなき勇武の木陰をたのみ百年の高恩は。廣く天をいたゞき。三代の微祿は。徒いたづらに地をせばむ。是を食はる腸はらわたは。忠義をのべて形かたちとなし。武道を鍊はつ肉にくを作る。虜はたゆまず。目まじ

ろかず。能登殿の矢尻は。胸板むねいたにおれこみ。彦四郎が切先きりさきは。腹の皮におさめかくす。老は齋藤が髭ひげにちかより。年は諸葛が齡としに隣となり。嗚呼千行萬行の涙をおとし。三思一言の辭ことばを殘す。夫武士の武道だて珍しからずとて。商人のなすにもあらず。たゞ武士は。武士の眞似まねがよき也。さればとて。武士の武士臭くまきは。鼻を覆おほふ。おのれ／＼が家職の。ふるき事をしらず。魚物野菜のたぐひも。ふるき物はかならず臭くまし。武士の武藝を好このむといふは。本意にあらす。其武士幸さいに武藝に好當すあたれり。博奕遊興好かくつに曾まづてかはらず。武術力量をあてにおもふべからず。馬物具を頼むべからず。佐々木四郎は。わが氏姓の祖そなれど。生食いひすま頼みに宇治川の先をかけられたり。もし世に生食和墨わすみなくば。先のならぬも不自由なるべし。搦手なげ數萬の由斷人。一騎も残らず渡しぬれば。佐々木が鎌倉の荒言あやふも。すこしは是にて戻もどりけり。嘲笑あざわらふに似侍れど。佐々木。梶原になづまぬものは。おほきに褻はつたる言葉とは。かならず知べし。いとせ大坂表において。穴澤あなざはといふ天下無双の長刀ながなたの名人も。折下外記おろしもにたばかられて。終に組討には討れたり。一生の骨折は。此時一度の用なるを打わすれたる不覺仁の。穴澤をいふにはあらず。たゞ武藝を頼むべからず。むかしより。一番鎧をしたる人に。上手の號もな。又下手の號もなし。かくいへばとて。武藝をなすなといふにはあらず。武藝の名稱は。太平の代の看板なり。武藝とて。我役にあらぬ事は。せぬがよし。しらぬといふて恥はぢにならず。立身にしたがひ。役替にのぞみて。其時すみやかに當役は習ふべし其癖くせ當役は無沙汰にして。いらざる説經者の馬乘うまのり習ふたぐひならん。一藝すぐれたりとも。武の全きにはあらねど。

一藝をも愛し給ふは。大將の役なり。我わかゝりし時。此道にふかくわけ入。春の花のむなしくちり。秋の月もおもしろからず。あけては食をわすれ。暮ては寐る事をしらず。されど弓は力よわくて矢束を引ず。玉打は目にやまひありて細りにあたらす。此二いろの道は。口おしく欠たり。凡、手足にかぎりあれば。しりても持では益あるまじ。劍術は。母方の祖父にしたがひ。正法念流の兵法を學び。すでに未來記の奥義を傳ふ。祖祖父より四代の門弟。二千餘人の中。未來記を嗣もの纒三子に過す。これ劍術諸流の源也。鑑は横手物に利ありとて。父が術を繼。寶藏院の法印より。我に至りて五代なり。馬は惡馬新當流を學むで。かけひきの道は達者なり。此三のものは。一騎武者の手足にして。これをしらぬものは曾てなし。これに精からんとおもふに。太刀打はつよく首に斬つけ。鑑ははやく敵の胸腹を。突ぬくより外に道なし。馬は其品おほし。よく乗得たりとも。軍馬の上をしらぬ時は。おほきに欠たりとて。黃母衣の隨一。河合氏の秘術を尋ねて。常に數卷のおもむきを。ふところに納む。馬はわが足なりいたはる道をしらでは。息合病馬に疎しとて。太閤秀吉公の愛臣。桑島左近は和の馬師公也。此術をたづねとめて。百二十卷の秘方に渉る。馬の好惡をしらざれば。求る道に疎し。古今自利は一流にして。山上入道が傳也。世に馬を見るといふ人あれど。山上入道の名をだにしらず。まして深き習ひある事は猶しらず。往昔は此藝稱せられて。祿をいたゞくものおほし。今はしる人さへなくなりたり。これを段の自利とはいふなり。馬上の五物。鑑合。太刀打。早乗。早をりは。鞍證の善惡によれり。これをしりて求めざれば此事かなは

ず。大因幡三代より。代々の手曲をしり。寸法。曲尺合。残る所なくおぼえて。これらを常に肺肝の間にかくし。泰平の世の安居の樂となせり。汝ひととなり。筋骨つよく。力つきなば。おのが分限をしりて。當役を勵むべし。功成り名遂て餘力あらば。天地陰陽の理を探り。仁義五常の道を學びもすべし。これを文武の侍とはいふなり。かならず文にながるゝ事なかれ。武士は武道を先にして。文は後にと心得べし。今吾猶子十歳の時。遺誠のはじめに。此辭を書して。武の魂をいゝものなり。

表類

雨乞ノ表

許六

○皇天に位し給ひてより以來。四海の民を愛し。農業おこたらず。靈餉時をうしなふ事なし。あまねく御うつくしみの波は。八島の外までながれ。ひろき御めぐみの風は。いたらぬ里くもなかりけり。しかるにことしの夏六月。おほひに旱して。雨一寸ぢも降らず。千里草枯て赤地となり。百川水盡て川原となる。野老たふれふし。村翁餓つかる。牛羊唾かはき。犬馬舌こがれたり。白晝に星あらはれ。日月は赫々としてあかし。龍神の岩穴に引こみ。鳴神の駒も膝を屈してたゞず。土器の大豆は。忽いれこがれて。水晶の艾は。たちどころに火となる。白晝の鳥居は出て。葦原の變を感じ。鹿飛岩あらはれては。鋤者の勞を盡す。大堰柱の水いさかひには。鋤鍬の鋒先をあらそひ。鳥羽の田づらの古井を汲では。釣瓶のひまもなかりけり。されば國王もまことありて。政たゞしく。古代の風を興し。かりほの庵のあらはなるをあはれひ。寒夜のおかつきには。御衣をぬかせ給ふ。百官忠義を盡し。郡主民を撫ては。かぎりある貢物をゆるされけるに。天何の怒かあつて。かゝるからき目見せ給ふぞ。神泉苑の祈さへしるしなくて。布留の社の名のみ空し。牛を洗うては雨をいのり。養笠をかけては氏神をたのむ。天はやくあはれみをたれて。雨をほどこし給はゞ。御湯は大釜を盡し。

相撲はあたらしき鼻禪をかゝせむ。猶ひなびたる笠の躍もおかしく。装束出立は揃はずとも。借着ばかりはゆるされて。模様は天道次第たるべしと。庄屋肝煎謹んでかくのごとし。臣悲歎の情にたへず。拜表して以て聞す。

嘲
ニル
佛骨表
一ヲ

其
角

古文傳類准下讀孟嘗君傳之例

○むかし韓退之。表を奉つて佛骨を嘲る。今我、これを讀みて。退子をあざける。人死して骨となり。骨朽て土とかはる。佛骨何の王位をけがさむ。佛骨もし人を穢さば。禽獸の皮骨は。猶人をけがすべし。人は天地の靈にして。禽獸人に及ばず。夫、束帶のかざりには象牙をたうとび。珍簾の鋪物には。虎豹の皮にふす。鼈甲は笄につくり。尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸、牛角、鯨の鬚のたくひ。宮室を飾り。器物を造る。たゞき醢は。なめて口中を潤し。雉子の胴殻。燕骨は。嚙で直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし。禽獸をたふとしとするは。何の謂ぞや。若佛骨細工のたすけにならすといはゞ。はやく疾鬼にあたへて。銭かねとせざる。假令拂底の鬼なりとも。虎の革の贊鼻禪は取べしと。かれが淺見を嘲つて。しかいふのみ。

もしばらくは繩を打けり韓退之

讀ニ佛骨表一

厚 爲

○佛骨は西域さいやくの人の骨ほねなり。漢土を飛とこえ。日本に來る。豆腐とうふ菹じゆに足突つぎ給ふな。いらざる長逗留ながとどまして。厨子くしにこめられ。外とより銷じやうをおろしぬれば。大小用たうしやうにからき目見給ふこそあはれなれ。はやく手作の紫雲むらさきぐもに打うのり歸去給へく。

ハから鮭の舍利せりにならぬこそ過分なれ

陳情ノ表

支 考

美濃みの國山縣郡やまがは。在三輪さんりん明神社あけみ。清輔袋雙紙きよのすけのふくろ。記きニ此神詠このかみうた。東華坊とうわぼう作しレ文ぶん。奉かニ此神このかみ云云いふこと。愚謂借おろそ用李令伯りりやうはく之表題號のうらなひニ耳みみ。

○世に天地ありて。天地は人の父母とこそいふなれ。人は萬物の上うへにたてる物なり。その人に我われあり。その我われに東華坊ありて。西にしにあそぶ時は。西花坊にしはなぼうともいへり。東西の二華は。支考が坊號ぼうごうにして。野のにある時は。野盤子のばんしといひ。家いへにある時は獅子庵ししゐんといふなるべし。さは此御神このみかみの氏子うぢこにして。風雅ふうがはをのづから漂泊へうはくのたつきとぞなれりける。むかしは桑門そうもんに袂たもとを染ぞめて。ほのかに祖佛そぶつの影かげをしたひ。中なかつ比ひは翰窓かんとまうに灯あかりをとつて。ふかく孔老くうらうの腹はらを見むとせしも。おのれが智ちをたのみ。物の理ことわりにたどりて。たゞ春はるの蜂はちの窓まどにまるとるたとへにぞ侍りける。一とせ湖南くわんの幻住庵まぼろしゐんに。白頭はくとうの翁おきなを見て。才能さいのうは文字もじをはなれ。風雅ふうがは心をあそばし

むる物なりと聞て。此翁とあそぶ時は。酒にえへる人の。何ゆへならでも。たゞおもしろき
 こゝちにぞ侍りける。翁の曰。俳諧といふに。三ツの品あり。寂寞はその情をいへり。女色
 美肴にあそびて。麩食のさびをたのしみ。風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繡に居て。罵
 着たる人をわすれず。風狂は其言語をいへり。言語は。虚に居て實をおこなふべし。實に居
 て。虚にあそぶ事はかたし。此三ツの品は。ひきき人に。高き所をいふにはあらず。高き人の
 ひきき所をいふなりとぞいへる。されば此さかゝるは。人のほめ。人のそしる所なるを。ほめ
 られむとおもひ。そしられむとおもふ。をのれがおもひにまとひぬるをと。理ははじめてい
 たりぬ。事はつくすべからず。かくて俳諧は。まのあたりにありて。口まさにいはむとすれ
 ぬ。心のくまをつくさず。人のやすき所をまなばむとて。をのれはむづかしき奥をたどり。
 をのれむづかしからざらむとすれば。人は金玉の手づまをつくす。ふかゝらずしてあさく。
 あさからずしてふかし。朝におもひ。ゆふべにいねて。此心又やすからず。ある夜。曲翠亭
 にあそぶ事ありて。尾の荷兮が蔦の葉の一句を評して。俳諧はかくいひつくすまじきをと申さ
 れしに。さはとむづかしき夢の。さめたる心地ぞせらる。落柿舎のぬし。洒落堂のあるじも。
 おなじ夜にあそびに侍りて。我はかくおほゆるをといへば。人はさもおもはずとこそ。あざ
 むかるれ。よしや我心のせまりたらん時は。燒火の轉寐に。雪折竹をきよ。戸の節穴に。稻
 妻を見ても。我はかくまとひたりと。おもひしらんに。我はわがやすき所をしれりけりと。
 今宵はじめてぞさだめける。是よりあづま路のかたに旅立て。松島象潟のながめにあき。越

風俗文選卷之九終

の白根のしらぬ行すも。心づくしのたびねをだに。生の松原の名によそひて。いけるかひありとぞ見はてぬる。今年は老の名によばれて。此古里の春をもむかふるなるべし。人の命のさだめがたきに。執ずして食ひ。織ずして着る。我はた世の人に。何をかおふせたらん。入っては此神の光にてらされ。出てはかの翁の徳にあそぶ。俳諧はおのづから。人の上にははれて。我はいかいの人をあやまてるなるべし。人の俳諧のあしからんをば。我俳諧のあしき也。我俳諧のよからぬをば。神の風雅のよからぬをといふべし。まして夜居りの神心には。朝寐も身につみておぼすらんかし。此表をいさにくみ給ふな。疎はかうまで頼むましき物を。ただ俳諧に命をかふべくとも。四時の變化に私なからんことを。幣の御まへにかしこまりて稽首の涙をかけ奉ける。

風俗文選卷之十

論類

旅論

許 六

○陰陽にしたがふ蒼生は。これ皆天地の蜉蝣也。鮪食に生ずる蛆は。生れながらに糧に富口あきて。夜出る鳥は鶻にさはるをとりて。やう／＼おのが糧とす。さればとて糧のとほしきを歎き。俄に業をかへむ手段もなければ。木啄のつゝきまはり。蜘蛛の網を張て待より外はなし。つらく東西に奔走する旅客。糧の爲にせざる人稀なり。かの中に風雅に旅する人に代て。論をくはふ時。こゝに大國を領じ。大軍を將て。往來する人は。糧を求る事おほひなれば。又其罪も甚深し。又寶引の錢をたくはへ。十二灯をあつめて。ぬけ参りする二藏三藏。一錢の袖乞に満足して。五臟をやしなふ。かれと是とを論せば。二藏三八が上にたつ事かたし。一日の糧。一月の糧。一年のかて。一生の糧もとめたくはふる計其根ふかく。其源とをし。又馬士飛脚のやかからも。旅に生涯を果す。圓位。風羅のたくひも。旅に死なむとはかりて。心のまゝに終る。さればかたちの似て。志のたがふ所は。雲泥の論なり。我しことし

衣更着きよぎせのはじめより五月の半なまで。旅する事。すでに四百餘里。おのが身み上を論じて見る時。大軍の將は。罪とが重おもしいへども。其利益大きにふかし。吾われ今日の一錢をも求めず。五斗の米を荷になうて。東西に漂泊する事。馬子まご駕籠かきの論に落おて。終には並松の間に餓死がしせむさればとて。鮫さめしの蛆うごを願ねがひ。糞虫の糞に飽あけるを。うらむにあらず。

仁不仁論

北 枝

○桶たつくる人は仁にして。鏃やじりするものは不仁なりとかや。醫をなす人は國を醫し。醫スル人の名目に仁にして。實は不仁なるべし。病者多く療する人を。名醫とも。はやり醫者ともいふ也。其はやる所をよるこび。乗物さしめかして隙なからむは。不仁の第一なるべし。さればとて。かの蕪う醫者のはやらざるも。仁とはいひがたからん。たま／＼の病人とてむかへたらんをうれしと。羽織打かけ。時得たり顔に。はしり出らるゝこそこれも不仁なるべけれ。むかしもろこしに。矛盾ぼんごを一荷かにしてうる人あり。矛ぼとうらん時は。いかなる桶たもたまらずといひ。盾たてかふ人には。干將かんじやう鑊さくも。通とほる事あたはずといふ也。かたへの人きよて。其方が盾を。其方が矛にてとほさば。いかにやと問とれて。終つひにもいはずして。本國に逃にげかへりぬ。これを矛盾ぼんごとて。おかしきたとへにはいふ也けり。吾朝にはこれをやはらげて。慶庵けいあんとも。ゐしやぼんともいふ也。又は小村の道場坊も。薬をほどこす道は。仁者なれど。これもはやりをよるこばれて。縮細ちぢみ醫者いしやにかはる事なし。又は後生たすけむといふも仁の道にちかし。されど釋氏

も死をよるこび。鈴打ならしとふらはるゝは。これも不仁の沙汰なるべし。むかしより此譬を。穢多の伯樂とはいふなりけり。

蕎麥論

許 六

○天は天すぎ。地は地すぎにして。いづれの時。おもき命あり。又は誰人頼みあつらへ。陰陽五行を以て。萬物化生する事をさかず。聖人天地の沙汰を大きにほめたり。天地はほむれ共よるこびす。そしてどもいからず。これ皆聖賢の理屈にして。元來天地に分別はなし。天は升る事を好。地は降る事を好みて。四時の骨おり。晝夜の苦勞。人もやとはぬ潜上こそ。大きなる損なれ。それより人物山川草木鳥獸まで。おのが一筋に好入ッて。外の物好は更になし。雨は雨好。風は風すぎ。夏は暑すぎ。冬は寒すぎ。されば櫻に梅もさかず。鶯がほとゝぎすを鳴たるためしなし。聖人は聖人好。阿方はあほうすぎ。鬼は地獄すぎ。佛は極樂すぎ。人は人すぎ。我は我すぎより外はなし。世に儒釋道の好人出て。位階の足のためたるが如し。世々の方人ありて。わが好たる道の外なしとおもへり。五戒五常は。此方より出ると思へど。五倫五戒の聖曲人をはづれて。人一日のたゝぬ上は。儒佛なくとも事は欠まじ。儒佛崇敬の人。聖人佛より。飯一盃ふるまはれたる沙汰をさかず。たゞ士農工商の家業の外。さら／＼別に大道なし。當時儒好を見るに。敬の一字は胸中にありて外より察しがたし。たゞ坊主を惡み。佛をそしり親兄弟身まかる時。大きな棺槨をこしらへ。檀那寺のやつかいとする。

是より外によき事は見えす。異朝の法に。地を買とりて葬るは。大國の風俗にして。ふかきわづらひなきと見えたり。和國廟の爲に。地を買とらば。神代より日本半國は買とられむ。砂糖曲物にて埒ちちすること。佛家大きな才覺なれ。いにしへより鳥邊船岡とりへきふねがきに葬ほろけりあまりたる事をきかず。釋氏の事たる事。田畑もたで秋おさめ。蠶か飼かひせずして冬あたゝかなり。人間一種の建立にしてもし此法なくは。此ともがら。いづれの鳥にかわたさむ。佛法には精進日ありむかしは祥月しやうげき一日の沙汰なり。それさへ大小のくり合。閏月の相違にて命日のきり錐きりもみは覺東なきに。眷屬あまた出來て。飯料不足を補はむ爲。毎月にはなりたるとや。月〳〵齋米さいまいをやりながら。二親もたぬものなければ。一とせの中。二日はのけて。廿二日魚くはぬ日こそ口をしけれ。佛法修行の人を見るに。其なす業は坊主のまねなり。成就の時と見えて。くりくりと剃ひらまはし。袈裟衣けさしやういの仲間なかまに入いて。上品上生じゆんじやうじやうとおもへる時。其なり濟すましたる所を見れば。物も見事なる坊主なり。たま〳〵佛法をたのしみて。浮世をやすふおもはるゝ。人のなきこそ本意なけれ。儒佛の最初はあたらしからん。次第〳〵にふるくなりて。聖人佛も出給はず。是にはいかいを加へたらば。忽あたらしき聖人も出。當流の佛も出世し給はむ。昔し堯の二女を許ゆるしたるは。聖も舅しやうもも聖人の寄よあひ。孟子まに嫂せうおほるゝ時。さし合をくりはじめたるは。豈孟軻ちやうまうかの流行にあらずや。佛は功德をすけり。達摩たつまの無功德むく徳はいき過ながら。これ佛法のあたらしみならん。夫、當時凡家の人。聖人佛になりて何の益かあらん。たゞ一家の中の聖人にて。世のたすけにはなりがたし。其上仕官は浪人のもとひ。工商農業の人は。金銀田畑をか

すめとられ。道しりだけの損をして。たちまち非人乞食なり。その時例のふるみにおとし。時にあはぬとて仕舞けり。とてもなりにくき。聖人佛をうらやまむよりは。たゞ愚痴に金銀をたくはへ。世の爲。人の爲。ほどこし侍らば。生聖人。生佛とて。釋迦孔子より有難がらん。たとへば温飽を好人あり。其子は蕎麥切を好めり。蕎すきはうどんを誇り。温飽方はそばきをにくめり。日夜朝暮此論やます。むかしより。蕎とも麥とも。世の一統せざれば。蕎はそば好。麥は麥ずき。天は天ずき。地は地好には極れり。そしりてをかしければ誇り。ほめてあたらしき時褒るものは。我々大道のはいかいなり。

頌 類

俳 諧 頌

李 由

○はいかいもと和歌の一體にして。神代よりはじまり。更に連歌より出たるにあらず。其法式。連歌に相似たれど。あながち無言。新式になつむ事なかれ。俳諧。誹諧。誹説。滑稽。諧謔。謎字。空戯。鄙諺。狂言。九つの品にわけられ侍る。いかなるをいふにかあらん。まさしくしる人なし。公任經信ごときの人もしらざる事なれば。末代にさだむべきにあらずとは。御抄のおもむきなり。古今。千載。後拾遺等に見え侍れど。今のはいかいも。九ツの中には。相かなへるならん。これと國末代の風俗にして。四海ことごとくながれわたり。あまねきもてあそび物とはなりにけり。石筆の早態に。花月のおもしろみをし。火燧にずりこみ。障子の穴に。雪糞を吟じては。餘所の寒さを侘たり。獨居無言の行に倦す。旅店山野の道づれを求めず。豪貴にともなひ。鄙賤にまじはり。夜明しの會に。親の心をやすめ。年に似合ぬあだ口も。俳諧師にゆるされ。野老村童も。睦月五月のひまを伺ひ。馬士船頭も。山川萬里の勞をなくさむ。夫、俳は市中にあつて。山林のさびしきをうらやむものなり。全く山居の道具にあらず。目に見えぬ鬼を泣しめ。勇武の心をやはらぐることのは。詩歌連俳とも。其感ひとしかるべし。かの中にも。一言の活法に。白髪を若やかし。忽千歳の命を延る

は。ひとり俳諧の徳也。鄙言俗風とて。君子いやしめ給ふ。連歌は徳高うして。やむごとなき御も。あそびよりはじまり。宗祇一代は百韻に花三本なりしが。宗長の時。ふかくかなしみ。花四本。雨二つの勅許を蒙る。鯨は涛ありとて。喰ふ人の稀なるに。陰徳をかくし。俳諧俗流とて。捨られたるに。おほきなる手柄ありて。日くの流行に。新風をおこす。これ其徳のすぐれたる第一なるべし。

蕎麥切ノ頌

雲 鈴

○蕎麥切といつは。もと信濃ノ國。本山宿より出て。あまねく國々にもてはやされける。ヤれば宇治の茶あつて。同じく茶白石に名高く。伊吹蕎麥。天下にかくれなければ。からみ大根。又此山を極上とさだむ。酒と落々の風流物。誰しか是を崇敬せぬものはあらじ。世に道成寺の能あれば。其次は三輪にきはまり。鶴の料理過て。後段の時は。かならず蕎麥切の場所なるべし。常に胃の氣をめぐらし。諸齋を散じ。壽命を延る聖藥なるに。いづれの虚氣人か。中風の毒とあだ名をたてられ。蕎麥喰ぬ人も。頓死中風はするなるべし。たゞ蕎麥一人の罪となるこそ口をしけれ。近頃は饑貧屋の手に落て。所化寮の俄客に。青貝の手插荷ここみ。比丘尼宿の大よせに。錫の鉢をすえならふ。壁に紋書たる大瀆茶屋には。一本鎧の旅客をとどめ。寐覺の門前の何本もりに。通りの馬士を招く。有馬の夜食。淀の川舟の乗合。眞那精進のわかちもなく。をとこ女の去嫌ひもなし。夫蕎麥大根は。君臣佐使の付合なるを。

越路の國に。胡椒の粉の折かたり形かたを備そなへ。都の方には。山葵わさび薑しょうがにてやらるゝこそ本意なけれ。先師翁のいへる事あり。蕎麥切佛詣は。都の土地に應こたぜずとて。一生請合申されずとかや。花車を好みたる。あるへいとう盛もくるしく。又は一箸づゝの盛並べも。中ちゆうく待遠なれば。たゞつくね盛の大橋おほしにて。三盃目の時。はじめて本性には立もどりけり。仕舞限しりぎりの二兩にりゆうがさねは。無念無想の境界くわいがいになつて。うき世のおもひ出を申けり。

酒 德ノ頌

朱 廬

○伯倫酒德の頌作る。其德あげてかぞへがたし。さる德ありて。内損脾虚の病を愁へ。酒毒惡腫の痛を生じ。身をやぶり。德を失ひ。なま酔あかの號をとりて。朋友のまじはりを斷たぢ。破戒の過とがを蒙かかりては。佛の道にそむく。されば盜跖たうてきにも德ありて。伯夷にも損あり。これ其用る人によりて。其理のとりあやまりなるべし。我われ今酒の德を見るに。京奈良の酒店。伊丹いたみ渡わたの池の酒藏。日と身を潤し。月と身を潤す。綾羅錦繡に目を見出し。五味八珍に腹はらをこやす。ある時は吉原島原の揚屋にあそび。大臣とあふがれ。作善供養の場につらなりては大檀那の號をとる。是みな酒袋のしほり粕かすなるべし。きのふまでは下部しもべの藤次といへるものも。けふは何がし町の名主。宿老の列につらなり。小賢請酒の細望ほろぞと姓なまも。白壁をならべ。大釜の煙けむり絶る時なし。これ世に上戸といふものありて。酒の德は顯れたり。さあらば下戸はあまねく富とみるものによといへど。むかしより下戸のたてたる藏くらもなしとは。皆飲のみぬけの金銀かねぎんにて。三葉さん

四葉の酒藏とはなれるなり。是も又理のとりあやまりなるべし。其徳孤ならむやく。

石白ノ頌

芭蕉

○市中にあつて。俗塵によこれぬものは。げにそのはじめをよくするよりも。その終りをとぐることはかたし。商山竹林の猛士も。猶出てつかへ。寛平華山の上皇も。終りたしかならず。たま／＼これを見るに。たゞ石白のひとつのみ。聖一國師は。これをもて肉身をやしなひ。法身をしる。民家にはまた。麥刈そむるころよりも。糶こきおとす冬にいたるまで。片時も餘所にする事なし。其高き事を論ずれば。役優婆塞の庵の中にかくれて。彼たくひを道引きりの上に立べし。上と下とふたつなるは。ちからたらざる者の爲にもつはらなればなり。不斷土間にあつて。蕙より外を見ぬは。謙に居る事のとゝのへるにあらずや。かりにも黃姉の手にとられざることの。ありがたき事を。ふかくさぐりしるべし。目なだらかなる時は。かますを擔ふ老翁の出来て。こつ／＼とする音すみて。後は季札が劍を。塚にかくることをはづべし。名をぬすむ盗人はあれど。石白をぬすむ盗人はなし。また人の心のみださざるのいたりならずや。月さしのぼる夕顔の陰に。ひとりはをとろの髪をまくね。ひとりは佛のまねをするあたまなりにて。くるしき事をおぼえず。挽まはすちからに。其飢をたすくるは。文王の始につかへたまへるに事たがはず。やゝいま様の。むづかしき歌のふしにもかまはず。聲も唱歌も古代のまゝにして。枝もさかゆる葉もしげると。しはぶきがちに。わな／＼かれた

るぞをかしきや。

讚贊類

西行上人ノ像讚

芭蕉

○すてはてし。身はなきものとおもへども。雪のふる日は。

さふくこそあれ。花のふる日は。

うかれこそすれ。

神農ノ像讚

涼菟

○野にもね。山にも寐る人を。人は神とも佛とも思へど。薦着たる乞食は。門にもたしせず。この皇いかなれば十善の位におはして。手づかみに物はきこしめすらむ。さはいへ。春の野あそびには。酢味噌あらばといひおきけむ。慮外ながらもわれらが活計なり。

へ神農もおもへば昔に野蒜かな

團扇賛

荊口

○詩あり。歌あり。はいかいあり。おほくは班女が似せ箔つかひ。これこそ古手の打ぬきなれ。中にも山崎にすめるさる法師が

月に柄をさしたらばよき團扇かなとは。いふたりけりにて詮はなし。上弦下弦は。月の部に入らぬ合點も迷惑なり。今當流のちか道は。其その傍の炙餅。いかなる人も一串は。鹽梅よしに養して曰。

へ味噌つけてあぶらればよき團扇かな

入學ノ賛

許 六

○儒家何がしが猶子。洛に入つて道をまなぶ。賛していはく。もろこしに機杼七年の才といふは。鈍にして遅し。當時は三年にして。大木の幅する木あり。山斷すべからず。

へ本箱にまづなる桐の若芽哉

紫芝岡ノ賛

許 六

五老井四絶之一絶也

○靈芝の産たる事。王者仁慈ある時は。かならず生ずと。泰平長久の時をしりける。いとめでたし。されど聖代に。あはじくと待けむ心長さよ。さる心ながさにては。不圖うちわすれたる代もありけむかし。又地靈なれば生ずともいへり。ある書にいはいく。東坡夢に人家にあそぶ。堂西に小圃あり。古井の石上に石芝あり。上に紫藤を生ず。折て喰ふ。味ひ鶏蘇のごとし。予が五老井の上に。艸字藤あり。其西に紫芝岡あり。されば坡翁が夢は。余が五老

の地なる事明かなり。戯れに贅して云々。

靈芝よ

靈芝よ

田夫の孫の手となる事なかれ

禪僧の如意となる事なかれ

我きく。いにしへの韓氏は。楚にあつては。わづか執戟郎にいやしといへども。漢につかへては。元帥にのぼつて。終に大漢を興す。器物も又同じ。我朝と屋といふ。名物の茶碗は。魚店何がしが猫の飯器たるを。達人とつて萬貫の道具となせり。これ用ひらるゝと。用ひられざるとなり。あなかしこく。證文の出しおくれ。出損になる事なかれ。

書類

院ノ艶書

○やまとの國に梟ふくろうといふ鳥あり。鸞うさぎ姫をこひて。文かきやる。ことにそもじはまこともじ。いくたびも文かよはして。まことの文字の返し見るまで。

日蓮上人ノ報書

○新麥あたら壹斗。たかむな三本。油のやうな酒五升。南無妙法蓮華經なむめつぽうれんげきやうと回向まがいたし候。

以呂波文字後序

上古日本の文字ありて。今に用來るもの。兩三字あるべし。いつの比よりか。漢字わたりて。本朝の文字は。たえ果てしる人もなし。もと假名字といふは。萬葉書の事にして。訓と聲とを交へ用ゆ。これ以呂波文字のなき以前。男女尊卑。これをもて文字の用を達せり。源順が萬葉集のかな付も。聲と訓とのまぎらはしきが故なり。片かなは吉備公の製作にして。アイウエヲの五音相通の文字とす。大和假名とは此事なり。又いろは文字は。世に弘法の作とのみおもへるも。一決しがたし。一説に

以呂波仁保ノ土知利奴留遠

以上十二字護命の作。

和加與太禮會。門禰奈良牟。字爲乃於久也末。計不已衣天。安左幾由女美之惠比毛世寸。以上三十五字は弘法の作。

京の一字は傳教の作也。いろははもと四十七字なるを。傳教此一字を加て。邊鄙遠境の男女迄。王土の字をしらすべき心ざしにて。一二三より。千万億の數字は。聖德太子のかがへ歌を。こゝに添たりといふ。又は空海。勤操。傳教の三師。共に造ともいへり。又兼良の纂跡には。四十七字は天地自然の聲。彼漢聲を假て。和字となすとかや。さればいろはを國字と

いひて。天竺震旦になき字とはいひがたし。是まつたく漢字にして。草書の姿なるをや。文の躰は。長歌短歌のさまにして。あまねく末世に。手習ふはじめにぞなれりける。さるを後代此中の字性。とりあやまり。書あやまる事おほし。まづへの字は。ノのへにして。ためずして斜なるべし。これ。へとえの分にて。たはみたるを。ちぢみえといふなり。とは土也止の字にあらず。すべていろはは訓をとらず。皆聲を用るによつて。土なる事明なり。つの字に説々多し。たゞ門の字と心得へし。但傳。むは牟也。世に歩武とおもへるは。點をうつ所になづめり。またく歩武にあらず。點はムの押の點なり。むの字はおめての字にして。木篇に作るは非也。又をの字は遠の字なり。これを口のを。奥のむといふ。はは衣の字にて。ちぢみえといふは。兄の字に歸す。これ橋諸兄の兄なり。上代のいろは文字と。中比今様の字なりは。はなはだちがへり。次第にあやまりもて行て。あらぬ物になり果たり。そのかみ。源氏物語出る頃にさへ。はやとりあまれりとして。紫式部もこれを歎きたるを。當世野郎傾城の書ちらしたる字形には。正字の倣もなく。此後次第にしる人もなくなり果。いかばかりの字形にか。なり行むもはかりかたし。京極黃門定家卿の。かなづかひとて。定めおかれしより。歌道の傳授物にして。是をしらざるものは。無下の事なるべし。されど大和言葉に用る假名字には。まつたく字心なし。上古の萬葉書にて知べし。これ天竺の陀羅尼字の類ならん。假名遣一通は和國のものゝしるべき事にして。しるて吾佛語の上にては。ふかく吟味せむもむつかしかるべし。たゞかな書のたぐひには此以呂波の正字を。たゞしおぼゆるを。第一と

本朝文選ノ
 奥付
 五老井門人
 ノ次ニ左ノ
 氏名ヲ記ス
 荒氏魚路
 渡氏曰良
 仙氏武爰
 山氏孟遠
 次ニ左ノ發
 行書肆ノ名
 ヲ掲フ
 京師河二
 條上町
 井筒屋庄
 兵衛板
 京寺町二
 條
 書肆野田
 孫兵衛板

すべき事なり。文字のたゞしきもろこしにさへ文字をとりあやまりて。古篆の篆書に。たがふものおほし。眞は眞なり。行は眞より出る。草は古篆より出て。まつたく行をやつすにあらず。草書に精しからんとおもはゞ。篆字にわたつて。其源をたゞしてしるべし。されば和朝のいろは文字。も。此正字をもて。たしかに書ば。たとひ異朝にわたじたりとも。文字の正字はすみやかに。異國人もよみあかすべしと。九花亭の主人。余氏汝村。風俗文選かなづかひをたすけむが爲に。これを跋す。寶永三丙戌春三月ノ望。

右此本朝文選全部十卷者五老井許六先生之撰也嘗聞先師芭蕉翁雖有此志文章未調而止之先生十五年來繼此志終其功成雖然甚祕之深藏之門人等空歎朽文庫二三子合力而僭發書笈爲自他直其本書與書林井筒屋彫之梓全無一字誤最無類本只恐僭偷罪可蒙和歌三神御許者乎

寶永三丙戌年秋九月吉日

五老井門人

昭和三年十月十日印刷
昭和三年十月十五日發行

風俗文選 ★★

定價四十錢

校訂者

伊藤松宇

發行者

東京市神田區南神保町十六番地
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
菊地眞次郎

岩波文庫
364—365



發行所

東京市神田區
南神保町十六番地

岩波書店

電話九段二一〇九番
振替東京二六二四〇番

除式會英印刷

讀書子に寄す

岩波茂雄

岩波文庫發刊に際して

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。其廣告宣傳の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の良途なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇する

うたかたの記他三篇 森 鷗外著★
 水沫集より

綱島梁川集 安倍龍成編★★
 小公 子 若松 暖子譯★★
 パアネット著★★

希臘羅馬神話 野上彌生譯★★
 バルフィンチ著★★

好色五人女 和田 萬吉校訂★
 西田 難作★

ゲエテとの對話抄 エツケルマン著★★
 龜尾英四郎譯★★

千曲川のスケッチ 島崎 藤村著★
 島崎 藤村著★

ワグネルのスケッチ 菊池 登一郎譯★
 ロマン・ロラン作★

愛と死との戯れ 片山 敏彦譯★
 片山 敏彦譯★

布施太子の入山 倉田 百三著★
 倉田 百三著★

埋木 水沫集より 森 鷗外譯★
 森 鷗外譯★

オネーギン ブリシユキ作★
 米川 正夫譯★★

好色一代女 和田 萬吉校訂★
 和田 萬吉校訂★

ギルヘルム・マイスター(上) 林 久一譯★★
 林 久一譯★★

ギルヘルム・マイスター(下) ゲーテ作★★
 林 久一譯★★

民約論 ルソンの著★
 平林 初之郎譯★

マルクス資本論(一) 河上 肇譯★
 宮川 實譯★

マルクス資本論(二) 宮川 實譯★
 宮川 實譯★

マルクス資本論(三) 河上 肇譯★
 宮川 實譯★

マルクス資本論 續刊 (朱刊)
 河上 肇譯★

古今和歌集 尾上 八郎校訂★
 尾上 八郎校訂★

花傳 書 野上 彌生校訂★
 野上 彌生校訂★

スピノザ哲學體系 小尾 範治編★
 小尾 範治編★

蕪村七部集 伊藤 松字校訂★
 伊藤 松字校訂★

法の精神 上卷 モンテスキュー著★★
 宮澤 俊彦譯★★

法の精神 下卷 (近刊)
 モンテスキュー著★★

カラマーゾフの兄弟(一) ドストエーフスキイ作★★
 米川 正夫譯★★

カラマーゾフの兄弟(二) ドストエーフスキイ作★★
 米川 正夫譯★★

カラマーゾフの兄弟(三) ドストエーフスキイ作★★
 米川 正夫譯★★

カラマーゾフの兄弟(四) (近刊)
 ドストエーフスキイ作★★

日本書紀 上巻 黒坂 勝美編★
 上巻 黒坂 勝美編★

日本書紀 下巻 (近刊)
 下巻 黒坂 勝美編★

若いゲルテルの惱み ゲョエテ作★
 茅野 龍々譯★

勞賃價格の利潤 河上 肇著★
 マルクス著★

日本永代藏 和田 萬吉校訂★
 和田 萬吉校訂★

稲妻 小宮 登陸譯★
 ストリンベルク作★

青銅の基督 長興 善耶著★
 長興 善耶著★

水の 上 モウパッサン作★
 吉江 泰松譯★

經濟要録 佐藤 信忠著★
 佐藤 信忠著★

和歌の男其姉の死 志賀 直哉著★
 志賀 直哉著★

幽霊 曲 ストリンベルク作★
 小宮 登陸譯★

墨汁一滴 正岡 子規著★
 正岡 子規著★

恐ろしき媒 中野 実著★
 中野 実著★

作り上げた利害 ベナベンテ作★
 永田 寛定譯★

子守唄 シェルラ作★
 永田 寛定譯★

人間萬歳 許省小路實篤著★
 許省小路實篤著★

藝術經濟論 西本 正美譯★
 西本 正美譯★

世間胸算用 和田 萬吉校訂★
 和田 萬吉校訂★

300
丁
1922.12.15

自禁認識の限界に於て 宇竹の七つの謎 坂田 徳男著 ★	陸奥直次郎 長興 啓郎著 ★	福澤撰集 福澤 諭吉著 ★	人間嫌ひ モリスエール作 野口 存子譯 ★	二人女房 尾崎 紅葉著 ★	参考伊勢物語 扇代 弘賢校訂 ★	西鶴織留 和田 孤青校訂 ★	將來哲學の根本命題 フオイエルト著 植村 豐六譯 ★	申樂談義 野上 彌一校訂 ★	生命の不可思議 上ヘツケル著 卷後藤 格次譯 ★	生命の不可思議 下ヘツケル著 卷後藤 格次譯 ★	即興詩人上卷 森 鷗外譯 ★	即興詩人下卷 森 鷗外譯 ★	博士隨筆集 久保 幹綱 安倍 龍成譯 ★	クーパー博士隨筆集 中村 爲治譯 ★	佛蘭西文學史序說 ブリュネエール著 夏根 秀雄譯 ★
--------------------------------------	----------------------	---------------------	--------------------------------	---------------------	------------------------	----------------------	-------------------------------------	----------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	----------------------	----------------------	-------------------------------	--------------------------	-------------------------------------

道 イミターシヨ クリスチ 内村 達三譯 ★	草 夏目 漱石著 ★	獨逸國民に告ぐ 大イヒテ述 角田 伊藤著 ★	ブランド イブセン作 角田 伊藤譯 ★	地代論 マドモアゼル著 山口 正平譯 ★	加賀 河竹 默阿彌著 ★	笠 森 禮 三 河竹 默阿彌著 ★	赤垣源藏 河竹 默阿彌著 ★	孝子善吉 河竹 默阿彌著 ★	鼠小僧 河竹 默阿彌著 ★	實錄先代萩 河竹 默阿彌著 ★	縮屋新助 河竹 默阿彌著 ★	猶太人問題 久留間 兼次譯 細川 繁大譯 ★	科學者と詩人 ボアノカレ著 平林 初之輔譯 ★	生まざりしならば 正宗 白鳥著 ★	經濟學及謀利之原理 リカアド才著 小泉 信三譯 ★
------------------------------------	------------------	---------------------------------	------------------------------	-------------------------------	--------------------	----------------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	---------------------------------	----------------------------------	-------------------------	------------------------------------

歌舞音樂略史 小中村 清雄著 ★	フアウスト第一部 森 鷗外譯 ★	フアウスト第二部 森 鷗外譯 ★	泣董詩抄 藤田 泣董著 ★	七大哲人 オイケン著 安倍 龍成譯 ★	若き日の手紙 フイリッブ著 外山 樞夫譯 ★	みれん 森 鷗外譯 ★	この後の者にも ラスキン著 西本 正義譯 ★	現代のヒーロー レイルモントフ著 中村 白雲譯 ★	入江のほとり 正宗 白鳥著 ★	アナトール シュニツラ著 小宮 豊隆譯 ★	大石良雄 野上 彌生子著 ★	その妹 西著 小野實著 ★
------------------------	------------------------	------------------------	---------------------	------------------------------	---------------------------------	-------------------	---------------------------------	------------------------------------	-----------------------	--------------------------------	----------------------	---------------------

(以下續刊)

